

鹿兒島県史料

忠義公史料

第四卷

例言

一本書は、東京大学史料編纂所蔵本「忠義公史料」（初稿本を含む一九〇冊）を底本とし、これを「鹿児島県史料 忠義公史料」全八巻として刊行するものである。時代の範囲は、安政六年から明治五年に至る十四年間で、第四巻は慶応元（一八六五）年から明治元（一八六八）年の内容を収めて刊行した。

一底本の巻ごとに頁を改め、上段の頭初にその表紙を記載し、扉については表紙のわきに註記した。

一原編者市來四郎の掲げた見出しはそのまま掲げ、見出しを欠くときには、新しく「ハ」で掲げた。

一明治元（慶応四）年正月ノ一以降の分の編集については、原則として原編者の編集の体裁によった。また、見出しは原編者が掲げてないので、校訂者が新しく掲げた。

一原本などの現存するときは、努めてそれと対比して原本どおりに校訂し、文末に「〇〇所蔵本にて校訂」などと註記した。

一刊行巻ごとに、見出しに一連番号を附した。一つの見出しが数種の内容を含むときは、小番号を文首に附した。

一固有名詞については、できるだけ正字を用いることにした。また、特殊文字の「しめ」は、そのまま用いた。

一仮名は、原本または底本の体裁のとおりとした。変体仮名は普通の仮名に改めたが、江だけはそのまま用いた。

一平出・抬頭および闕字は、原本または底本の体裁によった。闕字のときは一字あけにした。

一日記・新聞・会議録および但書は、原則として底本の体裁によった。

一地図および花押は、写真等により原本または底本のとおりとした。

- 一 原註および原編者註（ ）は、できるだけ右脇に移したが、長文のものなどは底本の体裁によった。
- 一 新に註を附するときは、〔 〕を附して、原編者の註と区別した。
- 一 人名および地名については、国内国外を問わず適宜傍註を附した。その際、藩の呼称は維新史附録（維新史料編纂事務局編）により統一した。
- 一 人名等については、原編者の明らかな誤記は、校訂者が訂正した。
- 一 本文には適宜読点を附し、人名（外国人を除く）・地名・品名・数量等の連続するときには、並列点を附した。
- 一 朱書は、その部分を「 」で示し、〔朱〕と傍註を附した。
- 一 頭註および付箋は、「 」で行間に示し、〔頭註〕〔付箋〕と註記した。ただし、後筆のものは削除した。
- 一 欠所部および解説困難な箇所原編者註である本マ、と虫喰の箇所は、□ で囲み、本マ、・虫喰または（○○カ）と傍註を附した。
- 一 文意の通じない字または箇所には、〔ママ〕または〔衍カ〕・〔○○カ〕と傍註を附した。
- 一 点線……の箇所は、底本の体裁によった。
- 一 本文初めの内題、見出しの上の筆印、校正済・校了、第○○号の文字、後筆の傍線および傍点・鉤括弧、原編者が註記する予定の（ ）は、これを削除した。
- 一 重複して掲げている史料については、これを削除した。
- 一 欄外に掲げた年代は、それぞれの巻の表紙に記載してある年代である。
- 一 見返しに、「戊辰戦争錦絵」（図録維新と薩摩所載）を掲げた。

忠義公史料 第四卷 目次

例言

慶應元年(乙丑)

一	有川彌九郎佛国船大坂川口へ来着ノ報	九月十七日	一
二	大久保利通ヨリ西郷吉之助へ書翰	九月二十三日	一
三	外国奉行江書上 乙丑九月廿七日ノ飛脚十月七日宇和島へ着		七
四	薩州家来ヨリ建白		一〇
五	折田要蔵ヨリ大久保利通へ書翰	十月十四日	一三
六	日野資宗伝奏伝達	十月	一四
七	伊地知貞馨ヨリ大久保利通へ書翰	十一月二日	一四
八	西郷吉之助ヨリ黒田嘉右衛門へ探索云々ノ書翰	十一月十四日	一六
九	長州再討出兵達書	十一月	一六
一〇	京師御守衛達書	十一月	一六
一一	大久保利通ヨリ伊地知貞馨外二名へ書翰	十二月六日	一六
一二	桂久武ヨリ伊地知貞馨・市來六左衛門へ書翰	十二月二十六日	一七
一三	非蔵人日記		一九

- 一四 餘田三右衛門・井坂甚左衛門ヨリ黒田清綱へ書翰 五月二日……………三三
- 一五 南大一郎ヨリ黒田清綱へ書翰 十一月十七日……………三三
- 一六 武部諫尾ヨリ黒田清綱へ書翰 四月十五日……………三三
- 一七 伊丹重本ヨリ黒田清綱へ書翰 四月十二日……………二四
- 一八 水野正名ヨリ黒田清綱へ書翰……………二四
- 一九 南大一郎ヨリ黒田清綱へ書翰 五月八日……………二八
- 二〇 武部諫尾ヨリ黒田清綱へ書翰 四月二十一日……………二八
- 二一 本澤甚兵衛・鞍掛馬十郎ヨリ黒田清綱へ書翰 五月八日……………二八
- 二二 渡邊昇ヨリ黒田清綱へ書翰 十月二十九日……………二八
- 二三 森寺大和守ヨリ黒田清綱へ書翰 二月朔日……………二九
- 二四 寺田嘉兵衛ヨリ黒田清綱・堀為影へ書翰 四月二十三日……………二九
- 二五 南大一郎ヨリ黒田清綱へ書翰 四月十六日……………二九
- 二六 某 覚……………三〇
- 二七 藝州出張軍賦役ヨリ筑州宰府出張軍賦役へ書翰 五月二十四日……………三〇
- 二八 長藩野村右中ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰 蘆屋陣中 正月三日……………三三
- 二九 水野溪雲齋ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰 正月四日……………三三

慶應二年(丙寅)

目 次

三〇	西郷吉之助ヨリ蓑田傳兵衛へ書翰	正月五日	三四	
三一	黒田了介ヨリ西郷吉之助へ書翰	正月七日	三五	
三二	渡邊昇ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	長州藩士三名依頼事件	正月十日	三五
三三	福井藩中根軈負ヨリ大久保利通へ書翰	正月二十四日	三七	
三四	木戸孝允ヨリ坂本龍馬へ書翰	正月二十三日	三七	
三五	伊地知壯之丞自記		四〇	
三六	三吉慎蔵日記抄		四〇	
三七	西郷隆盛ヨリ蓑田傳兵衛へ書翰		四三	
三八	小松帶刀ニ上京ヲ命ス	正月	四三	
三九	軍備拡張ニ就キ両番頭上申書	正月	四四	
四〇	中山實善日記抄	正月元日	四四	
四一	小松帶刀ヨリ大久保一蔵へ書翰	四月十三日	四六	
四二	岩下が大坂ニアリテ在京ノ大久保ニ贈リタル書翰	五月二十八日	四八	
四三	出兵ヲ辞スル建白		四九	
四四	東久世通禧日記鈔		四九	
四五	小松帶刀ヨリ大久保一蔵へ書翰	五月二十四日	五〇	
四六	大山格之助兵ヲ率ヒテ太宰府ニ向フ		五一	
四七	長州処分ニ付幕府ヨリ奏聞	正月	五一	

四八	処分ニ対スル長州答弁……………	五二
四九	勝安房薩藩ノ出兵辞退書ヲ却下スヘカラサルヲ説ク……………	五二
五〇	柴山良助軍事費ニ関スル書類……………	五三
五一	朽木之詩……………	五三
五二	田中健之助ヨリ黒田嘉右衛門ヘ書翰 二月二日……………	五四
五三	西郷吉之助ヨリ蓑田傳兵衛ヘ書翰 京都事情 二月六日……………	五五
五四	桂右衛門ヨリ蓑田傳兵衛ヘ書翰 朝暮及ヒ英仏人ノ情況 二月六日……………	五六
五五	桂久武ヨリ伊地知貞馨ヘ書翰 二月六日……………	五八
五六	柴山氏書類 二月十三日……………	六一
五七	小田井蔵太ヨリ黒田・折田・三島ヘ書翰 二月十五日……………	六三
五八	小松帯刀ヨリ西郷吉之助ヘ書翰 二月十七日……………	六三
五九	土岐新兵衛報告 長州処分 二月十八日……………	六三
六〇	西郷吉之助ヨリ蓑田傳兵衛ヘ書翰 内外ノ時情 二月十八日……………	六五
六一	伊地知壯之丞ヨリ大久保一蔵ヘ書翰 二月十九日……………	六六
六二	柴山良助ヨリ野村宗七ヘ書翰 二月二十五日……………	六七
六三	平田大江ヨリ西郷吉之助ヘ書翰 二月二十五日……………	六七
六四	水野溪雲齋ヨリ西郷吉之助ヘ書翰 二月二十七日……………	六八
六五	長岡監物ヨリ伊地知壯之丞ヘ書翰 二月二十八日……………	六八

目 次

六六	松岡七助ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	二月十四日	六九
六七	宛名差出名不明書翰	七〇
六八	米国留学生	七一
六九	薩州侯建白 長州征討拒絶	二月	七二
七〇	在太宰府池田次郎兵衛ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	三月二日	七四
七一	在太宰府三原・關山ノ二名ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	三月五日	七四
七二	蓑田傳兵衛ヨリ大久保一蔵へ書翰	三月五日	七五
七三	三條殿内大山彦太郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	三月九日	七六
七四	幡島三郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	對州内証ニ就テ 三月九日	七六
七五	西田・津留両士ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	對州内証ニ就テ 三月九日	七七
七六	磯部勘平ヨリ黒田嘉右衛門へ謝状	三月十日	七八
七七	蓑田傳兵衛ヨリ黒田嘉右衛門外二名へ照會書	對州ヨリ借船一件 三月十三日	七八
七八	今井榮ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	三月十四日	七九
七九	三原・關山ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	三月十七日	七九
八〇	對州内証云々汽船借用事件黒田廻答書	三月十七日	八〇
八一	山田辰三郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	三月二十二日	八〇
八二	磯部・今井ノ二氏ヨリ黒田・星山へ書翰	三月二十二日	八一
八三	三條實美卿診察 前田杏齋	三月二十三日	八一

八四	莊村助右衛門ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	三月二十五日 (明治三年九)	八二
八五	南部彌八郎筆記	三月二十六日	八二
八六	蓑田傳兵衛ヨリ黒田嘉右衛門へ照會書	三月二十七日	八四
八七	幕吏小林甚六郎博多港へ乗入云々ノ報告	三月晦日	八五
八八	幕吏小林甚六郎五卿受取ノ為メ來博人名		八五
八九	軍政拡張ニ就キ軍役掛上申書		八六
九〇	陸海軍ニ權ル事務遅緩無キ様達書		八七
九一	佐々木寛蔵ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	三月二十八日	八七
九二	月形洗蔵・野村望東尼詩歌		八七
九三	慶應三卯三月薩藩ヨリ陽明殿江差出候書付写	偽文	八八
九四	道島家記抄 小笠原使者云々		八九
九五	天下ノ形勢ニ就テ藩内布達		八九
九六	軍役知行高制限布達	三月	八九
九七	柴田日向守等建言 内外ノ事情及ヒ薩長ノ關係	三月	九一
九八	新納駿河書類	三月	九六
九九	五卿家從等へ訓令		九七
一〇〇	薩藩申立廉書		九八
一〇一	佛・英・米ノ三國へ書生ヲ出ス		九八

目次

一〇二	藩政大改革分担御親達	四月朔日	一〇一
一〇三	桂右衛門ヨリ伊集院伊膳へ書翰	太宰府五卿警衛交迭	四月二日	一〇一
一〇四	伊地知壯之丞ヨリ大久保一蔵へ書翰		三月四日	一〇二
一〇五	今井榮ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	江戸へ出立ニ就キ	四月六日	一〇二
一〇六	伊地知壯之丞ヨリ大久保利通へ書翰		四月十日	一〇三
一〇七	神代勝兵衛ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰		四月十三日	一〇四
一〇八	水野溪雲齋ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰		四月十三日	一〇五
一〇九	伊地知壯之丞ヨリ大久保利通へ書翰		四月十日	一〇五
一一〇	五卿警衛ノ為メ重ネテ派出兵ヲ命ス	道島家記抄	四月十四日	一〇五
一一一	多田莊蔵ヨリ黒田・大脇・染川へ書翰		四月十四日	一〇六
一一二	再討出兵謝絶上申書	四月十四日	一〇六
一一三	神代勝兵衛ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰		四月十五日	一〇七
一一四	三宅左近ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰		四月十九日	一〇八
一一五	大久保一蔵ヨリ島津伊勢外二人へ照会	板倉閣老下議論	四月十九日	一〇八
一一六	在太宰府大山格之助ヨリ同姓仲兵衛へ書翰		四月二十日	一一〇
一一七	伏水大黒寺へ奉納書之写	文久二年四月二十三日	一一一
一一八	桂右衛門ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰		四月二十六日	一一一
一一九	小寺與兵衛ヨリ大脇彌五右衛門へ書翰		四月二十七日	一一三

- 一一〇 小松帶刀ヨリ桂右衛門へ書翰 久光公御上京御断其外 四月二十八日 一一三
- 一一一 当時俗論ノ説 鹿兒島ニテ 四月二十九日 一一六
- 一一二 小松帶刀へ海軍掛ヲ命ス 四月 一一六
- 一一三 諏方數馬履歷抄 一一六
- 一一四 平常軍服用フヘキ云々達書 四月 一一七
- 一一五 巷説 四月 一一七
- 一一六 中路権右衛門ヨリ内田・吉井へ書翰 一一八
- 一一七 道島家記抄 民間之説交々 一一八
- 一一八 小松帶刀へ達書 四月 一一九
- 一一九 黒田嘉右衛門ヨリ桂右衛門へ書翰 太宰府ニ於テ云々 四月 一一九
- 一二〇 政務大改革ノ御親書 五月朔日 一二二
- 一二一 餘田・井坂ノ熊本藩士ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰 五月朔日 一二二
- 一二二 小松帶刀へ陸軍掛等ヲ命ス 五月三日 一二三
- 一二三 福島新二郎書翰 五月五日 一二三
- 一二四 寅五月八日筑前・久留米・薩州・肥前・肥後五藩江御達 一二四
- 一二五 藩制大改革ニ就テ官制名称ヲ改ム 五月十二日 一二五
- 一二六 英国公使来ニ就テ達書 五月十五日 一二五
- 一二七 伊地知正治ヨリ西郷・吉井等へ書翰 五月十五日 一二五

目次

一三八	島津大隅守ヨリ尾張大納言へ書翰 尾州家蔵 五月二十日	一二六
一三九	折田要蔵ヨリ大久保一蔵へ書翰 五月二十二日	一二七
一四〇	土持佐平太ヨリ黒田・川畑へ藝州ニ於テ探訪ノ報告 五月二十四日	一二八
一四一	別冊之一 五月	一二九
一四二	別冊之二 五月	一三〇
一四三	海軍方設置布達 五月二十四日	一三〇
一四四	岩山壮八郎ヨリ柴山良助へ送ル書翰 当時ノ形況一端 五月二十四日	一三〇
一四五	毛利左京外三名ノ書面 五月二十五日	一三一
一四六	西郷吉之助ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰 筑前事情 五月二十六日	一三三
一四七	寺院廃合命令	一三三
一四八	寺院廃合布達 五月二十七日	一三六
一四九	幡島三郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰 對州内証 五月二十八日(慶応元年九)	一三六
一五〇	清国福建兵備ノ書牘 琉球ヨリ届出 慶応三年五月二日	一三八
一五一	筑前へノ返答達 五卿筑前御渡海ニ就テ	一三九
一五二	毛利家処分ニ就テ土州書付	一四〇
一五三	道島家記抄 穴戸等召捕へタル始末	一四〇
一五四	薩藩堀某直太郎五月中旬上京筑前太宰府五卿警衛五藩之模様伝聞書 五月	一四一
一五五	小松帯刀ヨリ桂右衛門へ報告 四侯登營新將軍ト對話ノ概略	一四二

一五六	岩下佐次右衛門へ陸軍掛ヲ命ス	一四四
一五七	小松帶刀月番御免	五月.....	一四四
一五八	御側御用人役名ヲ廃ス	五月.....	一四四
一五九	諸郷兵上京予備	一四四
一六〇	五卿五藩へ分預達書	一四六
一六一	肥後熊本へ御当リ之書付	二月.....	一四六
一六二	神事掛ノ職員被設度建言	藩内.....	一四七
一六三	長州家老中ノ歎訴書	五月.....	一四七
一六四	壹岐守ヨリ達書	六月三日.....	一五一
一六五	石川清之助ヨリ黒田・川畑・大山へ長防開戦ノ報	六月四日.....	一五一
一六六	篠原冬一郎・黒田了介ヨリ大久保一蔵へ書翰	六月五日.....	一五二
一六七	金子與三郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	六月七日.....	一五二
一六八	宛名差出名不明書翰	六月十日.....	一五二
一六九	大山格之助ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	開戦ノ報 六月十二日.....	一五三
一七〇	川畑伊右衛門ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	防長ノ形勢 六月十二日.....	一五四
一七一	道島家記抄	佐幕ノ俗論 六月十二日.....	一五六
一七二	伊集院直右衛門ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	大島郡乱妨ノ始末 六月十五日.....	一六一
一七三	三雲藤一郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	幕艦大島郡砲撃ノ概況 六月十五日.....	一六一

目 次

一七四	一條十郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	一六三
一七五	中路権右衛門報告 小倉領海へ異国船渡来ノ事由 六月十八日	一六三
一七六	五代才助ヨリ桂右衛門へ書翰 氷製造器等ノ事 六月二十五日	一六五
一七七	島津久光ヨリ伊達宗城へ書翰 七月二十八日	一六六
一七八	道島家記抄 京師ノ形勢風説	一六六
一七九	英国ミニストルハルリ・ハルクス及同国水師提督薩州侯訪問記	一六七
一八〇	千八百六十六年第八月十六日木曜日横濱新聞	一七〇
一八一	三雲藤一郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰 六月十二日	一七〇
一八二	道島家記抄 七月二十六日	一七一
一八三	海軍規則 六月	一七二
一八四	油川鍊三郎ヨリ遠武橋次へ書翰 水口藩内訌 六月	一七二
一八五	英国軍艦三艘来麿 六月	一七四
一八六	長州再討拒絶ノ届書 六月	一七五
一八七	諸士祿高重出米課出諭達 六月	一七五
一八八	英国軍艦来麿ノ始末	一七六
一八九	英国軍艦碇泊中ノ説	一七六
一九〇	英艦ニ於テ操練	一七七
一九一	英国人調練	一七八

一九二	英艦事件……………	一七八
一九三	英人云々……………	一七九
一九四	英国軍艦渡来ニ付 六月……………	一八二
一九五	軍事心得達書……………	一八五
一九六	御親書ヲ以テ天下ノ形勢ヲ示サル……………	一八六
一九七	中路権右衛門報告 七月朔日……………	一八八
一九八	伊地知壮之丞ヨリ大久保一蔵へ書翰 七月八日(文久三年)……………	一八九
一九九	木場傳内ヨリ大久保一蔵へ書翰 七月三日……………	一九〇
二〇〇	別府壮右衛門届書 七月五日……………	一九〇
二〇一	池尻茂左衛門ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰 七月五日……………	一九二
二〇二	井上彦一ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰 久留米解宥ノ謝書 七月六日……………	一九二
二〇三	道島家記抄 七月六日……………	一九三
二〇四	当時京都雜報 中路権右衛門報告 七月六日……………	一九四
二〇五	非常節儉ニ就キ達書 七月八日……………	一九五
二〇六	西郷吉之助ヨリ大久保一蔵へ書翰 英人云々中將公御添削ノ御建白云々 七月十日……………	一九五
二〇七	蓑田傳兵衛ヨリ大久保一蔵へ書翰 七月十一日……………	一九七
二〇八	道島家記抄 鹿兒島事情 七月十二日……………	一九七
二〇九	諸藩去就 七月……………	一九八

二二〇	伊地知壯之丞ヨリ大久保一蔵へ書翰	七月十六日	一九九	
二二一	木場傳内ヨリ大久保一蔵へ書翰	七月十七日	一九九	
二二二	長防士民ノ嘆願書	七月二十二日	一九九	
二二三	伊地知壯之丞ヨリ大久保利通へ書翰	七月十八日(慶応三年カ)	二〇一	
二二四	道島家記抄	七月二十三日	二〇一	
二二五	長防士民諸藩へ嘆願	七月	二〇一	
二二六	長防征討出兵御断最後ノ上申	木場傳内名前	七月二十七日	二〇三
二二七	七月二十七日薩藩ヨリ會藩江文通ノ写		二〇四	
二二八	伊地知壯之丞ヨリ大久保一蔵へ書翰	七月二十九日	二〇四	
二二九	伊地知壯之丞ヨリ大久保利通外二名へ書翰	七月三十日	二〇五	
二三〇	伊地知壯之丞ヨリ大久保利通へ書翰	二十五日	二〇五	
二三一	小倉戦況聞書	七月二十七日	二〇五	
二三二	治乱ノ政務大改革調		二〇六	
二三三	前之濱へ英国船襲来後ノ手当		二〇六	
二三四	軍役知行高改革		二〇八	
二三五	御建白ノ手続	薩州建言	二〇八	
二二六	中路権右衛門報告	京都及ヒ江戸ノ雜説	二一三	
二二七	茂久・久光二公御連署御建言	七月九日	二一五	

二三八	薩藩出兵御断書へ御付札写	二二七
二二九	大坂出銀ニツイテ一説	二二七
二三〇	町田等帰国ニツイテ	二二七
二三一	西洋学問制度ニ関スル仰出	二二七
二三二	英国公使鹿兒島ニ来ル	二二八
二三三	島津圖書御家老同様云々達書	二二三
二三四	薩州建白奉呈ノ手続	二二三
二三五	薩州建言書ニ就キ會津藩照会書写	二二三
二三六	寅七月薩州侯ヨリ被差出届書写	二二四
二三七	巷説	二二五
二三八	禁闕守衛兵差登御賞詞	二二五
二三九	小笠原壹岐長崎差越云々	二二五
二四〇	当時京師ノ世説	二二五
二四一	慶應二年六月防長士民ヨリ薩州及ビ藝州ノ両藩へ差出タル書面	二二六
二四二	谷村小吉門口ノ張紙	二二九
二四三	太宰府出張大山路之助書翰	二二九
二四四	道島家記鈔	二三〇
二四五	新納刑部長防戦況報告	二三〇

目 次

二四六	金子與三郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	八月十日	二三一
二四七	安井仲平ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	八月十一日	二三一
二四八	三條實美ヨリ島津父子へ書翰及ヒ筑藩正奸人名	八月十七日	二三一
二四九	慶應二寅年八月廿一日外国方支配定役孤田謙吉内話聞書	真偽交々	二三五
二五〇	中路権右衛門探聞書	八月二十一日	二三七
二五一	勝安房守休戦ノ為メ藝州下向ノ報	八月二十二日	二三八
二五二	伊地知壯之丞ヨリ大久保一蔵へ書翰	八月二十二日	二三八
二五三	原市之進遭難ノ報	海江田武次 八月二十三日(慶応三年)	二三九
二五四	西郷吉之助ヨリ大久保・蓑田へ書翰	八月二十三日(慶応元年カ)	二三九
二五五	在太宰府川畑伊右衛門ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	八月二十六日	二四一
二五六	伊地知壯之丞ヨリ大久保利通へ書翰	八月二十六日	二四二
二五七	寺島陶蔵ヨリ伊地知壯之丞へ書翰	八月二十九日	二四三
二五八	小松・大久保・西郷等ノ建言	八月(慶応元年カ)	二四四
二五九	金子清邦ヨリ黒田清綱へ書翰	八月朔日	二四六
二六〇	道嶋家記鈔	藩士會津藩士ト私闘ノ概略	二四六
二六一	土肥謙蔵ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰		二四七
二六二	幕府探索書		二四七
二六三	薩藩ヨリ差出す十巻ケ条	建言拔萃	二四八

二六四	或人探索書 真偽交々……………	二四八
二六五	金子與三郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰……………	二五〇
二六六	西郷征長和議斡旋ニ付テ……………	二五〇
二六七	英国公使慶島ニ来ル 外国新聞抄訳……………	二五一
二六八	小松帶刀上京 八月……………	二五六
二六九	安井息軒ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰 悦之助君ノ為人……………	二五七
二七〇	伊地知壯之丞ヨリ大久保一蔵へ書翰……………	二五八
二七一	道島家記抄 九月……………	二五九
二七二	諸侯御召 九月……………	二五九
二七三	梅澤孫太郎下麿 九月七日……………	二六〇
二七四	江戸ヨリ九州へ来書ノ略 当時ノ巷説……………	二六一
二七五	道島家記抄 九月……………	二六二
二七六	水野溪雲齋ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰……………	二六二
二七七	大久保一蔵ヨリ西郷吉之助へ書翰 大英断ヲ促ス……………	二六二
二七八	神奈川滞在市來次十郎ヨリ新納嘉藤次へ照会……………	二六四
二七九	道島家記抄 当時鹿兒島風説雅俗混淆……………	二六四
二八〇	伊地知壯之丞ヨリ大久保利通へ書翰……………	二六五
二八一	伊地知壯之丞ヨリ大久保利通へ書翰 三月二十七日……………	二六五

目次

二八二	伊地知壮之丞ヨリ大久保利通へ書翰	九月十日	二六五
二八三	伊地知壮之丞ヨリ大久保利通へ書翰	九月十日	二六六
二八四	道島家記抄	九月	二六七
二八五	西郷吉之助ヨリ大久保一蔵へ書翰 攝海へ夷船渡来	九月十七日(慶応元年)	二六七
二八六	伊地知壮之丞ヨリ大久保利通へ書翰	九月十八日	二六八
二八七	大久保一蔵ヨリ西郷吉之助へ書翰 各藩御召其他重要	九月二十三日	二六九
二八八	伊地知壮之丞ヨリ大久保利通へ書翰	九月二十四日	二七二
二八九	道島家記抄		二七三
二九〇	農政改良意見建白書扣	九月	二七七
二九一	別府壮右衛門小倉戦争探聞ノ報告	十月朔日	二九七
二九二	道島家記抄	十月二日	二九八
二九三	五代才助ヨリ桂右衛門へ書翰 折田要蔵帰国及ヒ五代辞職云々	十月七日(慶応三年カ)	二九九
二九四	米田虎之助ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	十月七日	三〇〇
二九五	五代才助ヨリ桂右衛門へ書翰 紡績器械建設云々其他数件	十月十七日	三〇〇
二九六	榎原治人・野村靖之助ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	十月二十日	三〇二
二九七	田中顯輔ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	十月二十三日	三〇三
二九八	島津中将所労上京御猶予願	十月二十八日	三〇三
二九九	道島家記抄 小松・西郷上京		三〇三

三〇〇	徳川中納言殿参内事件……………	三〇四
三〇一	田中頼輔ヨリ黒田・東郷へ書翰 十一月四日……………	三〇五
三〇二	道島家記鈔 佛国行ノ一列 十一月……………	三〇六
三〇三	西郷吉之助ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰 十一月七日(慶応元年カ)……………	三〇七
三〇四	道島家記抄 十一月十一日……………	三〇七
三〇五	小松帯刀ヨリ桂右衛門へ板倉閣老ト問答之趣ヲ報ス 十一月十二日……………	三〇七
三〇六	小松帯刀ヨリ桂右衛門へ書翰 英・佛艦渡来ノ事情 十一月十二日……………	三一〇
三〇七	伊地知壮之丞ヨリ大久保一蔵へ書翰 十一月十五日……………	三一二
三〇八	小田村素太郎ヨリ黒田及ヒ渡邊へ書翰 十一月十六日……………	三一二
三〇九	南大一郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰 十一月十七日……………	三一一
三一〇	兵庫辺風説 悉ナ巷説 十一月二十一日……………	三一三
三一	佛国博覧会出伺 十一月二十四日……………	三一三
三二	英国船難民救助ヲ謝ス……………	三一四
三三	鹿兒島物価 道島家記抄……………	三一四
三四	道島家記抄 廃寺ノ概況……………	三一四
三五	道島家記抄……………	三一五
三六	道島家記抄 佛国博覧……………	三一五
三七	道島家記抄……………	三一五

三二八	寺島宗則傳抄……………	三二二
三二九	薩藩五代ヨリ請取商社示談箇条書 近衛家所蔵……………	三二四
三三〇	折田要蔵ヨリ大久保一蔵へ書翰 十二月二日……………	三二七
三三一	榎村半九郎ヨリ水本保太郎へ書翰 十二月二日……………	三二八
三三二	佐々木寛蔵ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰 十二月三日……………	三二八
三三三	安田徹蔵建言 楮幣發行 十二月三日……………	三二八
三三四	奈良原幸五郎ヨリ小松帶刀へ書翰 京都風説 十二月四日……………	三二九
三三五	梅澤孫太郎小松帶刀へ面談セムトス 十二月四日……………	三三〇
三三六	世良修蔵ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰 十二月五日……………	三三一
三三七	伊地知壯之丞ヨリ大久保一蔵へ書翰 十二月五日(慶応三年カ)……………	三三一
三三八	伊地知壯之丞ヨリ大久保利通へ書翰 七月二十日……………	三三一
三三九	大久保利通ヨリ伊地知壯之丞へ書翰 十二月四日……………	三三二
三三〇	道島家記抄 廢寺ノ變動概略 十二月八日……………	三三二
三三一	道島家記抄 道路ノ説……………	三三三
三三二	別府壯右衛門奥掛書役へ照会 長州戦況 十二月十二日……………	三三三
三三三	岩下佐次右衛門ヨリ大久保一蔵へ書翰 天龍和尚書籍進呈 十二月十三日……………	三三四
三三四	蒸氣船及ヒ軍艦乘廻リ云々ノ届書案……………	三三五
三三五	五藩連署五卿ノ帰洛請願書 十二月十四日……………	三三六

三三六	道島家記抄	十二月二十五日	三三六
三三七	木場傳内ヨリ西郷・大久保へ書翰	大坂幕兵引取風説	十二月二十七日(慶応三年)	三三六
三三八	小松帯刀同僚中へ照会書	猩々緋内献ノ次第	十二月二十九日	三三八
三三九	村山下総報告	主上崩御ノ詳報	十二月二十九日	三三九
三四〇	小松帯刀ヨリ桂久武へ書翰		十二月二十九日	三四〇
三四一	主上崩御藩内布告		十二月二十九日	三四一
三四二	酒井十之丞ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	五卿移転云々	十二月二十九日	三四二
三四三	准后立后御年布告		十二月二十九日	三四二
三四四	道島家記抄	桂小五郎来麿	三四三
三四五	寺院廢合掛ヲ命ス		十二月	三四三
三四六	言路洞開ノ布達		十二月	三四三
三四七	岩下方平ヨリ大久保利通へ書翰		二月八日(慶応元年)	三四四
三四八	征長処理一件		二月	三四五
三四九	南部彌八郎ヨリ蓑田外三名へ書翰		五月八日(慶応元年)	三四五
三五〇	西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰		七月二十八日	三四六
三五一	廣澤兵助ヨリ黒田・東郷へ書翰		十月二十八日	三四七
三五二	新納嘉藤二ヨリ吉井幸輔へ書翰		十月十七日	三四七
三五三	勝海舟ヨリ大久保一蔵へ書翰		十月二日	三四九

三五四	近衛忠房ヨリ島津久光・茂久へ書翰	十月七日	三五〇
三五五	木戸準一郎ヨリ黒田清綱へ書翰	十一月十四日	三五一
三五六	西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰	十二月十一日	三五二
三五七	西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰	明治四年七月十八日	三五二
三五八	西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰	十一月十一日	三五二

慶應三年(丁卯)

三五九	高崎兵部ヨリ小松帯刀へ書翰	述志	正月元日	三五五
三六〇	公卿方喪服	正月	三五六
三六一	正月三日松平民部大輔御出立御供人名	三六〇
三六二	主上御疱瘡ノ報	正月九日	三六〇
三六三	主上御惱ニ就テ謹慎布達	正月十日	三六一
三六四	篠崎彦十郎ヨリ西郷吉之助へ小銃買入レ照会	正月十六日	三六一
三六五	黒田了介大砲運用伝習云々照会	正月十六日	三六二
三六六	九條圓真外十一名謹慎解免ノ報	正月二十四日	三六二
三六七	蓑田傳兵衛ヨリ西郷・大久保へ書翰	正月二十六日	三六四
三六八	伊地知正治海軍振興ノ建白書	正月(明治二年九)	三六四
三六九	赤松小三郎横死ニ就テ本藩受教者碑文	三七一

三七〇	主上崩御ニ就テ久光公御上京ノ布告	正月	三七一
三七一	尚齒恩恵ノ令	九十歳以上ノ者 正月十五日	三七一
三七二	海陸軍創設令	正月	三七二
三七三	水野溪雲齋ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	二月朔日	三七二
三七四	森寺大和守ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	二月朔日	三七二
三七五	水野溪雲齋ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	二月朔日	三七二
三七六	京都守衛兵ノ名ヲ以テ久光公へ被附人名	二月八日	三七二
三七七	伊地知壯之丞ヨリ大久保一蔵へ書翰	二月八日	三七三
三七八	在大坂木場傳内ヨリ大久保一蔵へ書翰	二月七日(元治元年九)	三七三
三七九	桂右衛門ヨリ小松帯刀へ書翰	島津圖書上京云々 二月二十一日	三七四
三八〇	蓑田傳兵衛ヨリ大久保一蔵へ書翰	洋行書生等ノ件 二月二十四日	三七五
三八一	高前国役金取調書		三七六
三八二	岩倉具視ヨリ大久保一蔵へ書翰		三七八
三八三	池田次郎兵衛ヨリ黒田嘉右衛門へ對州事件ノ書翰	三月二日	三八一
三八四	寺島陶蔵外国記事		三八一
三八五	三條實美黒田へ面晤セラレントノ書翰		三八三
三八六	小松帯刀ヨリ伊地知壯之丞へ書翰	三月十九日	三八三
三八七	卯年三月仏人ヨリ告書翰秘写	玉里邸所蔵 三月二十日	三八三

目次

三三八	永平寺葛藤事件	三月二十一日	三三五	
三八九	水野溪雲齋ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	三月二十一日	三八五	
三九〇	水野溪雲齋ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	三月二十二日	三八五	
三九一	兵備ニ就テ禄高制限布達	三月	三八五	
三九二	兵庫開港ニ就キ御書取	三月二十四日	三八六	
三九三	兵庫開港ニ就キ久光公上京御促シ	三月二十九日	三八七	
三九四	山階宮其他二十三卿幽閉被免	三月二十九日	三八七	
三九五	御滞坂中御警衛之次第	久光公	三月	三八七
三九六	久光公御上京宿割及ヒ附駕人名	三八八	
三九七	久光公御上京從駕兵隊へ布令	三月	三九二	
三九八	大小銃等手当ノ令	英式ノ軍制	三月	三九三
三九九	軍賦改正ニ就テ知行高制限	三月	三九四	
四〇〇	久光公御上京布告	三月	三九五	
四〇一	久光公御上京ニ就キ俗論	三九六	
四〇二	軍賦改革ニ就キ地頭・郡奉行ニ達書	三月	三九六	
四〇三	大小砲隊名簿	三月	三九六	
四〇四	新田開発之達書	本藩達書	四月六日	四〇一
四〇五	福井藩青山小三郎ヨリ大久保一蔵へ書翰	四月七日	四〇三	

- 四〇六 大久保一蔵ヨリ西郷吉之助へ書翰 四月八日 …………… 四〇三
- 四〇七 福井藩士毛受・青山ヨリ大久保利通へ書翰 四月八日 …………… 四〇四
- 四〇八 大久保一蔵ヨリ小松帯刀へ書翰 四月八日 …………… 四〇四
- 四〇九 水野溪雲齋ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰 三條公ヨリ御召 四月九日 …………… 四〇五
- 四一〇 大極丸代価一件 四月十日 …………… 四〇五
- 四一一 神代勝兵衛ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰 四月十三日 …………… 四〇六
- 四一二 五卿取扱向照会 四月十四日 …………… 四〇六
- 四一三 全上回答 四月十四日 …………… 四〇七
- 四一四 福岡藩神代勝兵衛ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰 四月十五日 …………… 四〇七
- 四一五 三條殿ヨリ黒田嘉右衛門へ酒肴ヲ贈ラル 四月十九日 …………… 四〇七
- 四一六 久光公泉涌寺御参拜 四月十九日 …………… 四〇七
- 四一七 武部諫尾ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰 四月二十一日 …………… 四〇八
- 四一八 東久世通禧ヨリ薩長へ達示 慶応四年二月八日 …………… 四〇八
- 四一九 兵庫開港ニ就テ御達書写 本藩へ直達 四月朔日 …………… 四〇八
- 四二〇 伊地知壯之丞ヨリ大久保一蔵へ書翰 五月十四日 …………… 四一〇
- 四二一 手扣 五月二十日 …………… 四一一
- 四二二 給地高売買ニ就テ布達 五月 …………… 四一二
- 四二三 久光公御上京ニ就キ御慰勞 五月十九日 …………… 四一二

四二四	四藩連署建言	五月二十三日	四一三
四二五	四藩連署建言ニ就テ風説	五月二十六日	四一三
四二六	雇教師赤松小三郎建言	松平慶永宛	五月	四一四
四二七	横井平四郎書翰	四一七
四二八	吉井幸輔書翰	五月十日(慶応二年九)	四一七
四二九	西郷隆盛ヨリ大久保一蔵へ書翰	藩政大改革ノ概略	五月十日(慶応二年九)	四一九
四三〇	小松帯刀ヨリ大久保一蔵へ書翰	閏五月十五日(慶応元年)	四二〇
四三一	黒田了介ヨリ同姓嘉右衛門へ大坂城襲撃セムト云々書翰	六月二十四日	四二二
四三二	幕府ヨリ薩・土・宇和島等ノ藩々へ達書	六月	四二三
四三三	中條左衛門督ヨリ薩藩差出候書付并答書	四二四
四三四	石室秘稿抄	当時ノ風信	七月一日	四二六
四三五	伊藤俊介ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	七月朔日	四二六
四三六	西郷吉之助ヨリ後藤象二郎へ書翰	七月二日	四二六
四三七	市來廣貫日記抄	七月四日	四二七
四三八	久光御上京御慰勞云々布告	七月五日	四二七
四三九	島津主殿上京ニ就テ諸説	或人日記抄	七月七日	四二七
四四〇	御手許金ヲ海陸軍方へ差出ス達書	七月八日	四二九
四四一	洋行書生建言	白山雇入レニ就テ	七月九日	四二九

四四二	与力・御小人等支配替達書	七月十日	四三〇
四四三	吉田清成等ノ建白書	七月十日(慶応元年カ)	四三〇
四四四	職制改メ	七月十日	四三二
四四五	三島彌兵衛開墾ノ事実	七月十二日	四三二
四四六	京説云々	七月二十一日	四三二
四四七	兵庫開港ニ就テ種々ノ説	七月二十二日	四三三
四四八	久光公御帰国	七月	四三三
四四九	本田彌右衛門ヨリ大久保一蔵へ書翰	鹿児島ノ形況	七月二十七日
四五〇	西郷吉之助ヨリ大久保一蔵へ書翰	七月二十七日	四三五
四五一	五藩御届書	五卿帰洛ニ就テ	七月二十九日
四五二	洋風流行ニ就テ諭達	七月晦日	四三七
四五三	久光公御帰国ニ就テノ風説	事実	七月
四五四	上京ニ就テ乗船計画書	七月	四三八
四五五	對州藩多田捕縛セラル		四三九
四五六	現今時藩ノ時情ニ就テ布達	七月	四三九
四五七	岡藩士山縣小太郎小松帶刀ニ就テ意見書	七月	四四〇
四五八	西郷吉之助ヨリ大久保一蔵へ書翰	高輪借地云々	八月朔日
四五一	西郷吉之助ヨリ大久保一蔵へ書翰	八月十六日	四四三

四六〇	西郷吉之助ヨリ大久保一蔵へ書翰 長崎ニ於テ土州人外国人殺害事件 八月十六日	四四四
四六一	西郷吉之助ヨリ大久保一蔵へ書翰 大村兵士事件 八月二十二日	四四五
四六二	西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰 九月七日	四四五
四六三	西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰 九月二十七日	四四六
四六四	西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰 九月二十九日	四四六
四六五	五代才助ヨリ桂右衛門へ書翰 岩下へ随行員帰朝云々 八月朔日	四四七
四六六	島津中将・字和島少将建言書 八月六日	四四七
四六七	紙幣発行布告 八月七日	四四八
四六八	本田彌右衛門ヨリ大久保一蔵へ密翰 俗論蜂起其外 八月十日	四四八
四六九	久光公下坂願書 八月十二日	四五〇
四七〇	久光公下坂ノ布告 八月二十九日	四五一
四七一	預リ紙幣交換ノ布告 八月二十九日	四五一
四七二	外国人ニ対スル諭達 八月	四五二
四七三	漢医学稽古云々布達 久光公特旨 八月	四五二
四七四	紙幣交換布告 八月	四五三
四七五	銀相場布告 八月	四五三
四七六	医道振興云々ノ布告	四五三
四七七	山田孫一郎父母へ永別ノ書翰 九月三日	四五四

四七八	久光公御帰国ノ御願書	九月九日	四五五
四七九	藩令 紙幣交換并中將公御所勞御帰国云々	九月二十一日	四五五
四八〇	西洋形汽船ノ数	四五六
四八一	他国人止宿取締布達	九月	四五七
四八二	切支丹宗門取締布達 長崎浦上村云々	九月	四五七
四八三	菱刈・真幸ノ各郷地頭職居地変更ノ達書	九月	四五七
四八四	討幕說停止諭達	九月二十八日	四五八
四八五	佐々木寛蔵ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	九月	四五九
四八六	薩藩小松帶刀建白写 外国条約事件	九月	四五九
四八七	木戸準一郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	十月五日	四六二
四八八	木戸準一郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	十月十九日	四六二
四八九	上京請願者へ諭達	十月七日	四六三
四九〇	島津主殿上京	十月七日	四六四
四九一	長州ノ汽船入港	十月十日	四六四
四九二	大政奉還ニ就テ日記	四六四
四九三	大政奉還云々藩内布告	十月	四六六
四九四	茂久公御召御封物	十月十六日	四六七
四九五	佐幕論者建言ニ就テ御訓諭	十月	四六八

目 次

四九六	諸家重臣留守居等御呼出廻達	十月十九日	四六九
四九七	諸藩重臣御喚出	十月二十一日	四六九
四九八	渡邊昇ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	十月十九日	四七〇
四九九	幕府ヨリ八ヶ条伺	四七〇
五〇〇	徳川家ヨリ伺書へ御張紙之写 八ヶ条伺ニ就テ	十月二十三日	四七〇
五〇一	小松帯刀ヨリ伊地知へ書翰	十月二十四日	四七一
五〇二	諸藩上京御達書報告	十月二十五日	四七一
五〇三	吉井幸輔ヨリ在江戸益満・伊牟田へ密書	十月二十五日	四七二
五〇四	十月二十七日各藩重役二條城へ喚出大目附松平大隅守殿ヨリ達	四七二
五〇五	廣澤兵介ヨリ黒田・東郷へ書翰	十月二十八日	四七三
五〇六	前原・藤井ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	四七三
五〇七	伊地知壯之丞ヨリ大久保一藏へ書翰	十月二十九日	四七四
五〇八	藩内守備命令	十月	四七五
五〇九	言路洞開布達	十月	四七五
五一〇	出軍請願者へ諭達	十月	四七五
五一一	無名ノ紀事	四七六
五二二	鹿兒島ノ形勢及ヒ俗論党ノ流言	四七六
五二三	赤松小三郎暗殺セラル	四七七

五二四	兵庫小豆屋ヨリ届……………	四七七
五二五	岩下・市來帰朝 モンプラン来ル……………	四七七
五二六	仏人モンプラン及ヒ職工等来ル……………	四七八
五二七	太守様御上京布告 十月……………	四七八
五二八	慶應二年寅十月竹下盛徳日帳抄……………	四七八
五二九	島津忠寛来麿諫言……………	四七九
五三〇	岩下・五代対話五代演舌ノ大意……………	四七九
五三一	島津修理大夫・松平安藝守・松平土佐守議奏……………	四八七
五三二	茂久公御上京ニ就キ御親書之訓令其他 十一月……………	四九七
五三三	茂久公御上京届書 十一月二十三日……………	四九八
五三四	茂久公御上京御航路概略 十一月二十一日……………	四九九
五三五	従軍人某紀事 十二月二十三日……………	四九九
五三六	茂久公御上京ニ就テ御沙汰書……………	五〇〇
五三七	久光公燈下ノ御作 十一月……………	五〇〇
五二八	当時京攝ノ巷説……………	五〇〇
五二九	茂久上京道程 十一月二十日……………	五〇〇
五三〇	大膳大夫上京ニ付西ノ宮ニ滞陣シ其地方ノ人民ニ下シタル告諭文……………	五〇〇
五三一	相國寺山内宿陣ノ為メ借用照会 十一月三日……………	五〇一

五三二	茂久公御上京御発航……………	五〇一
五三三	手扣 十一月四日……………	五〇一
五三四	陣屋取締令 十一月……………	五〇二
五三五	宮中人事諸侯上京並ニ毛利家事情 十一月二十一日……………	五〇五
五三六	近衛左府辞官ニ付キ……………	五〇六
五三七	盛岡・岡山留守居重役召集 十月十一日……………	五〇七
五三八	慶喜ノ將軍職辞任ノ奏上書 十月十四日……………	五〇八
五三九	諸侯上京ニ付イテ 十月……………	五〇八
五四〇	十月二十日御達替ニ付イテ内田仲之助ヨリ關山糺へ書翰……………	五〇〇
五四一	十月二十日御達……………	五一一
五四二	寺島宗則建言 十一月二日……………	五一二
五四三	太守公御上京前仏国人白山建言之趣意聞書……………	五一三
五四四	肝付郷右衛門普請奉行ヲ命ス 十一月……………	五一五
五四五	伏見・鳥羽・會津戦御祝被下 十一月(明治元年)……………	五一五
五四六	禄高員数御届 十月二十日(明治八年)……………	五一七
五四七	積年勤王之為恩賞品(明治元年)……………	五一七
五四八	島津忠義ヨリ三浦安へ書翰 明治十三年十一月二十七日……………	五一八
五四九	木戸準一郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰 十一月七日(慶応二年)……………	五一八

五五〇	木戸準一郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	十一月十四日	五一九	
五五一	大久保一蔵ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	秋元家云々	十一月十五日	五一九
五五二	全	上	十一月十五日(明治三年九)	五一九
五五三	全	上	十一月十八日(明治三年九)	五一九
五五四	島津淡路守建言	十一月九日	五二〇	
五五五	小松帶刀ヨリ後藤象二郎へ書翰	十一月十二日	五二一	
五五六	大山格之助ヨリ小松桂へ書翰	大拳ニ就テ	十一月二十四日	五二二
五五七	大山格之助ヨリ桂右衛門へ書翰			五二四
五五八	寺師宗道日記抄	十一月		五二五
五五九	陸軍編制	黒田嘉右衛門調査		五二五
五六〇	海陸掛任命			五二七
五六一	諸郷軍賦			五二七
五六二	鎌田仙十郎・伊勢雅楽持切在高所分ノ伺			五二九
五六三	御先手大砲人数賦			五二九
五六四	長州藩冤罪申述	本藩へ依頼	十一月	五三〇
五六五	伊集院伊膳支配下へ訓諭		十一月	五三一
五六六	諸郷士英式兵隊組織設立		十一月	五三一
五六七	江戸各邸居住ノ輩下麿人名	定府卜通唱ス		五三二

目次

五六八	本田彌右衛門ヨリ大久保一蔵へ書翰	十二月朔日	五六六
五六九	主上崩御ニ就テ達書報告	正月四日	五三六
五七〇	藩士取締達書 京都邸ニ於テ	十二月	五三六
五七一	京都報告	十二月十四日	五三七
五七二	京都報告	五四一
五七三	近衛左大臣殿御辭職報告	十二月五日	五四二
五七四	江戸ノ形勢報告	十二月五日	五四三
五七五	藩制大改革 寺師宗道日記抄	十二月六日	五四三
五七六	大久保一蔵ヨリ後藤象二郎へ書翰	十二月七日	五四三
五七七	折田要蔵日記抄	五四四
五七八	茂久公御参内御断	十二月八日	五五一
五七九	朝廷大政御一新撰関・議伝被為廢止左之三職御確定	十二月八日	五五一
五八〇	京都ノ形勢報告	五五三
五八一	仁和寺宮警衛	五五四
五八二	京都報告	十二月	五五四
五八三	西郷吉之助ヨリ小松帯刀へ書翰	十二月九日(慶応二年カ)	五五九
五八四	大口ノ住人有村城之介京ヨリ書状	五六一
五八五	五藩ノ重役ヲ召シ戒嚴ヲ命セラル	十二月九日	五六三

五八六	吉井幸輔ヨリ益満休之助・伊牟田尚平へ書翰	十二月十日	五六四	
五八七	御元服並立太后等云々御達書	十二月十日	五六五	
五八八	政權奉還ニ就キ云々藩邸布達	十二月十日	五六五	
五八九	春山田中日記抄	十二月	五六六	
五九〇	大山彦八聞合書	十二月十二日	五六八	
五九一	得能良助日記	十二月十二日	五六九	
五九二	岩下佐次右衛門同僚へ照会	十二月十二日	五六九	
五九三	禁裏御警衛変更	十二月十三日	五七一	
五九四	御召書写	十二月十三日	五七二	
五九五	京都市中御触	十二月十三日	五七三	
五九六	春山田中日記抄	十二月	五七四	
五九七	池田猪之助日記抄	十二月	五七六	
五九八	新納嘉藤ニヨリ岩下佐次右衛門へ書翰	十二月十五日	五八一	
五九九	小松帯刀上京御達書	十二月十九日	五八二	
六〇〇	池田猪之助書翰	十二月十九日	五八二	
六〇一	京師報告		五八四	
六〇二	岩下佐次右衛門ヨリ小松・桂ノ両氏へ報告	京都ノ形勢	十二月二十七日	五八四
六〇三	京都通信	真偽交々	十二月	五八六

目次

六〇四	京都風説 真偽交々	十二月	五八八
六〇五	伏見巡邏奉命照会	十二月二十一日	五八九
六〇六	伏見巡邏被命ノ照会	十二月二十八日	五八九
六〇七	洛中取締ニ就テ邸中ニ布達	十二月	五九〇
六〇八	御警衛變更	十二月	五九一
六〇九	山城國中取締被命ノ達書	十二月	五九一
六一〇	大坂玉造士へ達書	十二月二十一日	五九一
六一一	大坂在勤木場傳内江戸藩邸焼亡等ノ報告	十二月三十日	五九二
六二二	十二月廿五日江戸御屋敷戦争等ノ次第		五九二
六二三	当時江戸邸人名		五九三
六二四	丁卯十二月廿五日江戸芝邸焼亡之事實概略		五九三
六二五	壬生前修理権大夫上京達書	十二月二十四日	五九八
六二六	少将公至急参朝御召	十二月二十四日	五九九
六二七	四藩兵隊天覧御達書	十二月二十五日	五九九
六二八	藩制改革刑法改正	十二月二十五日	五九九
六二九	帖佐・池田探偵書 江戸邸在勤	十二月	五九九
六三〇	立后冊命御沙汰布告	十二月二十七日	六〇二
六三一	西郷吉之助ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	十一月二十七日	六〇三

六二二	池田喜平次書翰	十二月二十八日	六〇三
六二三	大久保一藏ヨリ蓑田傳兵衛へ書翰	形勢ノ事実 十二月二十八日	六〇五
六二四	中原猶介ヨリ岩城喜左衛門へ書翰	十二月二十八日	六〇六
六二五	園田新左衛門ヨリ父母へノ書翰	切迫ノ事情 十二月二十八日	六〇七
六二六	伊地知柰右衛門ヨリ同喜十郎へ書翰	十二月二十八日	六一〇
六二七	西郷隆盛ヨリ蓑田傳兵衛へ書翰	十二月二十八日	六一一
六二八	島津家記抄	十二月二十八日	六一三
六二九	卯十二月二十八日付伊勢仲左衛門書翰ノ内		六一五
六三〇	伏見出兵ノ照会	十二月二十八日	六一六
六三一	中将様御召達書	十二月十八日	六一六
六三二	岩下佐次右衛門ヨリ新納刑部へ書翰	白山上坂事件外國布告ノ事 十二月晦日	六一六
六三三	太守公年始御礼參朝御断	十二月晦日	六一七
六三四	原市之進切害一件		六一七
六三五	久光公御上京布達		六一八
六三六	五代才助ヨリ桂右衛門へ書翰		六一八
六三七	伊勢左七郎ヨリ兄へ書翰	三月二十一日 (明治元年カ)	六一九
六三八	長崎奉行ト清國役人トノ往復書翰		六一九
六三九	大山格之助ヨリ大久保一藏へ書翰	九月十一日 (慶応二年カ)	六二一

目 次

六四〇	加世田士指宿静蔵送家書翰	十二月八日	六二一
六四一	加世田士西剛右衛門送家書翰	六二二
六四二	市來士高崎半兵衛書翰	六二二
六四三	加世田士土持雄四郎送家書翰	十二月八日	六二三
六四四	薩・長・土三藩合議ノ要目	六二四
六四五	薩・長・藝三藩大議ニ依テ事ヲ挙ルノ旨趣ヲ述タル文	六二五
六四六	三藩連署建言	六二七
六四七	金子清邦小伝 島津藩邸焼亡ノ概況	六二九
六四八	贈位者列伝	六三五
六四九	侯鯖録	六三七
六五〇	茂久公密示 王政復古ノ発端	六四〇
六五一	伏見市・在取締被命	六四一
六五二	大政奉還藩内布告	十二月	六四一
六五三	方今ノ形勢総論愚考 内田政風	六四二
六五四	薩・長・土・藝兵調練天覧	六四二
六五五	壬生修理権大夫上京	六四三
六五六	尾・越前侯参内ニ就テ参朝御達	六四三
六五七	戦死者恩賜	十二月	六四三

六五八	茂久公相國寺林光院御參詣……………	六四三
六五九	広ク人材御登用云々小松帶刀御召……………	六四四
六六〇	桂右衛門御召……………	六四四
六六一	長州薩・藝二依頼ノ書 十二月……………	六四四
六六二	岩下・西郷・大久保意見書 十二月八日……………	六四五
六六三	茂久公議定職御拜命布告……………	六四六
六六四	久光公御上京御召達書……………	六四六
六六五	品海ニ於テ薩艦ノ砲撃始末……………	六四七
六六六	旧上山藩江戸鹿兒島藩邸浪士討伐始末……………	六四九
六六七	芝三田鹿兒島藩邸討伐始末補遺……………	六五〇
六六八	栗本鋤雲翁ノ自伝……………	六五六
六六九	某將軍昔日談 江戸薩邸焼討チ並徳川ト薩摩ノ海戰……………	六六〇
六七〇	向山黄村翁……………	六六三
六七一	阿久根新助書翰抄……………	六六六
六七二	勝安房守意見書 憤言兵部殿迄差出……………	六六七
六七三	黒田嘉右衛門海陸軍組織改変意見書……………	六七一
六七四	小松帶刀・町田内膳ヨリ在国ノ家老ヘ書翰 正月二十六日……………	六七三
六七五	新納嘉藤ニヨリ大久保利通ヘ書翰 二月二十九日……………	六七五

目 次

六七六	長防士民中ヨリ歎願書	二月	六七六
六七七	慶喜兵庫条約ノ履行ニツイテ奏聞	三月	六七九
六七八	内田政風ヨリ大久保利通へ書翰	四月二日	六八一
六七九	松平容保ヨリ賜暇ニツイテ願書	四月	六八三
六八〇	兵庫開港等幕府失政ニツイテノ意見書	四月	六八三
六八一	結城筑後守ヨリ小松帯刀へ書翰	四月十六日	六八五
六八二	板倉外二名ヨリ飛鳥井・野宮へ書翰	四月朔日	六八六
六八三	西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰	五月二十三日	六八七
六八四	西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰	七月二日	六八七
六八五	宮中人事ニ関スル建言	五月	六八七
六八六	大原重徳ヨリ島津久光へ書翰	五月	六八九
六八七	相樂総三探索書	六月二十六日	六九〇
六八八	西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰	七月二十四日	六九一
六八九	西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰	七月二十五日	六九二
六九〇	毛利敬親父子ヨリ島津久光へ書翰	七月二十六日	六九二
六九一	西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰	十月三日	六九三
六九二	島津久光・同茂久へ會津・桑名誅伐ノ御沙汰書	十月十四日	六九三
六九三	島津久光・同茂久へ討幕ノ密勅	十月十三日	六九四

六九四	徳川慶喜ヨリ將軍職辭退ノ奏聞ト御沙汰書	十月	六九四
六九五	批紙		六九五
六九六	小河傳右衛門以下処分一件		六九五
六九七	慶喜ヘノ御沙汰書ニ対スル伺書一	十月二十日	六九六
六九八	口上覚	十月十九日	六九六
六九九	慶喜ヘノ御沙汰書ニ対スル伺書二	十月二十日	六九七
七〇〇	三藩返答書	十月二十一日	六九八
七〇一	大山綱良ヨリ小松帯刀・桂久武ヘ書翰	十一月二十四日	六九九
七〇二	故篠崎彦十郎履歴		六九九
七〇三	柴山良助履歴		七〇一
七〇四	白石周一願書		七〇二
七〇五	島津茂久親書	十一月十八日	七〇二
七〇六	毛利元徳親書		七〇三
七〇七	薩・長・藝約定書		七〇三
七〇八	朝議達	十二月	七〇三
七〇九	大久保・西郷・岩下ヨリ岩倉ヘ提出シタル案文		七〇三
七一〇	某日記		七〇四

慶應四（明治元）年（戊辰）

七一	大坂ヨリ江戸芝藩邸ノ事変ヲ内報ス	正月朔日	七〇七
七二	茂久病ニヨリ九條家参集ヲ辞退ス	正月二日	七一
七三	尾張・越前へ上京スヘキ旨ヲ内命セラル	正月二日	七一
七四	新納刑部江戸邸事変及ヒ京攝ノ形勢ヲ報告ス	正月二日	七五
七五	大久保利通条約締結ノ通知ヲ建議ス	正月二日	七八
七六	大久保利通決戦ノ趣旨ヲ岩倉副總裁ニ建言ス	正月三日	七九
七七	大久保利通処分条項ヲ建言ス	正月三日	二〇
七八	幕兵上京ニ付キ朝廷警備ヲ嚴令セラル	正月三日	二
七九	薩藩兵伏見口ノ警備ヲ嚴命セラル	正月三日	二三
七〇	加藤泰秋京都市中巡邏ヲ免セラル	正月三日	二四
七一	島津茂久病ヲ勉メテ参内	正月三日	二五
七二	仁和寺宮嘉彰親王軍事総裁兼務ヲ命セラル	正月三日	二七
七三	仁和寺宮征討ニ付本藩兵従軍ヲ命セラル	正月三日	二七
七四	本藩兵西園寺鎮撫惣督ニ従軍ヲ命セラル	正月三日	二八
七五	征討大將軍嘉彰親王戦士ニ勤功ヲ諭ス	正月四日	二九
七六	伏見・鳥羽戦争ノ情況ヲ藩老ニ通知ス	正月五日	三〇
七七	有川七之助戦状ヲ同席藩吏ニ通スルノ書	正月五日	三一

七二八	宮門警衛ヲ嚴重ニスヘキヲ達セラル	正月五日	七三二
七二九	西郷隆盛戦状ヲ報シテ処分ヲ大久保利通ニ議ス	正月五日	七三二
七三〇	大久保利通開戦ノ次第等ヲ報ス	正月五日	七四二
七三一	戸田忠至慶喜ノ討薩ノ表ヲ上ル	正月五日	七四六
七三二	藩用運搬人夫ノ使役ヲ許サル	正月六日	七五二
七三三	藩庁上国ノ事変ヲ藩内ニ告ケ緩急時ニ応スヘキコトヲ達ス	正月六日	七五三
七三四	京都守衛ノ為外城兵二小隊・私領砲隊二座ヲ派遣ス	正月六日	七五四
七三五	島津茂久出戦隊士ノ戦功ヲ褒メ奨励ス	正月六日	七五六
七三六	藩庁藩内守衛及京都救応トシテ国境及細島ニ出兵ス	正月七日	七五六
七三七	近衛・一條両家ノ守衛ヲ命セラル	正月七日	七五八
七三八	茂久病ニヨリ参朝ヲ辞ス	正月七日	七五八
七三九	慶喜追討ノ大号令ヲ発シ諸侯ノ去就ヲ決セラル	正月七日	七五九
七四〇	茂久勅書ノ奉命書ヲ捧ケラル	正月	七六一
七四一	西郷隆盛書ヲ致シテ大久保利通ノ帰京ヲ促ス	正月七日	七六三
七四二	大久保利通参謀ヲ辞任ス	正月八日	七六四
七四三	朝廷本藩兵ノ軍勞ヲ慰メ酒肴ヲ賜フ	正月八日	七六四
七四四	茂久大号令奉命ノ次第ヲ在京藩人ニ告示ス	正月八日	七六五
七四五	徳川慶勝・松平慶永慶喜東帰ノ奏状ヲ上ル	正月八日	七六五

目次

七四六	茂久病院ニ負傷者ヲ慰問ス	正月九日	七六七
七四七	島津伊勢征討將軍宮ニ伺候ス	正月九日	七六八
七四八	旧幕府老中稻葉正邦諸藩ニ令シテ西上ノ備ヲ為ス	正月九日	七七一
七四九	朝廷薩・長へ糧米ヲ賜ハル	正月九日	七七二
七五〇	平戸藩市中巡邏ヲ罷ラル	正月九日	七七三
七五一	参与岩下方平外国事務取調掛ヲ兼ネシム	正月九日	七七三
七五二	付記一		七七四
七五三	徳川慶喜以下ノ官位ヲ褫キ其京邸ヲ没収ス	正月十日	七七六
七五四	薩兵京都高松藩邸ヲ没収ス	正月十日	七七八
七五五	京都詰家老ヨリ藩地へ戦状ヲ報ス	正月十日	七八一
七五六	西郷・大久保ヨリ戦状ヲ報告ス	正月十日	七八二
七五七	京都詰家老ヨリ竹内・木場兩人ノ進退ヲ通ス	正月十日	七八七
七五八	有川七之助京地ノ情報ヲ報ス	正月十日	七八七
七五九	木場傳内ヨリ家老中へ書翰	正月十一日	七八九
七六〇	藩内旅人往復船舶出入ノ檢覈ヲ達ス	正月十日	七九〇
七六一	島津茂久各隊ニ戦功ヲ申供セシム	正月十日	七九一
七六二	長崎警備ノ為藩兵派遣	正月十一日	七九六
七六三	藩庁士民ニ貸上金ヲ命ス	正月十一日	七九七

七六四	諸侯ニ率兵入勤ヲ命ス	正月十一日	七九八
七六五	島津茂久参内ヲ命セラル	正月十一日	七九八
七六六	本藩及ヒ五藩ニ高松等四藩ノ征討ヲ命セラル	正月十一日	七九九
七六七	征討府本藩及ヒ長州藩兵庫港警衛ヲ命セラル	正月十一日	七九九
七六八	本藩兵二隊ヲ日向ニ派遣シテ徇フ	正月十一日	八〇〇
七六九	島津茂久参朝ヲ命セラル	正月十一日	八〇一
七七〇	小濱・大垣両藩謝罪両道ノ先鋒ヲ許サル	正月十二日	八〇六
七七一	徳川慶喜再ヒ上京スルノ意ヲ列藩ニ告ク	正月十二日	八〇七
七七二	徳川慶喜朝敵ニ無之趣ヲ救解セシム	正月十九日	八一〇
七七三	藩庁島津茂久ノ議定ノ叙任告示	正月十三日	八一五
七七四	島津茂久戦亡士ノ墓前ニ於テ勅書告祭式ヲ行フ	正月十三日	八一五
七七五	岩下・西郷・大久保三人ヘ戦功褒賞	正月十三日	八一六
七七六	薩・長糧米下賜ヲ辞退ス	正月十四日	八一六
七七七	戦功賞賜ノ勅書ヲ兵員ニ告示セシム	正月十四日	八一七
七七八	本藩士十六藩士ト長崎ニ会議所ヲ置キ施政ヲ管理ス	正月十六日	八一八
七七九	主上元服ヲ加セラル	正月十五日	八四二
七八〇	大赦ヲ行ハル	正月十五日	八四二
七八一	新ニ外国トノ和親ヲ結フヲ布告セラル	正月十五日	八四三

七八二	東久世通禧各国公使ニ会シ大政復古ノ国書ヲ付シ神戸争鬪ヲ判理ス	正月十五日	八四四
七八三	新納刑部仏人ペーサン佛国公使応接ノ顛末ヲ報ス	正月十五日	八五〇
七八四	薩・長兵庫外国人居留地警備ヲ命セラル	正月十五日	八五三
七八五	藩吏備前藩士神戸争鬪ノ措置ヲ報告ス	正月十五日	八五三
七八六	朝廷攝津・河内封印米庫ノ解禁ヲ命ス	正月十五日	八六〇
七八七	九州旧幕領処分ノ措置ヲ藩地ニ報ス	正月十五日	八六一
七八八	附録英公使老中ト条約履行ノ当務者ヲ応答ス	正月十五日	八六二
七八九	親王ヲ三公ノ上ニ班ス	正月十六日	八六三
七九〇	島津忠義参朝大礼ヲ賀ス	正月十六日	八六四
七九一	西郷・大久保京地ノ情況ヲ報告ス	正月十六日	八六六
七九二	朝謹ノ公卿ノ参朝ヲ宥ス	正月十六日	八七〇
七九三	皇族・公卿・諸官人ニ維新ノ趣旨ヲ諭シ激励ス	正月十六日	八七三
七九四	島津忠義実名・花押改メ藩地ニ報ス	正月十六日	八七五
七九五	戦亡兵ノ靈祀下賜金及ヒ人名ヲ報ス	正月十六日	八七六
七九六	島津忠義病ニヨリ参朝ヲ辞ス	正月十七日	八八五
七九七	島津忠義海陸軍務総督ニ任セラル	正月十七日	八八五
七九八	三職分課廻達書	正月十七日	八八六
七九九	岩下・西郷・大久保徴士ヲ命セラル	正月十七日	八九一

- 八〇〇 大久保利通有栖川熾仁親王ニ当務ノ要件ヲ陳上ス 正月十七日 …………… 八九三
- 八〇一 藩庁伏見戦況ヲ藩内士民ニ告達ス 正月十七日 …………… 八九四
- 八〇二 附録会同盟約及諸国巡察使差遣ノ達書 正月十七日 …………… 八九五
- 八〇三 附録太政官代下馬之事 正月 …………… 八九五
- 八〇四 外国事務総督東久世前少将ヨリ各国公使へ書ヲ贈ル 正月十八日 …………… 八九九
- 八〇五 島津忠義海陸軍務総督ヲ辞ス 正月十八日 …………… 八九九
- 八〇六 小松帯刀ヲシテ久光ニ代リ天氣ヲ伺ハシム 正月十八日 …………… 九〇〇
- 八〇七 城下及諸郷銃砲諸隊京師救応トシテ出兵ス 正月十八日 …………… 九〇一
- 八〇八 藩役用稟申手続並一門以下所邑住居家計ノ節制ヲ達ス 正月十八日 …………… 九〇四
- 八〇九 兵具方与力ヲ以後兵具方附士ト改称ノ達 正月 …………… 九〇四
- 八一〇 大久保利通日記節録 正月 …………… 九〇四
- 八一 朝敵諸家ノ武器荷物ヲ没収スヘキコトヲ達ス 正月十九日 …………… 九〇五
- 八二 隣境他領及旧幕領去就訊問ノ書ヲ発ス 正月十九日 …………… 九〇六
- 八三 幕府老中ヨリ諸船品川沖入津ノ節心得スヘキコトヲ達セラル 正月 …………… 九〇七
- 八四 藩騎兵所設置ノコトヲ達ス 正月十九日 …………… 九〇八
- 八五 米良亀之助ヨリ桂右衛門へ出兵参加ヲ歎願ス 正月十九日 …………… 九〇九
- 八六 談合役木脇次郎右衛門隊伍ノ組立方ニ付取調ヲ十ヶ郷曖中へ申達ス 正月十九日 …………… 九〇九
- 八七 木脇次郎右衛門出兵ノ儀ニ付出水地頭談合役へ申達ス 正月十九日 …………… 九〇九

目 次

八二八	日州旧幕領ノ年貢米千三拾石処分方ノ指揮請ヘル書	正月	九二〇
八二九	豊前四日市ニ浪士押寄放火乱妨ニ付安藤作之丞外二名ヨリ奥掛書役衆へ申報ス	正月	九二二
八三〇	各国公使ノ神戸事件ニ対スル要求ヲ容レルコトヲ各国公使及ヒ池田茂政ニ伝フ	正月	九二七
八二一	各国公使ニ中外局立ノ要求ヲ移牒	正月二十一日	九一九
八三二	議定議事規程ノ達	正月二十一日	九二〇
八三三	松方正義ヨリ桂久武へ長崎奉行所処分ノ顛末報告	正月二十二日	九二一
八二四	澁谷彦助ヨリ天草浪士鎮撫ノ報告	正月二十二日	九二三
八二五	大宮御所造立入用金割付	正月二十三日	九二五
八二六	寺島宗則参与兼外国事務掛トナリ兵庫ニ派遣セラル	正月二十三日	九二九
八二七	町田久成参与兼外国事務掛トナリ長崎ニ派遣セラル	正月二十三日	九三〇
八二八	五代友厚参与兼外国事務掛ヲ命セラル	正月二十三日	九三〇
八二九	藩戦亡者追福修行ノ達	正月二十三日	九三〇
八三〇	西郷ヨリ大久保へ東国征討ノ追討使派遣ニツイテノ書翰	正月二十三日	九三〇
八三一	暗殺ノ嚴禁	正月二十三日	九三二
八三二	参与兼会計事務掛三岡公正紙幣製造ニツキ建白	正月二十三日	九三二
八三三	遷都ノ議決セス	正月二十三日	九三三
八三四	朝廷ヨリ賜金ノ令達	正月二十四日	九三三
八三五	大久保利通總裁局顧問被仰出	正月二十四日	九三四

八三六	島津忠義英医ウイリスヲ雇フ	正月二十四日	九三四
八三七	忠義公機ヲ許サル	正月二十四日	九三六
八三八	勅使各国応答ニツキ評議ス	正月二十四日	九三六

〔表紙〕

忠義公史料 慶應元年

〔扉に、表紙の文字の外に市米四郎編の記載あり〕

一 有川彌九郎佛国船大坂川口へ来着ノ報

佛国船一艘当所川口川口^{太坂}へ渡来等之儀ハ、過日御掛合申上置候通御座候、然処追々御方一条ニ付、彼是致心配候様子ニ見受候ニ付、丁度彼船へ差越、乗付見候処、愈浅瀬ニ乗掛候儀ニ相違無之、汐満ニ七尺四五寸位之^{ママ}処ニ相居リ、今夜汐時ニ無間卸シ候儀六ケ間敷相見得申候、船号キンシャン、船将ノ名ライールト申候由、外九艘ハ神奈川ノ間、日本人乗組居候由ニ承候、仏国^{カシユン}人和春ト申ス者、江戸ヨリ書翰持参致候由、此佛船ハ

何日何方ニテ応接可致哉之模様ニテ、当地へ差越候哉、士官初以前ニバツテラヨリ上陸致候外船之儀ハ、兵庫碇泊ニテ候、相替儀ハ猶亦可申越候得共、其内形行此段御問合申越候、以上、

九月十七日

従大坂

有川彌九郎

西郷吉之助殿

別紙

一 仏人^{カシユン}和春

右ハ横濱ヨリ国書持参、

一 英人シーボルト

一同マクトナル

一 蘭人アート

右ノ四人、今日バツテラヨリ町奉行所へ上陸致候、

一 公義役人木村九之助召列上陸候由、

一九月十三日九艘一緒ニ神奈川出帆致候由、

二 (大久保利通ヨリ西郷吉之助へ書翰)

前略、廿一日早朝又々二印通之御内書被成下候、昨夜朝議之次第不奉伺候得共、

御書中御説も被行兼候趣にて、尹宮参殿ハ取止、山階宮江出候様との御事ニ候得共、既ニ今日大樹参内候得は、端的之問合(問合)にて、大事之成否ニ関り候間、兎角尹宮へ参殿打破りて、大義ヲ吐キ動シ候外無之卜決シ参殿候処、夜前徹夜之御評議にて、未御寝中ニ有之、已刻比拜謁被仰付、扱言上仕候趣、当時弊藩之儀、幕府ハ勿論、

朝廷より御嫌疑ヲ奉請候得ハ、御名儀共被行兼候ヲ察し候へハ、存慮可申上所存ハ無之候間、小臣等ニ於テモ同様之心得にて其趣意ヲ奉し、是迄黙止候得共、既ニ今日ニ至り候てハ

朝廷内外之御大事、若し御所置を被為失候てハ、乍恐奉救道も無之、

王家之衰滅顯然ニ候間、実ニ不得止一己之存慮を以言上仕度参殿仕候、既ニ昨日は御評議も被為在候由、如何様之御内議ニ被為在候哉、何分奉伺度と申上候処、其事ニ付昨夜も色々紛々之論にて候得共、眼前外患も迫り居候へハ、内外一時ニ難ヲ醸し候ては、迎も不容

易難事ニ候間、兎角列侯被為召、公議を以相決し候方可然との説相立、其議ニ同し当職より一・會・桑へ御

示談相成候処、承知之体無之、攝海異舶之事ハ阿部豊(正外)後守下坂いたし候へハ、応接之上御受合申上、退帆為

致申候間、此儀は御安心可被成候、列侯被為召候事ニ相成候へハ、大ニ時日を延し、其内如何之故障到来も難凶、且又幕之職掌も不相立候故、是非言上之通り御許容相成度趣推て申張り、色々御諭も相立候得共、中々聞入候丈ケニ無之、終ニ不決して夜も明ケ候由、言上之趣書面を以申上、大意左之通之趣意にて候由、

防長所置之儀、順序を追ひ種々手を尽し、末藩両家を呼候処御請不致、尚時日を延し、外末家又は本家家老召呼候へ共、御請之体ニ無之、既ニ二十七日之期日も差迫り候間、其迄御請不致は、不得止兵を進め糺明仕度云々、

右大意之趣にて候段御咄ニ候、追て承り候へハ、内実ハ当夜言上之通被聞召との趣にて、

勅許相成筋御意相成候由、始め玉石相分ケ、至当之所置可致との御文言有之候処、御削被下候様申上相除候由、右形行承知之上言上仕候へハ、全体今般大樹公御進発候

と申ハ、当春上洛之御沙汰相成候末を以、一二応ハ御断りも申上、終ニ進発と申者ニテ大軍を率し發途、下坂之序ニ上洛参内之上、恐多くも長州所置之儀ハ輕挙無之、至当之筋を得、人心悦服いたし候様所置可致との趣、宸翰ヲ以被仰下御内定之処、一・會・桑より推て御拒ミ申上候処より、三藩之怒を恐怖せられ御止ニ相成、終ニ右之趣意、

勅語を以大樹公へ御直ニ被仰達、尚当職より

勅語之趣御書取、大樹公へ被相渡、謹て御請退出之処、閣老阿部御書取之旨を奉セス、致返上度強情ニ申張り、終ニ御受取ニも相成候よし、其余言上之内、

朝廷之微弱を蔑視し、暴威ヲ以不遜不敬ノ語を發し奉愚弄候次第、天下有志之者悲憤切齒せざるハ無之候、且又進発之趣意、御下向之処、昨今御征伐之末を以テ決シ候訳ニ無之、異国へ私ニ家來を渡し兵器を調、密商等之確証ヲ得進発仕候段、御届ニも相成候、然レハ三ヶ条之義明日糺明ノ上ナラテハ、所置も難附、処置之上ニも輕重之典も可有之事ニ御座候、末藩家老等ヲ召呼、御請を不申上候迪、追討之名義何れニ可有御座哉、若朝廷是ヲ許シ給候ハ、非義之

勅命ニテ

朝廷之大事ヲ思ひ、列藩一人も奉シ候ハす、至当之筋を得、天下万人御尤と奉存候てこそ

勅命と可申候へ共、非義之

勅命ハ、勅命ニ非ス候故、不可奉致も難計御座候、然ハ只今ニテハ防長ニケ国ニ候処、右通列藩命ヲ不奉日ニ至テハ、前後左右長州たらん時、如何ニ御処置可被成哉、只今衆人之怨ミ幕府ニ帰し候処、則

朝廷ニ背キ候様相成候得ハ、幕府之難儀ヲ御買被成候道理ニ御座候、ケ様申上候得ハ、長州同意或ハ討幕之趣意と欵可被思召候得共、斯る大事ニ臨ミ、左様之私意を以論し候者ニ無之、只名分之処存大義之所関を以御議論申上候訳ニ御座候、若一・會・桑・閣老辺江御示被下候ハ、別て忝所望候間、義理判然議論可仕候、仮令其上幕罪ニ被陷候共、辞退不仕心底ニ御座候段演説、如何被思召候哉と御伺申上候処、実ニ最と思召と計ニテ、暫ハ御当惑之体ニテ、良ありて後難之処ハ左も可有之、一・會・桑より言上之勢何分手強く候故、迎も力ニ及候丈ケニ無之と御歎息ニテ、尤之趣意ながら中々被行兼候間、此方も今日参殿之上当職江御断り

申上度、早出したし候含ニ候段御沙汰候故、夫ハ奉恐入候、如斯大事ニ臨ミ御傍観被成候て、御本志ニ叶可申哉、何等之為ニ御婦俗被為遊候と、可被思召哉と押詰奉り候処、成程尤之事ニ候、左様ならハ迎も此方一人相含候ても無詮候間、二条関白当職江是より參殿いたし可具、最早時刻も移り候間、早々と被仰候間、委曲奉畏候へ共、中々不都合之私輩ニ、拜謁被仰付程無寬東段申上候処、御直書御認御渡し、是を持參候様との御事にて、則御受取二條家江參殿いたし候ハ、既ニ未之刻ニ相成候形行、高崎へ申入御書差出候処、無程拜謁被仰付候間、前条尹宮へ言上之趣、同様無残処申上候処、御沙汰ニ先ツ何ハ扱置、近来薩ヲ拒ミ幕習有之との説段々申触し候段、折々聞及甚迷惑ニ存候、兎角愚蒙之此方、不行届之義ハ多々有之事ニ候得共、御名殿基本を被為開候てこそ如斯ニ相成候得ハ、忠誠無二之藩たる事ハ兼て所存候間、左様相心得可具、決して色々聞込も可有之候得共、解釈いたし候様初て御沙汰ニ候間、以之外なる事を奉承知候、御名存慮ハ

朝廷・幕府之嫌疑如何程蒙候とて、忠誠之変する処無之、勿論方寸之内明白ニ候得ハ、確乎として人を怨候儀

無御座候、小臣等趣意を奉する今日ニ候得は、御前方之御拒ミ之何之と申事、思寄らざる事ニ候間、御安心被成下候様申上候、扱御沙汰ニ防長所置ニ付、言上之趣至極尤ニ候、昨夜も段々議論も有之候、全体此方所存只今ニ成ハ不得止訳ニ存候、寛大之御処置と申ハ伏罪之上ニ有之訳にて、当夏比迄ハ伏罪中之事候間、大樹參内之節も不可討之論にて、進発を止め、寛大之所置之順序を追候様、御達ニ相成、右之旨を奉し姫路迄之發行を止め、華城ニ滞在之順ヲ追ひ、末家並二本藩家老召呼候儀、両度相達し候処御請不致、殊ニ昨冬伏罪之御達相成候四ヶ条之趣、

五卿渡海之事

山口城破却之事

激徒所置之事

謝罪状之事

右之内五卿渡海之事而已御達しを奉候姿ニ候得共、無間も山口城ハ則築城、激徒ハ直様再発、唯今ニ至テハ、却て登庸いたし候場ニ相成、謝罪状も不差出、是ヲ以伏罪ニ無之儀頭然ニ候得は、伏罪せされハ則朝敵ニ相違無之候、本之朝敵ニ帰候得ハ、可討之儀不及論候、然処昨夜議論中ニ、眼前異舶采港之処一時ニ混し候てハ、大事之訳ニ有之候間、列藩之存慮御尋相成度との

筋相立候事故、其儀ハ此方も尤ニ存し、同意之上武辺江論し候処、異船之儀御受合云々と申事にて、不得止事不被行、終ニ言上之通被聞召との趣ニ、御内定相成たる事ニ候との趣御答ニ候間、夫ハ一通御尤ニ候得共、形而已ヲ推シ候訳にて、本ヲ正し理を不踏御論と奉存候、全体幕府進発する趣意尽ク

勅命ニ反し、剩へ参内之節

朝廷を奉軽蔑候始末、天下所知にて、誰か之を可不憤、勿論御当地より大坂辺ハ下匹夫ニ至迄、幕府を悪ムコト甚敷、進発ニ付ては、最初尾老公・越老公・藤堂候伐長之不可ヲ説、名義判然建言ニも相成、親藩さへも御為ニ不宜ト存候者ハ、名ヲ正し義ヲ明かにして言上いたし候て、是を止め候訳ニ候間、列藩ニおひてハ不伏之形差見得候訳ニ御座候、然ルニ長州ニおひてハ、昨冬開兵後早速御処置振御達相成候ハ、無異儀可奉拜服候処、却て尾総督幕府之嫌疑ニ触れ、出府ヲ責候訳共有之、尤上洛之命も不奉為立、大膳父子出府五卿護送之幕命を持し候次第、世人誹議せざる者無之、如何様伏罪之者たり共、激せざる道理無之、然る処当春尚又朝廷之寛裕ヲ以て、大膳父子召呼、五卿護送之儀先差

置、何分速ニ上洛いたし候様、論し玉ひ候を、種々御断り申上候上、終ニ進発と申候て出掛候訳ニ御座候、尤昨冬征伐之末を以、決候訳ニ無之、三ヶ条之罪状を以、進発いたし候との事ニ候得は、決て

叡慮ニ背き候訳にて御座候、且又昨冬征伐之末ニ無御座候得は、筋も違候儀全幕之怨討ニ候得は、長州仮令伏罪とハ乍申、首を伸て相待候道理無之と奉存、夫ヲ本之朝敵ニ復し候とハ難心得、若其通にて

勅許相成候得ハ、反命之國々多し、如何御処置可被成候哉、寛大之御処置ハ伏罪中之訳との趣、如何様之御趣意ニ候哉、朝敵ト申者ニ候得は誅伐ニ及候事ニ候処、全体當時 皇国幕府之失体より内混乱し、外患切迫之処より、昨冬御征伐ニも謝罪御採用、時世に応し寛大之御処置為相成事と奉存候得ハ、時世ニ依り大小軽重之取捨ある事ニハ有之間敷哉、異船之去来を以、爰ニ寛急を論ニも難心得、仮令此度来船せず共、兵庫開港ハ彼等年来之宿望ニ候間、危急無此上、仮令此度一時退帆いたし候共、寛ト申訳ニ無之と一々弁駁いたし候処、成程尤之儀ニ思召との御事にて、外ニ数件御問答有之候得共、段々理を尽し申候処、終ニ御閉口にて、一

々言上之趣利害得失尤ニ候、然ルニ昨日迄一・會・桑ニ同意いたし、夜前も同断ニテ御内定迄相成居候、就ては実ニ難問ニテ、若シ御許容不相成候得ハ、忽チ眼前混雜を生候ハ案中ニ候、如何致し宜敷候半と御尋ニ付、御許容無之と申訳ニ無之、右ハ重大之事件於朝廷も御裁断難被遊候間、諸大名存慮御下問相成との趣ヲ以、御達相成候得ハ、何之子細無之と申上候処、成程其通候ヘハ、そこニ成と一・會・桑之処ハ辭職退身と申事ニ相成候ハ案中、左候ハ、忽チ混雜いたし、東西隔絶之勢相違無之との御事故、成程左様之訳も可有之候得共、

勅許相成候先きの御難事を御勘考被為在度、其節ニ相成候得ハ、御安危ニ拘る御大事ニ候、右通条理相立候御沙汰ニ、不平を生し辭職退身なと申上候ハ、朝廷ニ対し不臣之者ニ候間、其通被仰付可然事ニ御座候、兎角当職之御任ハ大事ヲ決せられ候ニ、至公至平を以て大義之立処ニテ、無御顧念御裁断不被為在候てハ、凡テ私ニ陥り、右之趣意則幕習之評御受被成候処ニ御座候と、申上候処、左様ならハ兎角内府公・尹宮・山階宮江御示談被成、十分御尽力可被成候間、内府公

へ尚又申上可異、返すべくも

朝廷之御為を存言上之趣意尤ニ付、相叶候丈ハ振はまり可相尺候得共、若不被行時ハ薩論ヲ拒み候などと心得不異候様、御頼なさるとの御事ニ候間、奉恐入候、其段ハ御懸念被下間敷、乍然若不被行時ハ、今日限之朝廷と奉存候段申上退出、直様内府公へ參殿形行申上候、既ニ酉ノ刻ニ及候、

廿二日、昨夜半三印之通、御内書内府公より被相下候、依之今朝尹宮へ參殿之処、精々言上之儀ニ付、四人申談候上衆議ニ涉り候処、段々異論も有之、尤も武辺江御談之処固ク異論ニテ、終ニ叡断を仰キ候と申事ニ相成、当職より於御前逐一言上之処、既ニ昨夜内定之訳も有之、其節ハ幕へ委任可被成、併し薩州より為皇国言上之趣意、御感不淺との御沙汰も被為在候、折角志ヲ以申上候儀不被行、遺憾ニ可存候得共、返すべくも宜敷汲取具候様、浅間敷御挨拶奉承知、奉恐入り外無之、且又当職より參殿いたし候様、申来罷出候処、前条大同小異之御挨拶長々敷、尚此上多難之御時節柄ニ候間、不差置存寄之儀申上候様、御頼被成候、言上不被行ニ懲り、以来何も不申上と云様なる事ニテ

ハ、大變ニ候間、決して不平を生せざる様と、くどく
敷御沙汰奉承知候ニ付、全体言上仕候も

朝廷之御為にて、決して私論ヲ以薩之為ニ申上候儀無
之候間、不被行逆不平ヲ生ずる抔ハ不思害事ニ御座候、
併此度之事ハ、実ニ

朝廷之御大事存亡之時と可申候得ハ、皇国忽チ暗夜と
成候心持にて、千載之遺憾ニ御座候と申上退出致申候、
右之通大略之形行にて御座候、急卒之間不綴之文言
余計之小事等書載セ申候間、御取捨を以御推読所仰
候、以上、

九月二十三日

大久保一蔵

西郷吉之助様

追て猶又、昨日正三卿へ承り候へハ、大樹江佩劍・
陣羽織地之錦三巻、會より前以当職へ周旋拝領相成
候由、深意アルベシ、

一勅許願之書面之内ニ、何れ兵ヲ西シ糺明仕度、兵機
之寛急異算無之様、指揮可仕旨之趣有之由、正三卿
御咄也、

〔大久保利通文書、松方正義文書にて校訂〕

三 外国奉行江書上

乙丑九月廿七日ノ飛脚十月七日宇和島へ着

四月二十一日佛蘭西公使ヨリ極密申聞候趣

此度御進発ノ義ニ付、私日本臣下ニ代リテ篤ト勘考、
左ニ申上候間、其御心得ニテ御聞取被下、閣老并飛驒
守様江ハ、徹底御領悉相成候様ニ被仰上可被下候、
一此度長州御親征ノ義御成功速ナルヘシ、併一体四国・
九州ノ大諸侯ノ内、長州同意ノ者モ難凶、御猶予相成
候得ハ、右大諸侯ノ内、如何様ノ義相巧候哉モ難計、
一誠ニ御大切ノ御場合ト奉存候、
一一体先頃中ヨリ申上置候製鉄器械ノ義、御使節ヲ以、
本国政府江御頼被遣ト申ハ表向ニテ、内実ハ長州叛逆
ノ始末、并ニ夫ニ付御征伐ノ御趣意等、御懇親ヲ以、
巨細ノ事情大君ノ御口上ニテ、右使節ヨリ本国政府江
被仰遣候事ニ有之、夫故一日モ早く、使節出立ニ相成、
表向本国政府并英国政府江モ被仰遣候様仕度候、
一当時御国在留各国公使ノ内、私共ハ右等ノ義、内実御
国ノ臣下同様ニ存シ、御心添申上候程ノ義ニ付、其思
召ニテ諸事無御心置、御同厨ノ臣下ト被思召、表向ハ

極疎被遊候方、外公使江被對御都合宜敷候、尤外公使ハ如何様ニテモ宜敷候ヘトモ、万一只今英國ノ氣配ヲ御取失ヒ被成候テハ、誠ニ一大事ト存候間、當時ノ英公使トハ、格別ニ御厚御取扱御座候様仕度、其仕向ニ依テハ、味方ニモ成リ、又敵ニモ相成候事ニ御座候、佛國ニ於テハ大義ヲ弁ヘ、御為第一ニ存居候間、如何様ノ義有之候共、決テ敵ニハ不相成事ト存候間、私共ハ疎ク被遊候テ、英公使ヲ御立被成候方、却テ於私モ都合宜ク御座候、

一右ニ付、此度長州御親征ノ義モ、大君御發程前、早々英公使計江戸江御招被成、御老中方御逢ノ上、御懇話有之候様仕度、其懇話ノ次第ハ、長州叛逆ニ付、此度御親征被仰出候、就テハ前任公使マツク全様、我國ノ為格別ニ被尽心力候ニ付、極密事情打明ケ相頼候ハ、右叛逆ノ長州江外国ヨリ密交致候旨、万々有之間敷トハ存候ヘトモ、万一外国商船等長州海岸江船ヲ寄セ、密商ハ勿論、如何ノ処置有之候ニテハ、甚不安心ニ有之候間、諸事心付右様ノ義無之様、取計呉候様致度、尤英國政府江ノ使節差遣シ、右等ノ義可申入候ヘトモ、其元ニハ當時在留ニモ有之候間、厚心添頼入候旨、御

頼被成候方可然奉存候、

一右御頼御座候ヘハ、佛公使江モ御話被成候哉ト可申上候間、未タ全人江ハ何トモ不申問旨、御答可被遊候、左候テ佛公使江モ御相談有之候様ニト可申上候間、然ハ其許ヨリ佛公使江ハ、可然前文御頼被成候得ハ、英公使ヨリ私江何トカ咄可有之、其上ニテ表向私モ御相談ニ加リ可申候、

一右ノ通英公使御呼寄ノ上、御老中方御直ニ御懇話ノ其上ニテ、各国公使江改テ長州御親征ノ義、御書翰ヲ以、被仰遣候様仕度候、前文何ノ通御処置ニ相成、猶又閏五月十日出帆ニテ、柴田日向守殿英・佛江為御使節被遣之、於兵庫各国江申立候条々、

一將軍様長州御征伐トシテ御進發ノ処、今ニ御滞坂ノ御様子、如何ノ御様子、如何ナル儀ニ御座候ヤ、

一長州御征伐ニ付テハ、若兵器等御不足ニ候ハ、何ナリトモ御用被仰付度、猶又応援ニテモ被仰付義ニ候ハ、早速援兵差出可申事、

一兼テ御願申上候通、兵庫開港ノ趣、此度御願濟被仰付度事、

一長征ニ付、御混雜ニ被為在候ハ、追テ御成功ノ上ニ

テ宜敷候間、開港ノ義ハ是非トモ預御許容度事、
一長征ニ付、御混雜ニ候ハ、其模様ニヨリ国元へ通達
申度候付、此地ニ碇泊、御成功ノ儀拜見仕度事、右五
ヶ条大意ナリ、

○長州使者松原音三ト申者、去十六日廣島表江罷越、御
再命之趣奉畏候、固ヨリ兎ヤ角申上候義ニハ無之、速
ニ登坂為仕可申ト、種々配慮仕候得共、難行届次第モ
有之、不心期限超ノ今日ニ相成候、尚追々様子可申上
候得共、不取敢相届候、執成之程頼入候趣、右藝藩ヨ
リ届出、九月廿四日大坂着ノ由、

○今度上洛前肥後ヨリ建議ニ及候ハ、長州御呼出ノ期日
相過候トテ、直ニ御打入ト申儀ハ、余リ御切迫ニハ有
之間敷ヤ、期日マテ不罷出候ハ、一先閣老監察等ニ
テ、山口迄御出張御札問有之、其上ニモ不遜悖戾ノ義
御座候ハ、其節御征戰可然ト奉存候トノ趣ニ候、閣
老答ニ至極尤ノ儀、勿論此度御進発ト申候テモ暴卒ニ
御攻撃ト申訳ニハ無之、先彼近地マテ兵馬ヲ被進候上、
彼等御呼ニテ罪状御札被為在、其上ニモ不服候ハ、
初テ干戈ヲ御用ノ思召有之候間、其段ハ安心有之候様
トノ事ニテ、肥後モ承服ノ由、

一阿部侯御下坂ノ上、廿二日軍艦ニテ兵庫御出張ノ処、
洋客トモ兵庫開港ノ義、幕府ニテ御裁ニ難為及候ハ、
急速京師江可罷出旨烈敷申述、片時モ猶予不致勢ニ付、
何分幕府ニテ御裁断ノ御答モ難出来故カ、遂ニ彼等入
京ノ儀御諾相成、廿四日御帰坂相成候処、會・桑二藩
ノ義大ニ不服ニテ、洋夷入

皇城候様ニテハ、我輩職分難相立ニ付、左モ相成候ハ
、不問理非加誅戮候外無之トノ事ニ付、然ハ不及是
非開港ノ義、幕断ヲ以御許容ニ相成候外、有之間敷ト
御座候処、是亦至テ不服ノ義、乍然此事不服トテ、親
藩ニ在テ幕府ニ背反致候訳ハ、毛頭無之候得共、我職
分ニ三日モ難安事故、開港ト相成候ハ、早々守護・
所司代等ノ職ヲ辞去可申トノ義、又閣老ニハ今入京ヲ
不許ハ、忽干戈相成ハ必然ノ義、然時ハ無罪ノ千万ノ
生靈ヲ死地ニ陥レ候事故、仮令蒙

勅勸候共、生民ノ塗炭ニハ難易候間、彼ノ入京不許ハ、
是非共開港ハ御許容不可無ト申事ニ被相決、遂ニ廿七
日阿部侯右伝命ノ為兵庫御出張、尾玄同公(徳川茂徳)・小笠原壹州(長巳)
御奏聞ノ為欵、同朝一橋公モ、阿部侯洋人ノ入京ヲ御
許ノ事ヲ御承知ニ付テ、京師御届捨ニテ、御下坂有之

候処、玄同公杯ト同時御上京ニ御座候、然処阿部侯前
度応接後、井上市尹一人応接有之、其応答ノ時機ハ如
何有之候ヤ、洋人共右開港御許否ノ御義、早々トハ存
候得共、是ヨリ十日ノ間相待可申候間、夫マテニ御答
承度ト申候付、其義報上ノ為、井上氏帰船相成候処、
西宮洋ニテ阿部侯出張ノ船ニ出会、候其事ヲ聞其俣御
引返相成、玄同公・壹州ヲモ御呼返シノ御沙汰ニ相成
候由、右十日ノ間ト申ハ、廿七日ヨリ来月七日迄ニ御
座候由、然ハ其間ノ形勢ニテ、治乱安危ノ機相判可申
候、

- 一 大久保一藏朝家へ建言ノ次第、猶又承合可申上候、
 - 一 薩・長英船へ乗組候ヲ、幕吏横濱ニテ見届候ト、
 - 一 薩外ハ洋人ヲ誘引シ、内ハ征長ノ事ニ付、
- 朝幕ヲ撓擾スト、

一 西郷等帰国ノ義、賀陽王宮ヨリ御留ノ由、然トモ皆々
引去候由、仮令王命無之トモ、此大事件ニ居留モ可仕
処意外ノ儀、是モ征長一件付テノ建議不被行ヲ憤リ候
テノ義力、又此面々帰藩ノ義、近年來隅州公事ヲ御用、
以来追々諸名士御拔擢有之候処、旧来ノ愚輩失意ノ者
共、君側ノ士ノ小間隙ニ乗シ、少壮輩ヲ鼓動シ、内乱

ノ機ヲ発シ候付、急ニ帰藩ノ由ニ付、滯留難出来勢歟、

四 薩州家来ヨリ建白

四ノ一
此度兵庫表夷船来着之趣意柄、詳承知仕候得共、過日
阿部豊後守様（元外）・松前伊豆守様御応接之上開港、且十日
期限ニ被為究、右ニ付大樹家不日ニ御上洛、事件奏聞
被為在候哉、内々承知仕候、就テハ兵庫表之儀、帝都
近殊ニ海内之要港ニテ、素ヨリ勅許可被為在候儀トハ
不奉存候、墨夷初テ襲来後、積年不被為在御勤御儀ト、
兼テ拝承仕候ニ付、乍恐聊苦心仕候儀ハ無御座候へ共、
自然依申立趣ニ、御動揺御許容被為在候テハ、皇国之
存亡未曾有之御永恥、千載御取込（原）之期有御座間敷、実
ニ人心之向背ニ相拘、莫大之御後難此一举ト奉存候ニ
付、諸侯急速御召相成、建言被聞食候上、皇威顯然相
立候様有御座度奉存候、左候テハ日間モ相掛候儀ニ付、
強情申張、万一彼ヨリ輕挙之振舞モ候ハ、速ニ御打
払被仰付度、左候ハ、弊邸当分人少々ハ御座候得共、
修理大夫・大隅守兼テ申付置候趣モ御座候間、御先鋒
相勤申尽死力、聊奉報御国恩度御座候間、兼テ被聞食

置被下度、此段遮テ奉願上候様、重役共申付候、

〔朱〕

〔右聞集録へ申書ニ見へ候処、貴藩御家来在京之筋ヨリ

朝廷へ差出相成候書面ト相考へ候、右何人之差出ニ候ヤ、當

時大久保市藏殿等ヨリ差出相成候者ニ候ヤ、御調可相成候

ヤ、御問合申候也〕

四ノ二

同年丑十月日付ナシ

小松帯刀建白アリ、日付相伺度候也、

四ノ三

慶應二年寅八月

薩藩ヨリ差出ス十卷ケ条

第一

一 征夷府二百年來乍恐云々、

第二

一 外夷來シ以後尤己ノ職掌ヲ失ヒ云々、

第三

一 戊午之春禁廷ヨリ条約之儀ハ云々、

第四

一 禁廷へ奉迫外夷ハ拒絕可仕ト云々、

第五

一 漸一節詔尊奉攘夷期限之決定將軍様自ラ云々、

第六

一 小栗豊後守・小笠原圖書頭ヲシテ云々、
〔忠順〕 〔長行〕

第七

一 先年來屢叙慮ニ背反シ云々、

第八

一 洋銀ニテ新銀ヲ鑄替云々、

第九

一 甲子之秋長州人国冤哀訴之情云々、

第十

一 不義非道之政而已多ク云々、

第十一

一 幕府之職掌ニテ天朝ヲ奉シ云々、

右大罪凡如此、小罪不違記、

右前条之次第、大道大義尽キ果、神州ノ安危ニ係ル、

是早ク揆乱反正之材出テ云々、

〔朱〕 〔右聞集録ニ載有之候也、

原書薩藩ト有之候得共、

右ハ貴藩ヨリ御差出ニ相成候御書面ニ御座候ヤ、

又ハ貴藩士一箇人之名目ニテ、御差出ニ相成候者ニ候ヤ、

全体右御書面 朝廷へ御差出ニ相成候、從來之御成行如何

ニ候哉、此度此辺之書類乏不相分候間、御教示相願候」

四ノ四

記

慶應丑九月二十九日付薩州家来ヨリ建白ノ件

本書ハ兵庫開港ノ議アルニ当リ、藩ノ家老岩下佐次右衛

門^{今ノ議官岩下}方^{平子ナリ}ナリ、京都留守居内田仲之助^{今ハ内田政}風^{ト云フ}ト相議シ、

内田筆ヲ執リテ草案ヲ認メ、岩下之ニ添削ヲ加ヘ、内田

ノ名ヲ以テ伝奏衆ニ呈シタルノ献言ナリ、

本献言ニ就キ、薩藩ト英国領事トノ交渉事件アリ、今

左ニ其大要ヲ陳ヘテ参考ニ供ス、

岩下・内田兩人ヨリ伝奏ニ呈セシニ、之レヲ幕府ニ渡

サレシヨリ、文意攘夷鎖港ノ趣意アリトテ、幕吏ノ嫌

疑ニ触レタルヨリ、幕吏ハ暗ニ之レヲ佛国公使ニ示談

セシヨリ、佛使ノ教唆スル処トナリテ、幕府ハ陰ニ英

国領事ニ示ス、領事之レヲ見テ大ニ怒リ、長崎駐在領

事ガツールヨリ藩庁ニ通シテ、其旨意ヲ詰問セリ、藩

庁ハ岩下・内田ノ献言ニ及ヘル顛末ヲ詳ニセス、答弁

ニ究セシヲ以テ、内田等ノ專断ニ出テ、藩庁ノ預リ知

ラサル旨ヲ答ヘ、之レヲ嚴罰スヘキノ内評アリ

^{内田ニハ}命^{ヲ下シ}タリトゾ、後

^{帰國ヲ促カセリ、然レ後日幕府ノ陰謀ニ出ソルコト判然セシ}ヲ以テ、終ニ之レヲ咎メス、^{帰國ノ命ヲ取消シタリト云フ}タリトゾ、後

ニ岩下帰國ノ際長崎ニ至リシニ、領事ガツール・英人

モンブラン岩下ヲ要シテ、献言ノ旨意ヲ詰ルコト嚴ナ

リシカ、之レヲ弁解スルモ肯ンセス、翌日ニ及ヒ同行

吉井幸助^{今ノ吉井友}実^{伯ナリ}ナリ、ニ、能弁ナル通訳者ヲ附シ、面議弁

解シテ事終ニ解ケヌ、然シ横濱領事オールコックハ、

頗ル之レヲ含ミ居ルヲ以テ、同人ニ対シテ親シク応接

スヘキ旨ヲ助言セリ、依テ之レヲ諾シ、再ヒ東上スル

コトアリ、横濱ニ至リアールコックニ会ス、同人甚タ

憤リ、盟約ニ背セリト痛ク献言ノ旨意ヲ詰ル、之レ鹿

兒島灣戦争ノ和約アルニ拘ラス、更ニ攘夷ヲ主唱セリ

トテ、容易ニ納得スルニ至ラス、岩下之ニ答テ曰ク、

献言ノ旨意ハ、無法ニ攘夷ヲ主唱スルノ意ニアラス、

若シ外国ニシテ凌辱ヲ加ヘ、暴威ヲ振フニ於テハ、宜

シク国権ヲ保ツカ為メ、之ヲ打払フヘシトノ意ナリキ、

決シテ好意ヲ顧ミス仇敵視スルノ意ニアラズト、ア

ールコック欣然色解ケ、此ノ如キノ意ナル乎、固ヨリ至

当ノ理ナリ、国家ヲ辱ムルモノアレハ、之ヲ払フハ国

権ノ存スル処ナリ、万一優柔不断之ヲ曲クルモノアリ

テハ、宜シク之ヲ非議スヘシ、苟モ国権ヲ保護スルノ

精神アリトスルニ、之ヲ咎ムルノ理アランヤト、頗ル

款待濃カナリシ、之レヨリ一層親密ニモナリタリトゾ、且此時アールコック曰ク、薩摩ニ攘夷心ナシト云ヘハ、

予試ノ為メ薩藩ノ邸内ニ参趨スヘシト、岩下曰ク、更

ニ差支ナシ、然シ薩邸焼失シテ貴客ヲ納ル、処ナシ、

只予カ僑居卜定メタル窄隘汚穢ノ長屋アルノミ、若シ

厭ヒナクンハ何時ヲモ妨ケナシ、粗肴ノ外何モノモ呈

セスト、同人曰ク、少シモ厭ハスト、終ニ一日邸内ニ

来リ、岩下ヲ訪ヒテ種々ノ談話ノ時ヲ移シ、快ク酒食

ヲ為シテ帰途ニ就ケリトゾ、時ニ邸内勤留ノ士人中、

少剛ノ輩粗暴ノ挙動ニ出ツルコトアラン乎ト、甚タ配

慮ヲ為シタルコトナリシモ、更ニ何事モナク無事ナリ

シト云フ、之レ外客ヲ藩邸ニ招待セシ始メナリキ、

以上ハ本書ニ附帶シタル出来事ナリ、因テ序ニ記ス、

慶應二年寅八月薩藩ヨリ差出ス十一ヶ条ノ件

一本献言書ハ、十分証跡ヲ見出スニ至ラサルモ、人々ノ鑑定ニ

テハ、大久保一蔵ノ手ニ成リシモノナラント云フ、乃チ薩藩

大久保一蔵ナレハ、矢張薩藩ヲ代表セシモノト認メテ可ナリ、

後日調査ノ上更ニ御答モ致スヘシ、

一小松ノ献言月日モ調査ノ上御答致スヘシ、

五 折田要蔵ヨリ大久保利通へ書翰

尚々時氣御厭御周旋御專要と奉念上候、

一筆啓上仕候、先以甚寒之砌御座候処、弥以御機嫌能

被遊御座、珍重之御義大慶至極奉存候、随て私ニも其

後無異皆動罷在申候間、乍憚尊慮易思召可被下候、扱

又私事、当九月八日御作事奉行江御役替被仰付、別て

難有仕合ニ奉存候、早速右之形行可申上之処、旁取紛

れ不埒之至御寛免被下度奉願上候、

一今般大樹公御征長一件ニ就、

勅許之段奉承知、誠以国家大乱之緒、抑紀綱今日ニ尽

果、保元・平治之古ニ彷彿タル世体、凡人心を具し候

もの、九腸寸断之思ニ可有御座候、右ニ付ては、旁以

被尽御心志御周旋之程、西郷氏より篤と奉伝聞、感慨

ニ堪兼候次第ニ御座候、随て寒氣中北越江御踏跡之段

奉承知、御苦煩嘸と奉遠察候、小子ニも先年寒風ニ向

一異船攝海侵入之段は、疾可然とハ奉存候得共、重々之

大変如何とも志慮ニ及兼候次第、乍去幸ニは大樹懸軍

ニて、人心ニも少々は治定可仕哉、愚察仕候処、此度

迄は出金之定約取組、無事ヲ入〔悉〕れ可申候、又は征長之熟談ニ渡り、赤馬關開港此兩様ニ決着可致事ニ奉存候、何分大變なる事件ニ罷成御心痛嘸と奉存候、右は御機嫌伺旁迄如斯御座候、恐惶謹言、

〔年秀〕
折田要藏

十月十四日

大久保一藏様

御侍衆

二白奉申上候、

太守様并ニ

中将様御上京近々被 仰出、当分御城下中上下震動罷在候て、如何ニも勇々敷様ニ相見得申候得共、此末之処如何と奉察上申候、此間共は是非上京と奉存、西郷氏ニ談判ニ相及申候処、例之通西郷様々にて中々齒も立難き次第、一下り毎ニ悪言申触ラシ、頓と困入申候仕合ニ御座候、御推察被下度奉願上候、
〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

六 〔日野資宗伝奏伝達〕

十月廿五日伝

奏日野大納言様ヨリ雜掌ヲ以御渡、
〔發密〕

御用ノ儀有之被召候、期限来月中ニ必可有上着事、

但用意出来有之候向ハ、不拘期限早々上着可有之事、

十月

七 〔伊地知貞馨ヨリ大久保利通へ書翰〕

尚々時分柄無御痛様御自愛専用奉存候、已上、

木藤市助此便ヨリ高札御投与被下、忝拜誦仕候、向寒之砌、愈無御障御帰京奉恐賀候、於爰許乍恐 御而殿

様久光益御機嫌克被遊御座、御同慶御座候、随テ劣弟無

異致奉職候間、乍憚御休慮可被下候、異舶攝海へ入海、

動靜日々案居候処、早引取相成候由、当座之憂ハ被凌候

姿ニ御座候得共、求論ノ如ク 朝廷へハ初テ之御約定、

明賢御揃之上以來之御処置迄モ致治定候上、衆議御一

決御免許相成度義ニ候得共、最早無致時宜、就テハ段

々御尽力御周旋之儀共伝承仕候、御苦心之程奉察候、

〔二〕何様可罷成哉、当分二條城居住之由、進

退如何之次第欵ト案居候、此内ヨリ伝聞之不明一字ヲ以相

察申候得ハ、一橋刃下内場之混雜差起候様被伺候、左

候ハ、我為ニハ至極之幸ヒニ御座候半、此上ハ我国文
 ハ一致一和、治国強兵之道十分手ヲ伸ス外有之間敷、愚
 論ハ段々御議論申上候通、心術之論ハ信長・家康之手
 段ニ出度存候得共、当時京攝辺実際之情実目撃不致、
 押切難立詰二三字不明良策ニテモセヨ、向々ニ相成候テ
 ハ、却テ災害ニ相成候、一致一和、一毛之私念無之、
 成処ヲ以為四字不明御座候間、此上ハ諸彦之御見込ニ從
 ヒ、一身丈ノ尽力イタシ度存込候、佛・米行一条ハ委曲
 了承仕候、桂氏へ申出置候、可成早ク為運度義ニ御座
 候、偕去月十五日奈良原御役御免、森岡・松方御役御
 免、逼塞大山・武宮(マ)匠頭(マ)其外都合十二人御処
 置相付、当人懐激ハ勿論、段々人氣沸騰、御小姓刃ヨ
 リ起立、木藤角大夫・岸良御側役へ論ヲ立、其外多人
 数献言、終ニハ大變ニ及候勢ニ相成、御兩殿様ニモ
 内々ハ二不明ヨリ、御答被遊候御模様被伺候、遂ニ先日御
 書取ヲ以再糾被 仰出候、現実四五輩之処無実ニ相違
 無之、不公平之糾シ一不明杯跡受承リ驚入候、何分大事之
 端相生シ込入次第御座候、内外差迫候時節、開闢已來
 未曾有之世態、仮令実事有之ニモ為致、是迄モ邪正無
 御構長所ヲ取、御登庸之義寛宥之御所置有之度モノニ、

不分明之取扱、頓ト氣力モ尽果候、桂氏・喜入氏杯へ
 モ存慮之程其涯ヨリ致議論候得共、発命後中道之御所
 置參兼、尤二不明ハ露程モ不存、一発後驚可申位ニテ、愛
 憎彼我ハ私之事、唯願所ハ一致一和之義ニ御座候、天
 下之周遷(施)モ無致勢、我國ヲ以挽回之御大業相立、終ニ
 皇威海外迄モ耀候様成立、御基礎相立度ト祈居候折柄、
 一和之姿モ飛去、此節丈ハ可也ニ打合可相付候得共、
 畢竟和熟之処六ヶ敷、苦心之至御座候、大難ヲ前ニ受
 候時節一毛之私無之、公平至誠寛宥慈恕之御所置ニ出
 度義ニ御座候、口計之公平至誠ハ無益之事ニ御座候、
 乍恐 御兩殿様之御配慮奉恐察、畏縮屏營之至三字不明
 此四五日再糾ニ付暮方之御退出、両日中ニハ再糾モ一
 決可致存候、御地結局相付申義ハ万々有之間敷、国家
 アツテノ天下、西郷君被仰談、此涯早々御引取被下候
 処奉祈候、御地之模様次第ニテハ、皆々御引弘之段モ
 致承知居候間、他分ハ其御都合ニ可相成欵トモ察居候、
 先ハ御酬且右一事御相談申上度、如此御座候、恐惶頓
 首、

丑十一月二日認

伊地知壯之丞

大久保一蔵様

玉机下

八 西郷吉之助ヨリ黒田嘉右衛門へ探索云々

ノ書翰

田沼玄蕃頭(意傳、若年寄)蒸船ヨリ攝海江乘廻候由、事柄不相分候得

共、兵庫開港之義欺謀ヲ以、異人ト御約条イタシ候故、

関東ニ於テ大ニ物議沸騰之様子ニ被相聞候付、其等之

事歎、又ハ迎船共ニテハ無之候哉、何等之事歎御探索

被成下度奉合掌候、

大樹公上落トカノ説ハ、御当地ニテモ流言イタシ候得

共、是ハ虚囑トカ被相察申候、此段奉得御意候、頓首、

十一月十四日

西郷吉之助

黒田嘉右衛門様

(大西郷書翰大成にて補註)

九 長州再討出兵達書

松平修理大夫

毛利大膳父子伏罪之儀、御疑惑之廉々有之候ニ付、右

為御札大目附永井主水正・御目附戸川鉾三郎・松野孫(尚志)

八郎藝州廣島表へ被遣、大膳末家并家老共之内、且奇兵

諸隊中之者モ同所へ呼ヒ出シ、承札之上、模様ニ寄り

惣人数被差向候間、萩江一ノ先之心得ヲ以、兼テ揃置

候人数、差凶次第召連可致出張候、尤モ為軍目附大岡

鉞次郎被差遣候間、其段可被相心得候、且亦攻口之割

合、別紙之通被 仰出候間、可被得其意候、

十一月

一〇 京師御守衛達書

松平修理大夫

家来江

長防御処置御取掛相成候ニ付、一際御守衛嚴重可相心

得候、

十一月

一一 (大久保利通ヨリ伊地知貞馨外二名へ書

翰)

御翰相達難有拜見(原書欠失)、寒氣之砌御揃愈御安康
被成御精務奉恐悦候、随テ僕碌々相勤申候間、乍略義
御降慮可被下候、御地混雜一条モ御再礼之上、明白之
御処置相成候段、細々被示仰聞、先々安心仕候、其后

佐二右衛門殿・幸輔罷下候間、程克折合モ付候半、実
ニ如此大事之節国基勤候テハ、万事難成事ハ不及言、
依願ハ大志ヲ確定、公平至当ヲ旨トシテ、国家ニ尽度、
頻ニ所冀ニ御座候、御当地之形体モ別段申上候程之事

モ無御座、愈幕府独米辺之処、処置ヲ失進退究シ、一
向薩ヲ抱込候手段専務ト被察申候、永井主水正於藝州
穴戸談判相濟、別テ穩之向ニ被聞申候得共、未明証ヲ
得不申候、兎角不遠結局之模様可相分事ト相考申候、

兵庫開港一条、於関東取返之談判六ヶ鋪、亦々攝海廻
舶之模様モ有之由ニ御座候、若其期ニ及候ハ、十分
之尽力致サズ候テハ難相濟、幾重ニモ危難之境ニ相臨
候事ニ御座候、此上ハ於我藩ハ益至細之筋ヲ著明ニシ、

名義ヲ正シ候外無御座、迎モ即今之形勢ニテ、調和モ
出来候訳ニ無御座候、懸隔ニテハ情実決テ相達不申事
ノミ可有之奉存候、何卒御了察可被下候、委事ハ西郷ヨ
リ表通問合相成候間、懇ト文略仕候、各様為国家御厭

御尽力呉々奉祈上候、先々御答且御安否御尋申上度、
如此御座候、頓首、

十二月六日
伊地知壯之丞様
市來六左衛門様
岸良七之丞様
追テ、御連名ニテ甚慮略奉存候得共、御宥恕可被下
候、

一三 〔桂久武ヨリ伊地知貞馨・市來六左衛門
〔書翰〕

尚々伊地知氏ニハ、長崎表万事御世話相成、深々御礼
申上候、今時分ハハル々御滞崎中ト存候得共、書状
相達候時分ニハ御帰府候半、長崎表カタ々之御周
旋如何ト存申候、帰国之砌ハ、又々暫時滞留之含ニ
御座候、爰許安楽ハ誠ニ無此上、殊ニ外宿故何事モ
自由御推計可被下候、皆々出京相願ヒ候モ尤ニテ、
思ヒ当リ候位ニ御座候、

一筆致啓上候、余寒却テ弥増難凌御座候処、弥御壮栄

一筆致啓上候、余寒却テ弥増難凌御座候処、弥御壮栄

御精務奉珍重候、然ハ拙者ニモ無異条罷在候間、乍憚御放念可被下候、長崎表十二日出帆、十六日川口江着船、一日滞留、十九日致到着、御用向モ程能演舌イタシ、何モ如才無之、当分爰許之形勢モ日々相変、既ニ人数御引取之治論モ有之候得共、只今通ニテハ、先御見合可然トノ事ニ御座候、幕ト一會トノ間、嫌疑頗ニ相生シ、此度進発モ専両候ヨリ強テ申上候付、不得止事、進発之場ニ相成候処、応スル藩モ無之、孤立之勢ヒニテ頓ト致方無之、長州糺明モ未隨之事モ不相分候得共、存分參兼候哉、大小監察モ兩日跡引取、別説ニハ兎モ角モ尾ヲ取候トノ説モ御座候得共、至極秘事ニイタシ居候由、左スレハ如何ト相考申候、当分ニテハ全ク一會之為愚弄セラレ、無謀ニ落入、頓ト手下様無之処ヨリ、柴田藤五郎ヲ以調和ヲ計、一橋ヨリハ小松家御召相成、會藩ヨリハ頻ニ取會度ナト申テ、兩日跡小松家ニハ出会被成、合掌シテ喜ヒ候位ニ御座候得ハ、余程御勢ヒモ張レ、尚不相替手ヲ引テ、筋ヲ立候得ハ、自然好機會ヲ生シ可申トノ事ニ御座候、尤一橋ヲ落スノ策モ良相立居模様ニ相見得、内情混雜相究、乍併一橋之權威於幕府甚敷、役場進退等モ、惣テ

一橋ヨリ出候模様ニテ、閣老辺内情不服之訳モ可有之、不遠何欵面白キ事ニ成立候半ト存申候、扱大坂表御借金之儀、早速御留守居江相違候処、能々致承知、只今之振合ニテハ、決テ相調可申見込之由御座候間、年内中ニハ一統金錢出入甚混雜之由、正月三ヶ日相立候上申込候ハ、都合可宜トノ事故、其通相達置候、何卒相談通相運候得ハ仕合ニ御座候、シカシ当分金廻至極不宜、一統込入候形ニ被相聞申候、来春ニモ相成候得ハ、決テ繰合モ宜敷成立可申トノ事ニ御座候間、三度計ニ期限ヲ立、四五月方迄之間無相違相調候得ハ、可然申合置候、万年丸儀モ爰許ニテ承候得ハ、南部江致滞船余程難船之筋ニ被相聞、シイントルノサヲ相損、乍漸南部湊迄乗入、可也修覆相加、加奈川辺江参賦ニ御座候由、石炭モ全ク引切、加奈川ヨリ不相廻候テハ、外ニ手段モ無之、過分之御入費ニ相及候由、江戸表江猪之谷某參、右修覆料三百兩丈相受取、折角石炭之手当イタシ候ヨシニ御座候、何分時分不宜、不都合散々込入申候、尚申上度儀ハ山々御座候得共、未着涯取込居何モ不行届、乍荒増以乱毫得貴意候、折角時分柄御厭御保護專要奉祈候、時季御尋且カタ／＼御礼為可申

上、如此御座候、恐々謹言、

十二月廿六日

桂 (欠)
右衛門

正二位

庭田重胤卿

正五位下

阿野實允

藤波言忠

右十二月廿七日

勅許

藤島

藤原助順

一三 〔非藏人日記〕

巳十二月廿六日分共其外共、来寅年正月四日、在京ノ

諸侯方御参

内被 仰出候事、

但年頭御礼也、

奥記

戸田大(忠幸、高德藩主)和守様寮御馬御拝領之事、

大久保主膳(忠恕)正殿京町奉行被 仰付候事、

本多忠良(四郎藩主)本田美濃守様老中願ノ通被免、溜詰之格被 仰付、

任

左近衛権少将

高野保建朝臣

叙

右禁色昇進等十二月廿九日

勅許

丹羽左京大夫様御再願ノ通御暇被下、正月元日御発足

ノ事、

南部美濃守様(利剛、盛岡藩主)此度限御名代ニテ、三ヶ月詰御再願ノ通

相濟、正月四日仮建所江参上、三ヶ月詰御褒美頂戴、

年頭御礼申上ル、

南部監物殿

来寅年当地三ヶ月詰御警衛、夫へ割当可被仰付候处、

進発ニ付テハ供其外ニテ人繰差支候付、先達中ノ御警

衛計、其余ハ追テ可被仰付由ノ事、

上杉弾正(齊憲、米沢藩主)大弼様

正月ヨリ三月迄

南部美濃守様

稻葉民部大輔〔正卿〕様

右ノ通十二月廿九日其筋ヨリ申来、

寅年正月

井上河内守〔正色〕様御上坂、差急付名代ヲ以 天氣御伺被成

候事、

ママ儀不相分

二條関白様以來御役料五百俵ツ、年々被進、且近来格別御用多端ノ折柄、一際御励勤被成、且

御所ヨリ被 仰出之趣モ有之候付、別段ノ訳ヲ以御在職中米七百五十俵ツ、年々被進候ト、其筋ヨリ申来候

事、永井傳八郎様從五位下信濃守被仰付、正月四日松〔久松定頼、伊予松山藩主〕平式部大輔様初参

内、年頭御礼被申上候事、

正月御式写

元日 四方拜 撰家中 節句

二日 大床子御膳

三日 早節 式部今宮 常陸宮

右大臣 前右大臣

三室戸三位 三室戸新三位

右三位中将左京権大夫和光朝臣 治光

四日 外様・公卿・殿上人

五日 千秋万歳

六日

七日 白馬節会

八日 仁和寺宮 内々門跡 御修法

九日 黒御所

随心院准后 大乘院門跡 一乘院門跡

随心院新門跡 外様入道

十日 諸礼 非藏人

十一日 神宮奏事始

十二日 賀茂奏事始

十三日

十四日 本元師法後七日阿闍梨

十五日 御吉事毬打

十六日 踏歌節会

十七日 三毬打

十八日 東本願寺

十九日 舞 御覽

廿日 養源院 法温院マ 南禅寺 五山

廿一日 護浄院 小池坊 智積院 蓮臺寺 本國寺

廿四日 和歌御会始

右

叙

正三位

中御門 經之卿

右正月四日 勅許

同 德大寺公弘
同 難波宗明
從五位上 藤井行徳

叙

從三位

高倉 永秋朝臣

松平肥後守様旧臘山陵御修補速成功、依奏 御裏附御狩衣御拝領由、

同

穂波 経慶朝臣

戸田大和守様同断付、寮御馬鞍置御拝領、且越前守様

同

樋口 静康朝臣

八祖忠次様從四位下

正四位下

中園 実和朝臣

宣下、越前守様ニ御太刀一振御拝領相成候由、

同

清水谷 公考朝臣

仙臺侯・大村丹後守様(純徳)・丸亀侯等御答一件ニ付、以名

從四位上

外山 光輔朝臣

代此節伺

同

油小路 隆貴朝臣

天氣之事、

從四位下

萩原 員任

尚年頭 上使中條左衛門督様、二月四日五日頃上京之

同

冷泉 為紀

由、

正五位下

植松 雅徳

任 正親町三条実愛卿男童形

同

石井 行知

侍從 公勝

同

河鱒 實文

左京大夫 交野 時菖卿

同

裏松 良光

左兵衛佐 三室戸 和光朝臣

同

園 基資

右馬権頭 藤井 行徳

同

北小路 俊堅

叙

從一位 德大寺 公純公

從三位 倉橋 泰顯朝臣

正四位下 藤原家理男 家威朝臣

清岡

正五位下 客分長 延

同 菊亭故美順四男修季

從五位上 八条隆吉

從五位下 藤原為遂男藤原為靜ア、五才

正月十五日 勅許

野宮家雜掌西池永水儀、從六位下大膳少進正月十五日勅許、以來西池大膳少進卜相名乘申候、

但

山陵奉行依奏野宮家侍、此度御取立ニ相成候事、

貢獻作ア、五年分御品御治定、獻殘御品 関白様・議奏・

伝奏ニ御進上可相成候事、

右献上御勤御使半上下御着用御治定、

辞左近衛大将 近衛忠房公

左馬寮御監等

賜隨身兵仗

御同人様

叙從一位

御推叙

兼左近衛大将 一条實良卿

為左馬寮御監

御推任

正月十八日 勅許

萩原右衛門佐様、中橋下総守様娘御縁組、御願ノ通相

濟候事、

正月十九日在京諸侯、舞御覽拜見被 仰出候事、

右正月十九日

朔平御門前御警衛丹羽様被免、稻葉民部大輔様御家来

御警衛之事、

土州様

溝口様

真田様

当夏三ヶ月詰被

仰付候事、

三月二日

一四 〔餘田三右衛門・井坂甚左衛門ヨリ黒田清綱へ書翰〕

華章被成下忝々拝読仕候、為御暇乞遠方之処、旅宿迄態々御来照被下候由、御繁多中別テ忝ク、鳥渡御行違ニ罷成、不得拜容失敬遺憾之次第ニ奉存候、此節罷出候儀ニ付テ、縷々御懇細之御書中、誠ニ汗背恐縮之仕合ニ奉存候、帰郷仕候上、木村得太郎へ委細御加章之通可申聞奉存候、却説為御饒別御国産之名葉三拾葉御恵投被成下、千万難有、不取敢拜味仕候処、実ニ結構ナル御品柄ニテ、別テ難有仕合拜受仕候、シカシ此節御世話ニ相成候末、ケ様ニ御撰念之儀有之、心痛不少恐怖之至ニ奉存候、何様弊藩御通行モ御座候ハ、必拝顔可仕奉祈再会事ニ御座候、右御礼答マテ得貴意度、草略如是御座候、頓首、

五月二日

餘田三右衛門

井坂甚左衛門

黒田嘉右衛門様

拝酬御移返上

一五 〔南大一郎ヨリ黒田清綱へ書翰〕

寸楮拜啓仕候、然は過刻は御妨申上候、私旅宿ハ三田尻本町重村作右衛門と申者方ニテ御座候間、御使被下候ハ、此処江御尋被成下度、宜御頼申上候、敬白、

十一月十七日

南 大一郎

黒田先生

侍史中

一六 〔武部諫尾ヨリ黒田清綱へ書翰〕

華墨拝読、弥御清福奉大賀候、今日は御閑静之由、早速可罷出候之処、昨夕より少々不快ニ打臥居候都合ニテ無抛參様難相調、実ニ失礼千万遺憾此事ニ御座候、右之段朝来御懸合置可申之処、無其義是又御海涵可被成下候、素り格別之病氣ニテも無之候ニ付、孰一両日之中ニハ是より御挨拶旁、罷出可申候ニ付、右等不悪御許容之程奉祈候、不取敢拜答而已、草々頓首、

四月十五日

武部諫尾

黒田嘉右衛門様

拜復

一七 〔伊丹重本ヨリ黒田清綱へ書翰〕

謹啓、一昨日は得拝肩候処草卒ニ付、昨日拝趨仕候得共、御他行中彼是ニテ不得緩話、遺憾之仕合奉存候、陳は先夜粗御嘶申上候通、御依頼申上度儀御座候間、唯今参叩之含ニ御座候、御差支共は無御座候哉、承度御尋申上候、貴酬奉待候、草々頓首再拜、

四月十二日

黒田嘉右衛門様

伊丹眞一郎(重本)

侍史

一八 〔水野正名ヨリ黒田清綱へ書翰〕

夕刻は御光来被下候処、本陣中ニテ御行違ニ相成、不得拝話遺憾此事ニ奉存候、然は明日愈御発程之由、何欵御多用奉察候、就て條公より内命之次第も御座候間、

今晚ニも昇堂可仕心得ニ御座候処、先時退出只今迄取

調之義御座候て遅緩ニ相成、何れ明朝拝趨万可得貴意

候、扱又当藩筑紫衛(義門)・早川養敬等京師より帰来、昨夕

到着之由、必竟内輪混雑之次第も有之哉之趣ニテ、小

野阿波義福岡江罷越居、只今帰宅、今日中上国之模様

聞合候て罷帰候得とも、耽と聞得候義も無御座候、一

体尊藩ニテ被任御周旋候儀も御座候間、可相成ハ近情

筑紫等御直对御帰郷ニ相成候ハ、可宜哉、一兩日中ニ

は当所へ右人数中出掛可申被存候、右は承候俣御内含

ニも可相成と奉存、得貴意申候、右余拜鳳と草々頓首、

卯月十九日

水野(正名)

黒田尊君

侍史

一八ノ二

先刻は昇堂却て御面倒ニ罷成申候、然は其節之一儀は

委細ニ申達置候間、いつれ期拜鳳可申上候、扱矢野相

摸明後四日頃罷出候由申来候旨、今日相達申候、必竟

御尽力故急埒仕候義万福ニ候、此段御承知旁得貴意申

候、頓首、

四月二日

黒田君

座下

水野拜

一八三

昨宵は昇堂得芳話、大慶不斜奉拜謝候、尔は御内談之條御染筆御出来ニ相成申候間、則御廻申上候、御落手可被下候、愈以明日ニも御発程之御都合ニ御座候哉、且又伊集院君御左右も被為在候事乎と、乍序奉伺候、此旨為可得貴意如此御座候、頓首、

五月八日

黒田君

水野拜

一八四

三條公御逢之義、何時ニても宜御座候間、御勝手御參殿ニ相成候様、可得貴意との御事ニ付、如此御座候、頓首、

三月廿二日

黒田嘉右衛門様

水野溪雲齋

一八五

先刻は參館仕得芳話奉拜謝候、陳は只今退出仕、條公より御内話之次第も御座候間、御差支無御座候ハ、參館可仕御模様奉伺候、若御旅館中雜沓も御座候ハ、御實臨被成下とても難奉願候得共、何之悶も無御座、否尊答奉待候、頓首敬白、

三月廿一日

再白、明日中は博多御越之義、御見合ニ相成候様有御座度、條公より内々御沙汰御座候、委細ハ拜上と、匆々再敬、

黒田嘉右衛門様

侍史内用

水野溪雲齋

一八六

華墨拜誦仕候、然は今夕昇堂仕候様云々被仰下、難有奉謝候、折柄御暇乞參可仕相含罷在申候間、拜趨万々可奉得貴意候、御請迄、匆々頓首、

二月朔日

黒田嘉右衛門様

水野溪雲齋

尊酬

一八ノ七

只今は御枉駕御足勞之程奉恐入候、陳は輕微之至ニ御座候得共、心組用意仕置候間、此御酒肴奉呈厨下候、御笑味被成下候ハ、忝本懐之至ニ可奉存候、頓首拜、

三月廿一日

水野拜

黒田君尊台

侍史

水野様

一八ノ九

今朝は御光駕被成下候処、草臥中不得拜話失敬之至、御海涵可被下候、然は別紙面申來候間、御模様相伺申候、無御腹臆可被仰聞下候、此分用事而已如此御座候、否奉待候、頓首、

卯月九日

水野拜

黒田尊君

侍史

一八ノ八

別紙書面申參候ニ付、御都合次第御參 殿可被成候様 奉存候、仍如此御座候、頓首、

十日

水野

黒田様

内用別紙在中

別紙

黒田嘉右衛門

明八ツ時比より被為召、緩々御酒可被為下御積ニ御座候、乍併同人此節交代之都合、彼是多端ニも有之、差支之義も難計候間、一応有無之処御掛合可被下候様、自然差支等も御座候ハ、御酒之義ハ後日ニ延引、御用向而已ニ可被為召候、猶兩条之趣御掛合否哉可被仰聞候様、毎事乍御面倒此段御願迄、早々以上、

別紙
黒田氏江御逢被為遊度候間、今朝之内或ハ昼後ニても、同人都合次第參殿有之候様、宜御通シ可被下候、先ハ右御願如此御座候、以上、

十日

三宅

九日

三宅

水野様

一八ノ一〇 今日も暖和御同慶奉存候、扱昨日は昇堂却て御面倒ニ

一八ノ二一 包紙

相成申候、其砌御談合之次第委細申達候処、明日ニも

元結屋ニテ

御発途ニ御座候ハ、今日今一応御逢被成度、御繰合

黒田嘉右衛門様

水野溪雲齋

次第何時ニても宜、午御賢勞御参館被成下候様奉存候、

当用

此旨可得貴意との御事ニ付、如此御座候、頓首、

口述

二月朔日

水野溪雲齋

黒田嘉右衛門様

侍史

一八ノ二一

先時は御面倒ニ罷成申候、尔は帰宅仕候処、留主中福岡

矢野相州追付到着之由ニ御座候間、見計参殿可仕候ニ

より有志三坂小兵衛参り、五介応対仕候処、別紙面新

付、一卜通り拜謁相済候後、御侍請之御閑談も被遂候

聞御座候間、近頃之快事ニ付達御聞申候、別て書付類

思召ニ候間、先生ニも其刻御一同御参殿被成下度、昨日

も御座候由、追付参 殿之答ニ御座候間、相分次第可申

粗御談合仕置候都合にて御座候ニ付、左様御承知可被

上候、矢野大夫も愈明日出掛候由ニ御座候、箱崎にて

下候、尤伊丹眞一郎付添参居申候間、御旅館へ罷出候

世子君御相對有之、下地構ひも御座候哉ニ報致之者御

様申居候事ニ付、委細同人より御聞可被下候、猶参殿

座候、此段も鳥渡得貴意申候、倉卒間用事計、頓首、

治定ニ相成候段ハ、眞一郎へ申含置候、彼是申上度義

三日

卯月四日

正名拜

黒田尊君

侍史

々再敬、

尚々、小野阿波今朝より久留米へ罷越候間、砲発之

一条より田代之事迄探索方申含置申候、尤三月廿一日、御出馬之様子ニ御座候、何も拝鳳卜為其計、匆

正名拝

黒田尊君

侍史

二過日来は時々失敬ニ相成、御海容奉祈候、今日あたりハ如何ニも候哉、若し御閑暇ニも候ハ、罷出申度、御都合次第御一答奉煩候、為其草々頓首、

四月廿一日

一九 〔南大一郎ヨリ黒田清綱へ書翰〕

武部諫尾

黒田嘉右衛門様

侍史

御手簡拝見仕候、然は明曉御発程之御趣、折角御途中御自重可被成候、孰レ不遠御出浮之上御面話奉待候、平戸藩士兩人罷出候由にて、手紙尙通被差送、慥ニ落草仕候、同人時宜ニより私江面会仕度由ニ候得は、右宿江無沙汰にて、突然私旅宿迄参リ呉候得は、何時ニても面会可仕候間、御都合も御座候ハ、其形御通し被下度奉頼候、取急キ先は右貴報迄、草々如此御座候、頓首、

五月八日

南 大一郎

黒田嘉右衛門様

侍史貴報

二〇 〔武部諫尾ヨリ黒田清綱へ書翰〕

今日は殊之外好天氣ニ相成候処、愈御壮快奉賀候、誠

二一 〔本澤甚兵衛・鞍掛馬十郎ヨリ黒田清綱へ書翰〕

拜見仕候、過刻ハ不計推参御高配被成下、難有奉謝候、扱別紙態と為御持被下、難有慥ニ拜見仕候、何レ相窺万々可申上候得共、一応貴報迄、早卒頓首、

五月八日

本澤甚兵衛

鞍掛馬十郎

黒田嘉右衛門様

二二 〔渡邊昇ヨリ黒田清綱へ書翰〕

拝呈、昨夕は大醉大失敬、醒て奉恐縮候、御海容可被下候、扱明日弥三田尻江御参程相成候哉、御左右奉寛度如是御座候、草々頓首再拝、

十月廿九日

黒田嘉右衛門様

渡邊 昇

拝呈

二三 〔森寺大和守ヨリ黒田清綱へ書翰〕

以手紙得貴意候、過刻御参殿、毎々御苦勞奉存候、然ハ此御酒肴甚輕微之御事ニ候得共、被為送度、仍御廻し仕候、御握手可被下候、此段可申入旨如此御座候、
匆々頓首、

二月朔日

森寺大和守

黒田嘉右衛門様

二四 〔寺田嘉兵衛ヨリ黒田清綱、堀為影へ書翰〕

翰

啓呈仕候、弥御安壯被成御座奉敬賀候、然ルニ夜前御掛合申上置候末ニて、今日淺山彌左衛門旅宿江、土持様御一同御出浮相成、尚又御委細被仰向候由ニ付、早速同人より福岡江申越、否相分次第御通達可仕、右之趣御掛合申述候様申談候ニ付、此段御掛合仕候、左様御承知可被下候、将又熊澤助左衛門旅宿江も御枉駕被下候由ニ候得共、折節指限用向ニて取紛居候て、御面会仕不申、御無礼申上候、後刻宜敷節御通達可仕旨、申述居候由ニ候得共、彌左衛門江被仰向候御用而已ニ候ハ、助左衛門江は別段御面会仕ニは及間敷哉と、相心得居申候、否御答被成下度奉頼候、以上、

四月廿三日

寺田嘉兵衛

黒田嘉右衛門様
堀 直太郎様

二五 〔南大一郎ヨリ黒田清綱へ書翰〕

謹て拝誦仕候、益御安静奉恭喜候、然ハ小生對州表より昨日帰着之儀、御承知被成、右ニ付御宿迄罷出候様、委曲御書中之趣拝承仕候、後刻以參万々可申上候条、

省略仕候、草々貴酬如此ニ御座候、頓首、

初夏十六日

謹作

拝答

黒田先生

侍史

二六 〔某覺〕

二六ノ一
神武帝御陵江

奉幣使被差立候事、

長州侯御復官以

勅使被 仰越候事、

勅使

御姓名申来候由
之処三坂遺忘

幕府江御手切ニ可相成

朝議之事、

一兵庫開港

勅許不被為在候ハ、年々

献備之米拾万俵差上不申との事、

一京師江譜代諸侯而已相詰、

外諸侯は全不入との事、

一今一ヶ条三坂遺忘

右三ヶ条幕府申立候由之処、

朝議断然御引上無之事、

一薩州大夫小松帶刀、此節於京師大ニ周旋、二條殿下江

詰切候て、尽力有之居候由之事、

右京地之近情申来候由、三坂小兵衛入来談話有之候、

丑四月三日也、

二六ノ二

緑樹陰々籠密雲

声々杜宇不堪聞

為官三黜尋常事

唯恐多言及我

君

偶作 玩易幽人草

〔番号一五〕二六は黒田文紀氏所藏本にて校訂

二七

〔藝州出張軍賦役ヨリ筑州宰府出張軍賦
役へ書翰〕
〔番号一四〇〕と同文により削除

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編
慶應二年一月

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料」
（紙数五四枚）の記載あり〕

慶應二年丙寅清曆同治五年
西曆千八百六十六年

神武天皇御即位紀元二千五百三十年〔マ〕

孝明天皇統七第百二十代御即位弘化四年
辛未十月二十年御宝算〔マ〕

將軍家茂公第十襲職
安政五年
戊午十月九年十四〔マ〕

藩主忠義公第九世
第二十九代知政安政五年
戊午十月九年実第二十六

藩祖忠久公薩隅日三州及琉球國受封
〔人皇八十二代〕
後鳥羽天皇壽永五年即チ文治三年
〔二〕六百七十九年〔マ〕

関白左大臣二條齊敬公

右大臣 徳大寺公純公

内大臣 近衛忠房公

老 中

〔山形藩主〕
水野和泉守忠精六月罷免

〔宮津藩主、本莊〕
松平伯耆守宗秀七月依事罷免

〔唐津藩主〕
小笠原圖書頭長行

〔備中松山藩主〕
板倉伊賀守勝静

〔浜松藩主〕
井上河内守正直

〔松平周防守康直〕
松平周防守康直

〔沼津藩主〕
水野出羽守忠誠

〔淀藩主〕
稲葉民部大輔正邦

〔田野口藩主、大総〕
松平縫殿頭乘讓

〔館山藩主〕
稲葉兵部少輔正巳

〔老中格〕

若年寄

〔相良藩主〕
田沼玄蕃頭意尊十月罷免

〔宇手渡藩主〕
立花出雲守種恭

〔館木藩主〕
遠山信濃守友詳

〔長島藩主〕
増山對馬守正修

〔館山藩主〕
稲葉兵部少輔正巳六月辭職

〔田野口藩主〕
松平縫殿頭乘讓六月老中格へ転

〔峰山藩主〕
京極主膳正高富

〔飯野藩主〕
保科弾正忠正益

〔泉藩主〕
本多能登守忠紀

〔天多喜藩主、大河内〕
松平弾正忠正質

所司代

〔桑名藩主〕
松平越中守定敬

京都町奉行

瀧川讚岐守元以十月罷免

大久保主膳正忠恕

遠山隱岐守資尹

伏見奉行

林肥後守忠交

国老

喜入攝津久高

小松帶刀清廉

桂右衛門久武

町田内膳久憲

岩下佐次右衛門方平

諏訪伊勢武盛一時島津ノ稱ヲ許ス

新納刑部久脩

川上龍衛久齡

以上八名前代ヨリ勤統ノモノハ○印ヲ付ス〔底本には○印なし〕
〔朱〕

目錄

長藩野村右中ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

水野溪雲齋ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

西郷吉之助ヨリ蓑田傳兵衛へ書翰

黒田了助ヨリ西郷吉之助へ書翰

渡邊昇ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

福井藩中根鞆負ヨリ大久保利通へ書翰

木戸孝允ヨリ坂本龍馬へ書翰

伊地知壯之丞自記

三吉慎蔵日記抄

西郷隆盛ヨリ蓑田傳兵衛へ書翰

小松帶刀ニ上京ヲ命ス

軍備拡張ニ就キ兩番頭上申書

中山實善日記抄

小松帶刀ヨリ大久保一蔵へ書翰

岩下が大坂ニアリテ在京ノ大久保ニ贈リタル書翰
出兵ヲ辞スル建白

東久世通禧日記抄

小松帶刀ヨリ大久保一蔵へ書翰

大山格之助兵ヲ率ヒテ太宰府ニ向フ

〔長州処分ニ付幕府ヨリ奏聞〕

〔処分ニ対スル長州答弁〕

勝安房薩藩ノ出兵辞退書ヲ却下スヘカラサルヲ説ク

柴山良助軍事費ニ関スル書類

〔朽木ノ詩〕

二八 長藩野村右中ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

〔蘆屋陣中〕

年始之御祝詞申納候、尔後益々御清適万賀仕候、サテハ有馬藤太君ヨリ承候弊国改正書、過日差出候通之部、猶一本差遣様トノ義承知仕候、〔真色〕節角廣澤兵助持登候ニ付、表通尊藩へ差出候部一本、今日小生持参仕候間、御落手御取計可被下候、先過日来御相摺旁罷出候処、〔候〕御他出ニテ不得拜顔、依テ御留守へ相頼置申候、猶拜面之節委可申上候、頓首、

正月三日

野村右中〔案心〕

黒田嘉右衛門様〔清綱〕

別書相添

二九 水野溪雲齋ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

従太宰府

黒田嘉右衛門様

水野溪雲齋

内用 平安

新春之御慶、千里同風芽出度申納候、先以弥御安剛可被成御越年奉敬賀候、爰許相変候義無御座鄙生碌々加馬齡申候、乍慮外御放念思召可被下候、上国近況此節〔案〕〔登之節〕大山君より之御左右御座候処、幕府ニも尊藩江河篇御依頼ニ相成候と申候都合にて、五卿之御周旋振等順流仕候趣、結局如何可有御座哉、此御方よりも御依頼ニ相成、御宿志可被達義而已奉専念候事ニ御座候、扱弊藩之一条、段々御高配被成下候、未頑固難動慨歎罷在候処、追々弊政相畳り、患害百出仕候付、物議紛々差起候処、夷人久留米江参候事件より、口実と相成、議論沸騰、此時勢急度改革にも不相成候ては、社稷生靈如何と、件々々条ヲ以、家中一統より申立候次第ニ立至候、内

にも解囚之一議も発、是迄時勢ニ被押、半信半疑之族ハ、大概開悟反正之姿ニ相成候末、豊後日田江御預之一議差起、此節論判後、弊国一手ニて引受と申ニ相極候、然所窪田治部右衛門〔鐵勝、日田郡代〕も久留米江罷越候て、只管長ヲ恐怖、夫故米府より使節も差止候哉ニて、未運ひ付不申候、此頃小倉へ鏡五助差越候て、長へ内情談置候都合も御座候間、殊ニ寄從是助説之立方も可有之哉、其内家老有馬飛驒最早六旬七八之宿老、実ハ弊藩之周公旦ニ御座候て、自由勤ニ相成候処、此節解囚且日田一条ニ付大ニ奮発、有馬監物と議論合兼候由、右内外之情実此節社反正之機会動候哉と勘考罷在、尤長よりも先年来より周旋之次第有之、此節反正之場ニ至、日田一条よりは論出も出来可申相合居候事ニ付、少ハ目途も立可申哉、猶又追々御高配之末、尊合ニは、克々情実も御承知通之事ニ付、宜御差合置可被下候、米府より不絶音信も有之候得共、余程混雜之模様ニて、政府之議論も朝夕變転、取留候事も更ニ無之、當時は先々日田取扱方之義急務と相聞候、尤憂閉共氷解仕、反正之期ニ至候ハ、必ず使ニても尊藩へ可被差越、何卒此機会千歳一時不取失様、仰て奉折候事ニ御座候、尚

思召も御座候ハ、為天下御助力之程幾重にも奉依頼候、右奉得貴意度、猶期後首之時候、恐々頓首敬白、

正月四日

〔久留米藩家老〕
水野溪雲齋

正名

黒田嘉右衛門様



再伸、時下余寒之節御自愛為国家奉折候、乍憚御同藩様、是迄御談合ニ相成候川畑先生方各君へ、御序宜御伝言奉頼候、且又同藩幡島事無扱次第ニて、尊藩江攀躋仕候半、定て御厄介之御義と奉存候、宜御願申上置候、
〔黒田文紀氏所蔵本にて校訂〕

三〇 西郷吉之助ヨリ蓑田傳兵衛へ書翰

新年御吉慶、

御両殿様御機嫌能被遊御超歳、恐悦之御義奉存候、陳ハ長州御訊問之次第、今ニ至極秘し居候故、巨細分兼候得共、別紙真偽難計候得共、手ニ入候付差上申候、
〔朱〕〔送之〕
全愚弄せられ候姿ニて、一段此談判ニて、勢ひを却て堅し候時機ニ御座候、〔送〕〔台等相問書参看〕 迎も所置を立候付ても、相当之義ハ出来申間敷、案ニ相違之向ニ被相同申候、幕府之

見込通何も出来兼候様子ニ御座候、益諸藩ハ動き不申勢(一)翁(老)ニ相成、実ニ失謀之姿ニ御座候、近日大久保越中(忠寛)守上坂仕候付、決て大策を立可申欵、若不被行候ハ、

此人物ハ只官路ニ上ケテ、餌を以繫止候義ハ、万々出来申間敷、道不被行候ハ、必引込可申、此大久保之進退挙動ニ付テ、幕府之運ハ定可申、何れニ運立候哉、

大事之場合ニ御座候、越前(前寛)よりも中根雪江近来上京、

国論も慥ニ居付、尊幕ハ屹と取止(隆盛)ニいたし、名分条理を以突立候由ニ御座候、親藩さへ右様相離れ候勢(隆盛)ハ、御推量可被下候、此旨大略迄如此御座候、頓首、

西郷吉之助

正月五日

蓑田(長胤)傳兵衛様

(大久保利謙氏所蔵本にて校訂)

三一 黒田了介ヨリ西郷吉之助へ書翰

其後不得貴意候へ共、倍々御勇健可被成御座、珍重奉南山候、然ハ小生も去月廿八日、防州三田尻港出帆仕候処、不順ニテ漸く今夕方ニ着坂、御宅(志)旅宿(志)へ罷在申候、就(志)全上(志)てハ木戸氏、外ニ上下八人同船仕、右御宅内へ罷居

られ申候、扱木戸氏儀、実ニ先生而已偏ニ被相慕、此節上国相成申候ニ付、願くハ乍大儀、伏見御宅へ同伴仕度御座候間、右へ御待迎ひ被成下儀相叶間敷哉、明五ツ過、爰元出帆之筈ニ御座候ニ付、少々宵ニ入可申候間、為御案内申上置候、尤其御許御都合も可然様奉頼候、先ハ以大略要用而已如斯御座候、謹言、

寅正月七日

黒田了介

西郷吉之助様

(葛津忠承氏所蔵本にて校訂)



三二 渡邊昇ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

(長州藩士三名依頼事件)

薩州御藩

大村

黒田嘉右衛門様

渡邊 昇

大急用 平信

御披展

長崎ヨリ発

御別申上候テ後益御機嫌能被遊御精勤、奉恐悦候、二小弟依旧碌々消光罷在候、御一笑可被下候、尔ハ先

頃長州藩生三人河越精一・梅田次郎・古溪清二小弟ヲ被尋、少々之事件有之、窃二国ヲ出候趣申置候故、一々承リ糺候処、全体三田尻農兵之総督相動候仁ニテ、藝州出張之折農兵共申出候ハ、拙者共ニハ兼テ微忠ヲ尽度心得ニテ、無事昇平之節ハ農ヲ勤、今日之動乱ニハ生命ヲ国家ニ報度、千辛ヲ経罷在候得共、在所表へ残り居候姦商ナドハ、兵乱ニ不拘偏ニ私欲ヲ専ラニシ、御大法ヲ破リ、米穀之拔売ヲ事トシ、我々兼テ力ヲ尽候米ハ、姦人ニ掠メラレ候振合申来、実ニ不都合千万此事ニ候得ハ、何卒至当之御所置有之度段申出候故、三人之面々帰国ノ上大ニ議論ヲ発、郡宰ヘモ一々申入候得共、一向取入無之所ヨリ、少々混雜ヲ生シ、先々国元ヲ拔出、後凶ヲ成シ可申、就テハ是ヨリ海軍修業致度合ニテ、弊藩尋ニ相成、素ヨリ山口表ニヲヒテ、内々承リ及候事ニ御座候得ハ、微力之及丈ハ相尽可申合ニテ、唯今迄当藩潜伏五代先生御帰崎ヲ相待候処、去五日御着故、早速御依頼申上候処、素ヨリ尽力可致、乍去拙者ニモ是迄段々豊後森藩主之一件ニテ、国元ヨリ何モ無益之人ヲ致心配候様之振合ナト申来、迷惑之央也、尤右三人ハ格別ノ義ナレハ、一先黒田ヘ一書ヲ

飛シ、内輪之周旋致サセ置、追々拙者帰国之節、同行可致方可宜敷トノ御内話モ有之候故、私ヨリモ先生迄偏ニ御尽力奉希候、全体右三人ハ篤実第一之壮年ニテ、御面会被下候得ハ相分可申、決テ御懸念無之テ宜敷可有御座候、万一御迷惑之儀モ出来仕候ハ、乍不及小弟其責ヲ蒙リ可申候得ハ、何卒御尽力ヲ以御国へ御留被下、時々ハ航海之術モ相学度、其辺御合被下候テ、万事御差引奉希候、右奉嘆願依頼度、乍失礼以書中如是御座候、乍末筆為天下御自愛奉禱候、今度五代君ヨリ京攝之近状承リ、唯々長嘆息仕候マテ、皇国之命脈思遣ラレ候事共ニ御座候、恐惶謹言、

正月十日長崎ニ認

〔大村藩士〕
渡邊 昇

黒田先生

梧下

二陳、頃日嘆願仕置申候敵藩へ御臨被下候事、可相成ハ、今春ハ是非先生御心興カテラ、御貴臨ハ相叶間敷哉、同志一同是以嘆願仕候、何事モ拜顔ノ上ト、差急乱文筆ヲ願ミス如是御座候、頓首再拜、

三三 福井藩中根親負ヨリ大久保利通へ書翰

密啓仕候、過刻ハ御細書被下奉謝候、京地之模様モ御承知ニ相成候ニ付、弥明日御解纜相成候由、折角御安全御渡航之儀奉專禱候、扱京議御決ニテ、御処置之程ハ相分候へ共、此上ハ御施シ方之御趣意一大事之儀ニ付、其運ノ幕状如何可有之哉ト、乍匆々端々承諾候処、御処置如此相決候上ハ、全ク御再討可相成、御疑惑之筋ハ申訳相立事故、改テ一昨年へ立戻リ、御初征ノ御趣意ヲ以、御処置相成候状之様子ニテ候、左候へバ昨日モ御談論ニ及候通り、天下不容之罪ニ服候上ヲ以之御処置ニ相成事候へハ、夫ヲ甘受不致候テハ、幕ハ扱置奉対 朝廷候テ、又必伐之罪戻ヲ増候条理候へバ、於彼モ果シテ異議モ有之間敷哉ニ被存候、愈右等之御運ヒ相成候へバ、〔朱〕〔安房〕尊藩ノ御尽力有之候御盛積モ相顕レ、随テ於弊藩モ案山子ナガラモ、副措之伍モ空シカラサリシ姿ニテ、窃ニ大慶仕候、迅速之御施可相成哉如何ハ、今日之処未決之様子、今後ノ儀モ是非御変革ナラテハト申議論モ随テ有之、〔朱〕〔安房〕勝先生之儀モ専ラ御評議御使ヒ方カ 中之様子ニテ、右等不取留事候へ共、昨日御晰

合申上候末故、御船中御参考之御片端ニモト承候文ケ早々及密啓候、御一過後御投炎可被下候、御出船前ハ差急キ、早々頓拜、

正月廿四日

〔福井藩家老〕
中根雪江

大久保君

親展投炎々々

三四 木戸孝允ヨリ坂本龍馬へ書翰

奉呈乱筆候ニ付、得と御熟覽御推了、不足之処ハ御了簡奉願上候、

拜啓、先以

御清適、大賀此事ニ奉存候、此度ハ無間また御分袂仕候都合ニ相成、心事半を不尽、遺憾不少奉存候、乍然終ニ行違と相成、拜顔も当分不得仕事歎と懸念仕居候処、〔小松帶刀〕〔西郷隆盛〕御上京ニ付候てハ、折角之旨趣も小・西両氏等へも得と通徹、且両氏どもよりも、将来見込之辺も御同座ニて、い曲了承仕、無此上、上ハ
皇国天下蒼生之為め、下ハ主家之為ニおゐても、感悦之至ニ御座候、他日自然も

皇国之事開運之場合ニも立至り、勳

王之大義も天下ニ相伸ひ、

皇威更張之端も相立候節ニ至り候ハ、大兄と御同様

此事ハ滅せぬ様、後來之為にも明白分明ニ称述仕置申

度、乍然今日之処ニテハ、決て少年不羈之徒へ洩らし

候ハ、終ニ大事ニも關係仕候事ニ付、必心ハ相用ひ居

申候間、御安心ハ可被遣候、弟も二氏談話之事も吞込

居候へ共、前申上候通、必竟ハ

皇国之興復ニも相係り候大事件ニ付、試ニ左ニ件々相

認申候間、事其場ニ至り候時ハ、現場

皇国之大事件ニ直ニ相係り、事そこに不及して平穩ニ

相濟候とも、將來之為にハ相残し置度義ニ付、自然も

相違之廉御座候ハ、御添削被成下候て、幸便ニ御送

り返し被成遣候様、偏ニ奉願上候、

一 戦と相成候時ハ、直様二千余之兵を急速差登し、只今

在京之兵と合し、浪華へも千程ハ差置、京・坂両処を

相固め候事、

一 戦自然も我勝利と相成候氣鋒有之候とき、其節

朝廷へ申上、屹度尽力之次第有之候との事、

一 万一戦負色ニ有之候とも、一年ヤ半年ニ決て潰滅致し

候と申事ハ無之事ニ付、其間ニは必尽力之次第屹度有
之候との事、

一 是なりにて幕兵東歸せしときハ、屹度

朝廷へ申上、直様冤罪ハ從

朝廷御免ニ相成候都合ニ、屹度尽力との事、

一 兵士をも上国之上、橋・會・桑等も如只今次第二て、

勿体なくも

朝廷を擁し奉り、正義を抗ミ、周旋尽力之道を相遮り

候ときハ、終に及決戦候外無之との事、

一 冤罪も御免之上ハ、双方誠心を以相合し、

皇国之御為ニ碎身尽力仕候事ハ不及申、いづれ之道に

しても、今日より双方

皇国之御為

皇威相輝き、御回復ニ立至り候を目途ニ誠心を尽し、

屹度尽力可仕との事、

弟におゐてハ、右之六廉之大事件と奉存候、為念前申

上候様、戦不戦とも、後來之事ニ相係り候

皇国之大事件ニ付、御同様ニ承知仕候て、相違之義有之

候てハ、終にかゝる苦身尽力も水之泡と相成、後來之

青史ニも難被載事ニ付、人ニは必知らせずとも、御同

様ニハ能く、覺置度事と奉存、御分袂後も得と愚案仕、毛頭無御隔意処を以、内々大兄まで為念申上候義ニ付、右六廉得と御熟覽被成下、自然も弟之承知仕候義、相違之義も有之候ハ、必々御存分ニ御直し被成遣候て、此書状之裏へ乍失敬御返書御認め被下候て、幸便ニ屹度無御相違御投し被成遣候様、偏ニ奉願上候、実ニ此余之処ハ、機会を不失が第一にて、いか様之明策良計ニても、機会を失し候てハ、万之ものが一ツほど役ニ相立ち不申、事ニより候てハ、却て後害と相成候事も不少、兎角いつでも正義家ハ、機会を失し候等の事ハ其例し不少、終ニ姦物之術中ニ陥り候事、始終ニ御座候間、御疎も無之事ニ御座候へ共、此処ハ精々御注目被為成候て御論述、

皇国之大機必無御失却、御回復之御基本相立候処、奉祈処ニ御座候、○乙丑丸一条小事ニハ御座候へ共、い曲御承知之如く、一身ニ取り候てハ困苦千万にて、且海軍興廢ニハ屹度相係り候事ニ付、何も逐一御存之訳ニ付、兼て存じ通ニ相運ひ、弊国之海軍も相興り候様、無此上呉々も奉願候、何分にも小松大夫吞込呉不申候てハ、実以困迫此事ニ御座候、随て海軍ハ廢滅ニ至り

可申候と懸念仕候、先ハ前条之次第愚按迂考仕、兎二角一応可申上と奉存、相認候義ニ付、前条い曲申上候通之次第ニ付、得と御熟覽を賜り、必々御裏書にて御返書偏ニ奉願上候、其中必々時下御厭第一ニ奉存上候、乍失敬御序之節、小^{〔小松 西郷 吉井〕}・西・吉氏等其外諸彦へ可然御致意奉願候、い曲御礼書ハ帰国之上出し可申と奉存候、為其匆々頓首拜、

正月念三

尚々本文之処ハ、呉々も得ト御熟覽を賜り、万一も承知仕違へ之処ハ御直シ被成遣候て、必々幸便御裏書御答偏奉願上候、此余之処ハ、只々機会之処而已掛念至極ニ御座候、大事ハ元より小事ニても、必成敗ハ多く機会之失不失二有之申候、此辺之義ハ、呉々も御助力、

皇国之御為奉祈念候、○前田恭齋子^{〔香齋元直、医者〕}へ菓礼之事御願仕奉恐入候、且恭齋子より詩作も送られ候ニ付、其返答も可仕と奉存居、如御承知出立前大混雜にて、且々出立仕候位之次第ニ付、其義も其假打置候間、甚以不情不信之処、赧顔之仕合ニ御座候、御逢も有之候ハ、此辺之処宜敷御断り被成遣候て、彼菓礼

之処も何にててもよろしく、つまり品物にてても可然奉願上候、失礼之段奉恐入候、無此上

皇国之事ハ不及申上、乍恐私事も種々御願申奉恐懼候、挙て何もよろしく奉願候、只々御面会之折を奉待候、其中御答ハ幸便ニ奉願上候、為其閣筆、頓首、

〔坂本龍馬〕
龍大兄

〔天吉孝忠〕
松菊生

極密御独拆

〔裏面に朱書〕
表に御記被成候六条ハ、小・西両氏及老兄・龍等も御同席にて、談論セシ所にて毛も相違無之候、後來といへとも決して変り候事無之ハ、神明の知る所ニ御座候、

丙寅

二月五日

坂本 龍

〔本〕
「此一通ハ、長州之坂本龍馬の木戸準一郎へ送りたるものにて、
卅二年十二月、毛利家中京、平氏より奇送せらる」
〔寄〕

三五 伊地知壯之丞自記

一慶應二年正月二十日、当番頭御勝手方掛、其身一代御家老組ニ入レ置ルト藩命アリ、丑月日家兄卒去、
一御勝手方掛トナリテヨリ、金錢総括・財政・農政・物

産及ヒ開成所蒸氣船新設ノ諸器械、其他國中琉球・三島ノ事ヲ主任シ、事務殊ニ煩擾、其間御使者トナリ、
一タヒ求麻ノ人吉、又安藝ノ廣島之如キ三タヒ管下諸所ヲ巡回シ、長崎ニ出ルコト八回、京師ニ出ルコト五回、入京スルコト四回、

三六 三吉慎蔵日記抄

三吉慎蔵〔時忠〕當時ノ日記アリ、稍繁冗ニ失スル恐アリト雖モ、隆盛・木戸会合ノ光景、及ビ隆盛ガ帰国ノ事実ヲ記載シ、又勤王党入京ノ困難ヲ詳記シテ、大ニ志士ノ辛酸苦心ノ事情ヲ想見スベキモノアリ、故ニ之ヲ抄録セン、

慶應二年丙寅正月元日、御内命ヲ以テ當時形勢探索ノ為メ、土州藩坂本龍馬へ被差添、出京之義被仰付候ニ付、即刻長府出立ニテ馬關ニ至リ、福永専助宅ニ於テ初メテ坂本氏へ面会シ、翌二日ヨリ同宿シ、協議ノ上至急登京之事ニ決シ、出船ノ用意ヲ為ス、全月六日切船へ乗組ミ、同十日出帆ス、十六日神戸へ着直ニ上陸ス、此地へ一泊シ、入京ノコトヲ計ル、○同月十七日、神戸湊ニハ岡藩ノ警固アリ、神戸ヨリ通船ニテ上坂ス、

細川左馬介^(城内定勝)・寺内新左衛門ハ坂本氏へ随行ニ付同伴ス、兩名モ土佐ノ人ナリ、○同月十八日、大坂薩州邸へ坂本氏一同到ル、留守居木場傳内^(稱生)へ面会シ事情聞取候処、入京成リ難キ趣ニ由リ、木場氏ヨリ薩藩ノ船印ヲ借受ケ、坂本氏ヲ始メ薩藩人ト仮称シテ入京ノ用意ヲナス、夜ニ入り大坂城代大久保越中守宿所^(忠徳)へ坂本氏訪問ニ付同行ス、越中守ヨリ示談ノ趣ハ、坂本等事ハ探索厳密ニテ、目下長州人同行ニテ入京ノ旨相知レ、其沙汰アリ手配リ致シタルニ付、早々立退キ候方然ルベシトノ事ニ因リ、坂本氏一同切迫ノ情態ヲ察シ、直ニ宿所ニ帰り、用意ノ短銃ハ坂本氏、本込銃ハ細川氏、拙者ハ寺町地方ニテ手鎗ヲ求メ、各々約ヲ定メ速ニ上京ト相決ス、○同月十九日、薩州藩士坂本龍馬上下四人ト船宿へ達シ、川船印シ相建テ、伏見へ通船ス、一同無事ニ伏見船宿寺田屋方ニ着ス、○同月二十日、坂本氏及ビ細川・寺内先達テ入京シ、目今ノ事情探索シ、後レテ拙者ハ上京ノ事ニ約シ、三名出立ス、因テ拙者ハ、薩藩士ノ都合ニテ寺田屋ニ潜伏シ、京情ノ報ヲ待ツ、○全月廿三日、坂本氏ノミ京師ヨリ来着ニ付、兼テ約シ置キタル通り手当致シ、夜半迄京師ノ様子、尚

過月廿一日、桂小五郎^(采戸孝允)・西郷トノ談判^(薩・長而薩和解シテ王政復古ヲ企圖スルコト)約決ノ次第、委細坂本氏ヨリ聞取、此上ハ明廿四日出立ニテ、入京ノ上薩邸ニ全道ト談決シタリ、サレバ王道回復ニ至ルベシト、一酌ヲ催ス用意ヲナシ、懇談終リ夜半八ツ時頃ニ至リ、坂本ノ妾ニ階ヨリ走り上リ、店口ヨリ捕縛吏入込ムト告ク、直ニ用意ノ短銃ヲ坂本ニ付シ、拙者ハ手鎗ヲ伏セ覚悟ス、此時一士刀ヲ携へ、兩人ノ休所ニ来リ、不審ノ儀有之尋問スト案内ナク押入ル、兩人誰何シ薩藩士ノ止宿ニ入不礼スナト叱レバ、彼レ偽名也ト云フ、故ニ疑ヒアレバ当所ノ薩邸へ引合フベシ、明白也ト云フニ、彼レ又タ云フ、兩人共武器ヲ携へ居ルハ如何ト、是レ武士ノ常ナリト答ヘシニ、彼レ階下ニ去ル、此機ニ乘シ楼上ノ建具ヲ一目ニ打除ケ、拙者ハ手鎗ヲ携へ、坂本氏ヲ後ニ立テ必死トナル、忽チ階下ヨリ数人押シ上リ、各々得物ヲ携ヘツ、^(松平容保)肥後守ヨリノ上意ニ付慎ミ居レト、声高ク呼ヒ立ツルニ因リ、我レハ薩人ナリ、上意ヲ受クベキ者ニ非ズト云フヲ相凶ニ、兼テ約セル覚悟ノ通り、一同銃・鎗ヲ以テ発打シ突立ツル、彼レニ死傷アリ、階下ニ引退ク、其際一名坂本ノ左脇ニ来リ、刀ヲ以テ拇指ヨリ持銃ヲ切り

付、坂本氏傷ヲ負フ、此時鎗ヲ以テ防キシモ、坂本氏装葉叶ハザルニ由リ、此上ハ拙者必死ニ打込ント云フヲ、坂本氏引止メテ、彼レ等退キシ猶予ノ間ニ裏手ニ下リ、此場ヲ切り抜ケ去ルベシト云フ、其意ニ任せ、直ニ坂本氏ヲ肩ニ掛ケ、裏口ノ物置ヲ切り抜ケ、両家程ノ戸締リヲ切り破リ、挨拶シテ小路ニ遁レ出テ、暫時兩人ト意氣ヲ休メ、夫ヨリ又走ル、途中寺アリ、此囲板ヲ飛ヒ越ントスルニ、近傍多数探索アル様子ニ付、路ヲ転ジテ川端ノ材木貯蔵アルヲ見付ケ、其棚ノ上ニ兩人トモ密ニ忍ビ込ミ、種々死生ヲ語り、最早逃路アラズ、此処ニテ割腹シ、彼レノ手に斃ル、ヲ免カルニ如カズト云フ、坂本氏曰ク、死ハ覚悟ノ事ナレバ、君ハ是ヨリ薩邸ニ走附ケ、若シ途ニシテ敵人ニ逢ハバ、必死夫迄ナリ、僕モ亦此所ニテ死センノミト、時既ニ曉ナレバ、猶予ムツカシト云フ、其言ニ従ヒ、直ニ川端ニテ染血ヲ洗ヒ、草鞋ヲ拾フテ旅人ノ容貌ヲ作シ走り出ツ、其際市中ノ店頭ニ既ニ戸ヲ開クモノアルヲ以テ、尚心急ギニ二丁余リ行ク、幸ヒ商人体ノ物ニ逢ヒ、薩邸ノアル所ヲ問フ、是ヨリ先キ一筋道ニテ三丁余リナリト云フ、即チ到ル、留守居大山彦八出迎へ、昨夜

ノ様子ハ坂本氏ノ妻来リテ注進ス、行衛如何ヤト煩念ノ所、天幸ナルカナ此ニ遁レ来ルトハ、今坂本氏ハ無事ニ連レ歸ルベシ、三吉氏ハ是ニ留リ居ラルベシト云ヒ捨テ、大山氏自ラ船ニ印ヲ建テ、有志両三名ト棹シテ、坂本氏ノ潜処ニ到リ、迎ヘテ還ル、一同闊然快愉ノ声ヲ發ス、尔後門ノ出入ヲ厳守セシメ、急ニ京師西郷大人ノ許ニ報ズ、因テ吉井幸輔〔安撫〕乘馬ニテ走セ付ケ尋問ス、具ニ事情ヲ語ル、又西郷大人ヨリ兵士一小隊・医師一人差添、坂本氏ノ療治手当方、兩人守衛ノ為メ差下ス由ニテ来着ス、実ニ此仕向ケノ厚キ言語ニ尽ス能ハズ、夕刻ニ至リ兩人共ニ衣服ノ仕向ケ有之、然処薩邸へ走り込ミタル段、奉行ヨリ留守居ニ亂問ナナリ、兩人共ニ可相渡ト申来リ候得共、右様ノ者ハ邸内ニハ無之ト申シ切り候、夫ヨリ人数ノ手配ヲナシ、探索更ニ厳ナリ、或ハ京・坂へ人相書ヲ廻シテ、頻リニ薩邸ヲ窺ヘドモ、邸内ニハ一小隊兵士ノ守衛アル故、妄リニ手ヲ着クルコト能ハズ、坂本氏ハ追々快方ニテ、本月廿九日迄伏見薩邸ニ滞在ス、○二月朔日、西郷大人ノ命ニテ兩人共上京可致トノコトニ付、吉井幸輔乘馬ニテ、兵士一小隊ヲ率ヒ迎ヘトシテ来ル、同夜、坂本

一同並ニ妾附添、京師薩邸西郷大人ノ宿処ニ至ル、大人出迎ヒ、直ニ居間ニ座シ事情ヲ語ル、拙者ハ初メテノ面会ナレドモ、其懇情親子ノ如シ、又タ一室ヲ設ケ、坂本兩人並妾トモ三人ノ休処トセラレ、是ヨリ日々時勢ノ動靜、或ハ諸建白、尚ホ西郷大人ノ他人へ尋問等ノ件々迄懇諭ヲ受ク、諸有志二三名宛晝夜休所ニ来リ、慰勞シテ相語ル、此時小松帶刀・島津伊勢(清應)・桂右衛門(久武)三名ハ大夫、西郷吉之助ハ中老ノ取扱ナリ、大久保市藏(通利)・岩下左次右衛門(平)・伊地知正治・村田新八(經通)・中村半次郎(桐野)・西郷新吾(道)・大山彌助(伯爵大)・内田忠之助(政)・伊集院金次郎・中路権右衛門(延生)・野津七左衛門(野雄)・鈴木辰彌・兒玉四郎吉・醫師木原泰雲等ノ人々日々來話、懇情至ラザルナシ、時ニ薩・長和解、弥ヨ王政復古ノ為メ尽力、兵備ノ手当ヲナスニ決シ、西郷・小松・桂ヲ始メト先ツ帰国ノ事ト定メ、二月廿九日夜京師立ニ付、坂本兩人妾トモ同船ニテ、拙者ハ馬關へ、坂本氏ハ鹿兒島へ同行ストノ事ナリ、依テ附添ヒ同夜伏見ニ着ス、数人ノ有志伏見ニ送リ来ル、三月朔日大坂蔵屋敷へ着シ、四日朝川船ニテ下リ、薩藩蒸氣船三邦丸ニ乗ル、五日朝大坂冲出帆、七日夜馬關

へ着ス、直ニ通船ニテ拙者ハ上陸シ、鷄其他赤間關硯等ヲ購シ、西郷ヲ始メ諸氏へ離別ノ寸志トシテ船ニ持參ス、間ナク出船、因之厚謝シテ別ル、又タ坂本へハ他日馬關ニ来ルコトヲ約ス、全月八日勝山御殿へ出頭、京師ノ事情・薩長和睦ノ件々君公江言上シ、且之ヲ重役ノミニ談ス(以下)

三七 西郷隆盛ヨリ蓑田傳兵衛へ書翰

當時隆盛ハ既ニ死地ニ入りテ、天下ヲ革新スル大目的ヲ立テ、其胸中ニ決スルコト鉄石ノ如クナリシヲ以テ、泰然トシテ敢テ動サリキ、即チ十二月六日蓑田ニ贈タル別啓コニ曰ク、

〔以下第三卷番号七二七と同文により削除〕

三八 小松帶刀ニ上京ヲ命ス

小松帶刀

右御用有之罷下居候処、江戸並攝海辺麥動之儀付、早々帰京被仰付候、左候テ立日限之儀ハ、追テ可被仰

付候、

正月

〔久慈〔巻〕
内膳〔町田〕〕

三九 軍備拡張ニ就キ兩番頭上申書

窮士御差分高

七千石之内

一千石

但比志島転住方御宛行所務米〔巻〕（比志島村転住士

扶助料）

三百六石

一千三百二十二石余

但六ヶ月交代ニテ、四石ノ割ヲ以砲術館詰二百

〔巻〕
〔米〕〔收入額ヲ示〕

三十人へ被成下候、
所務米九百拾九石余

一百三拾石余

但同断大砲掛拾人へ被成下候、

所務米三拾九石余

一百五拾六石余

但同断兩遠見番人拾貳人へ被成下候、

所務米四拾七石余

一千五百五十五石余

但同断造士館・演武館百二十一人へ被成下候、

所務米四百七拾五石余

一貳百三拾五石余

但年中一石八斗ノ割ヲ以、拾三歳以下家督ノ者

造士館へ出席四拾人へ被成下候、

所務米七拾壹石余

一八百八拾貳石余

但同断郡方支配見締人百五十人へ被成下候、

所務米貳百六拾九石余

右之通窮士御差分高七千石当分御宛行相成居候、

窮士御差分高七千石ノ内、別紙ノ通当分御宛行相成居

候得共、此節海陸軍所被召立、追々多人数兵士被仰付、

盛大可被成 御趣意ニ付テハ、右御差分高ニモ、窮士

ノ内武役ニ可相立、壮年ノ者ハ可成丈兵士ニ被振向、

御扶持米被成下候儀、時勢相当ノ事ニテ可有御座、当

時御米繰等御難渋ノ折柄、別段御差分高窮士方へ御宛

行相成居候付テハ、窮士トハ乍申、只今日ノ飢ヲ相凌

候迄ニテ、往々御奉公方等不相調候テハ、実ニ遊民同

様ニテ、適難有被成下候御救助ノ詮モ不相立事候付、

当世態第一武役ニ可相立儀、急務ノ事候付、造士館・

演武館へ罷出候百人余ノ窮士モ、都テ御引取ニテ、此

節窮士操練所詰ノ内ヨリ、陸軍兵士多人被召入候付、

其跡代へ順番無構繰入候テ可然、左候テ造士館・演武

館へ御宛行相成居候千石余ノ御扶持米ハ、別紙八百石

余ノ郡方支配見締人ノ方へ被振向置度、尤当分操練所

詰式百三十人ノ儀モ、都テ陸軍兵士へ繰入相成、何篇

兵士同様ニテ、御扶持米ノ儀ハ、別紙三千式石余ヲ御

宛行相成、病死又ハ無拠故障等ニテ、右式百三十人ノ

内代合ノ節ハ、窮士ノ内壯年ノ者、与方ヨリ人柄取調

申出候様有之候テ、左候得ハ窮士壯年ノ者ハ、自然武

役ニ相立候様罷成可申、其外老体又ハ長病人幼少等ニ

テ、屯モ武役難相動、至極ノ窮士ニハ、別紙見締人其

外ノ御宛行有之、七千石御差分高外ニモ、別段三口番・

竹ノ子留・早米留、四ヶ月目一俵ツ、被成下候御救助

米モ御座候付、夫ニテ随分露命被相繫可申、只窮士御救

助迄ニテ、士相当ノ御奉公難相動者多人数罷居候テハ、

当時柄別テ敷ケ敷次第二御座候間、右通同席中申談、

吟味役へモ及吟味此段申出候、以上、

寅正月

大番頭

御小姓与番頭

四〇 中山實善日記抄

正月元日大辛酉

未明ヨリ起上仕舞イタシ、素袍ニ着替、

氏神尊社拝礼、順々方々拝礼、抑元日ハ照國大明神ノ

御染筆、並齊宣公ノ御筆ヲ每歲奉掛拝来候得共、当

所ハ參候時萬矢張平へ召置候ニ付、別ニ常盤間ニ御染

筆奉拜、且二丸 中将公

咲ニケルノ

御筆ヲ奉拜段、夫ヨリ吉書相認候、例年通

福如東海 寿比南山

右御座ノ間御床へ奉備候、

詠元旦

和歌

新玉のとしめくり来て自然

藤原實善

治まる御代そいさしかるへき

右奉書ニ書認御床へ上ル、別ニ一紙ヲ書認候テ、故大人尊靈へ奉ル、

一、今日ハ何レモ祝義ニ吸物並サシミ盃遣、

噺(枚島)

酒匂一郎左衛門

横山源左衛門

上山太郎

上山清兵衛

横山藤兵衛

重噺

横山源大夫

組頭

横山勘兵衛

永田宗之丞

酒匂正之丞

萩原作兵衛

横目

横山五郎左衛門

村山源兵衛

上山平一郎

木佐貫五兵衛

右一人ツ、盃遣相済、扇子一對ツ、右役人へ遣ス、

右忌日

地頭横目

上山源五

横山源次郎

横山強兵衛

右三人同断、扇子モ遣、

四一 小松帶刀ヨリ大久保一蔵へ書翰

初隆盛ノ帰藩スルヤ、坂本ヲ同伴シテ暫時踊郷ノ浴場ニ

(始良郡牧園町)

趣キ、身ヲ養ヒタリケレバ、其婦麗ヲ俟テ一大会議ヲ

起シ、以テ革新ノ要領ヲ議定スルニ決シタリ、当時小松

が大久保ニ贈リタル書ニ曰ク、

尚々諏訪家はもはや出立ニ相成候事と、態と書通も不

致候間、若し滞京中ならハ宜敷御伝言可被下候、

一翰呈候、於爰許

両御丸御揃御機嫌克被為 入、恐悦御義御同慶奉存候、

貴様愈御安康被成御在京、芽出度奉存候、小子も帰国後より湯治江差越居、去ル九日罷帰出仕いたし申候間、御放念可被下候、其後御地如何之御模様御座候哉、万事御配慮筈と奉察候、扱爰元之義も未格別御手も不被召付、ミニケル稽古方ハ被仰出候処、人氣も相向、多人數之稽古人ニ御座候、御歛可被下候、其他之事は西郷杯帰府之上尽評議、此節は十分之御変革有之度、乍不及力之限は出精いたし度心得に御座候、世間之情態も未能相分不申候得共、不相替因循之模様御座候、しかし別段異論も更ニ承り不申候、御安心可被下候、岩下家も不遠帰国ニ相成候半と、折角御待申上候間、御出京ニ相成候ハ、早目御帰国を御進め可被下候、將亦筑前表江御目付小林甚六郎と申人差越され、自己之考を以、五卿方上坂被取計度と之説相起候由、右ニ付黒田嘉右衛門等より段々突掛議論相成候処、余程心配之体御座候段、六日出之急飛九日夕刻ニ着いたし候、迎も断策被行候向ニは更ニ無之候得共、第一御信義ニも關係、有志之望も御失ひ被成候場合ニ付、大山格之助差引ニて、三拾人万年丸より被差出候都合ニ御座候、尤監察被申入候処も、五卿方御情合も難忍候間、一先浪花迄御同道被成度候ハ、御故郷も近

寄、少しは御安心にも可相成杯迄被申居候よし、如何之考に御座候哉、深意更ニ相分不申候、多分是より上坂可相成と存申候間、御聞繕ニいたし度、出立前いち、正治江打合置候、江戸書生之事も此節迄は不相運候付、近々被差出賦御座候間、其段御咄置可被下候、英船入港之事も、一昨日崎陽より申越、既ニアトミラールも參候由、来月初旬ニ可相成と存申候、其他申上度事も御座候得共、帰府後昼夜之來客寸暇も無之、筆取隙さへ得不申誠ニ閉口御座候、御推察可被下候、右故此節は何も行届不申候義、御海涵可被下候、先は此旨早々得貴意候、不備、

四月十三日

小松帯刀

大久保一蔵様

再白、時下随分御保愛為國家奉祈候、乍末筆御宿元より着ヲ御祝被成御着とも御賜深奉謝候、扱鎌田も先日御広敷番頭横目勤被仰付、別て難有仕合深御礼申上候、内田・いち、江別段書通も此節迄は出来不申候間、宜敷御伝言可被下候、海江田も同断御願申上候、着涯より隠遁いたし、誠ニ妙ニ御座候処、此四五日出山涯閉口御察可被下候、何も細事は後便と申残候、早々不備、

四二 岩下ガ大坂ニアリテ在京ノ大久保ニ贈り

タル書翰

廿六日、畠山云々之御書面則拜見仕候、今日迄ハ何たる事も承不申候、此后參候ハ、御書面之趣を以応答可仕候、将亦板倉侯云々之御返書昨夕相達、条々承知仕候、職掌ニも致相当、右御達之趣も齟齬不仕義と云々之書面ハ差出候ても、成程左様ニハ可有之候得共、何分重大之事件故、

御名を以申出候様、逃ルニ相違有間敷と吟味仕候、左候へハ無詮事之様ニ御座候間、却て小細工致よりハ一所ニ〔残りの方言〕ゴイと掛候方、宜敷は有之間敷哉と申談取止申候、夫共猶御存寄も候ハ、可被仰聞候、いか様ともねちりかけ可申候、別紙届書も往返迄之間出兵難仕等之文面ニては、其上ハ出兵も致候様ニ相見得、是迄之書面無ニ可相成候付、是非共出兵不致事、第一是迄之書面詮ニ立置候様致度、別紙通取直し差出申候間左様思召可被下候、先便ニも其趣可申上之処書洩申候、御国許江申上候上、可差出趣ニハ申置候得共、嶋津伊勢病氣ニて帰国致候間、委細

差含罷下候付、其内何とか申參も難旨をも申出置候間、海江田ニても上京候上、亦ハ無左共様子次第第二は、御国元より被仰付越候趣を以、

御名ニて差出候、手段ハいか様も可有之と存罷在申候、不急事ニ付、罷登候上心事可申上候、〔老中、板倉勝麿〕板閣之内心を案するニ、岩國より日延之願等差出候間、弥やり付との見留ニて、夫迄之間出兵之有無延置候得ハ、宜敷と之事ニハ有之間敷哉と存申候、無左てハ

御名ニて差出候上ハどんな綿てもすべくる事ハ難出来、いやても差図せねハならぬ道理、事柄も重く相成候テ、却て望候儀不審ニ御座候、且私より出兵難致訳ハ、天幕之御為を重く奉存候誠意より申上事候間、此上御料め蒙るとも、道理を曲候事ハ難出来、無是非次第と申候、左程之事ならハ、

御名ニて申上候様との事ニても、下心ニハ左様申候ハ、御料めニても蒙るを、恐るゝ様の匂らせを申候口氣ニ見得申候、内田氏よりも一日位畠山之儀滞坂云々之儀承知仕候、今日川登之趣申上置候処、殊之外なる出水中ニ、通船出来申丈ニ無御座候間、一兩日見合可申と存居候付、仕合之至ニ御座候、其上通船難叶候ハ、陸地可罷帰候

得共、別段御用無御座候ハ、成丈川登致度存申候、先ハ御報旁如此御座候、已上、

五月廿八日

岩下佐次右衛門

大久保一蔵様

貴下

諸君江別段認得不申候間、宜敷御伝可被下候、木場氏
情人昨晚罷帰申候、

〔甲東蒸紙、大久保利通関係文書にて補正〕

四三 出兵ヲ辞スル建白

薩藩ニ於テモ、曩ニ征長ノ不可ヲ陳シテ、断然出兵ヲ辞退シタリシニ、爰ニ至リ幕閣ハ再ヒ内命ヲ伝ヘタルヲ以テ、四月十四日、大久保ハ更ニ左ノ建白書ヲ認メ、断乎トシテ出兵ヲ辞シタリ〔以下番号一二二と同文により削除〕

四四 東久世通禧日記鈔

〔發意〕
小林ノ入宰ノ当初トハ、殆ソド天壤ノ相違ヲ見ルニ至レリ、東久世通禧ノ日記ニ曰ク、

〔慶応二年八月〕
○十七日 晴、徒目付面会之事不能、其儀之旨返答之趣

申聞〔古閑へ申聞カ又ハ当藩周旋方へ申聞カ尙可尋也〕訖之由
大一郎申出、右今度甚六郎面会之儀ハ、近々帰帆暇乞且
梨堂殿由縁モ有之、旁以乞面会之旨其情態難黙止ニ付、
及面会者也、於徒目付ハ面会不致旨令答者也、大山格之
助・古閑富次等一同面会、從馬關昨日帰着ニ付テナリ、
於彼地高杉督作・前原某〔佐世八十郎ノ事歟〕等及応接之
処、今度無是非及戰爭、尤土地ヲ奪候杯ノ所存ニ無之、
又五人之処、今度之勢ニ乘シ相迎候杯ハ不寄存、各藩へ
依頼ノ間、帰洛之辺モ宜ク周旋頼度、且亦肥後和親之事
等惣テ都合宜シカリシ趣語之〔必接書明後日為見候ニ付別
ニ写アリ〕、午後幕吏甚六郎来入、一同着格衣面会〔東久世
殿無面会〕之処、強テ無別条、但其肝要註左一同モ有之
候ナガラ、三條殿ニハ懇切ニ相成候者ニ〔目下部伊三次薩
人ノ由也〕親敷致シ、其者ニ成替リ帰洛之辺周旋申度
由也、先洛外迄帰洛シ、京師幽囚人々ノ働キモ可付欵ニ
見込居候趣意ニ相聞候者也、近衛并鷹司前殿下之処、当
殿下被相嫌候処、三條殿之処ニハ左様ニハ無之由申居ル、
三條殿被答、脱走之事、一身之上ヲ存テノ事ニ無之、朝
廷之御為ヲ存候ヨリ起り候義、何等之寸功モ無之、帰洛

且復位復職等之儀ハ、奉対天朝無申訳モ天下ニ失面目候義、只々京師幽囚人々御免御登用ニ相成候様、周旋コソアリ度旨被申述者也〔巨細ハ兼テ被認試置候趣意書之趣ナリ仍テ茲ニ委註セス〕

〔野史合雜新史料叢書にて補正〕

四五 小松帶刀ヨリ大久保一藏へ書翰

九州ノ形勢ハ益々變スルノ傾向アリシカバ、薩藩ハ更ニ又吉井友實ヲシテ宰府ニ至リ尽力セシメタリ、小松ノ書ニ曰ク、

万年丸・三邦丸兩度之御封書相達、忝致拝見候、先々時分柄無御痛御勤務、芽出度奉賀候、二ニ野夫も碌々相勸居申候間、御放慮可被下候、然は長州御所置云々之事共ニテ、度々御下坂不容易御尽力之次第委曲承知、実ニ大事之御場合不一方御尽力、為天下大悦感佩仕候、其末如何成行候事歟と掛て苦心仕候、乍此上宜敷御周旋偏ニ御頼申上候、海江田も廿一日ニ着、被仰含越候趣も詳細承知仕候、御尤之御吟味未出筑之処も延引相成候処ニテ、別て仕合之都合、其辺之処も機會可有之と之賦ニ御座候、只今九州辺之形勢も相替候付、爰ニては手ヲ下候処大事

之場合と相考申候、不日誰か被差出賦ニ御座候、吉井原之奈良間欵未不相決候、

一爰元之義、万事御変革御手被召付、諸向一統御取縮被仰付、当分取調最中ニ御座候、左候て此節は海・陸軍方十分御手被召付賦ニ御座候、諸向之処も此節ははまりも相付、別て國家之大幸今通ならハ、成功も不日相分可申と相考申候、

海軍所之義、都之城居屋敷御用相成被召立候、兵士も近日より被仰付賦ニ御座候、陸軍砲術館は寺社奉行所御記録場所軒局被仰付、砲術館被召立賦ニテ、当分御手相付居申候、寺社方は本山奉行所跡、御文書奉行は造士館内御家老其外詰席江軒座被仰付、町奉行は御曳取ニテ御座候、其他之件は未取調中ニ御座候、追々御手相付候上可申上候、

一梅芳院一条は、先便西郷より申上候半、宜敷御尽力御頼申上候、

一安田徹藏事此節建白有之、琉宝・半朱紙札今通被召置候ては、御国害ニ相成而已ならず、御鑄造ニ付ても御損失ニ相成段細々申上、吟味相成候処至極尤之事ニテ、此節右御用被仰付、川上助八郎同伴上坂被仰付候間、

上坂之上は、万事当人申出之趣都合克相運候様、木場江御申合之処御頼申上候、此節ハ御蔵方御難渋ニ付、安田自分働を以紙札代三万兩献金之賦ニて、十分精心を尽候都合ニ御座候間、気合ヲ不失御召遣相成候事第一と相考申候、兼て御承知之人物ニも御座候間、旁御差含可然御下知之処、野夫よりも御頼申上候、左候て同人も御勘定小頭別段之思召ヲ以、八人賄料被仰付、他所ニては御勝手方御用人次席名目迄、御免相成申候間、旁宜敷御含可被下候、細事は助八郎より御聞取可被下候、

右外段々申上度件御座候得共、小拙も両三日跡より腰脚痛甚敷、出仕も出来不申、誠ニ困苦仕居申候、夫故執筆不任心、不本意之次第御海涵可被下候、併左迄之事ニは無御座候間、不日快氣可致と相考申候間、御念遣被下間敷候、岩下家も御滞在之段、無余義御場合と奉存候、此節は別段書面も差上不申候間、宜敷御伝言可被下候、町田家へも宜敷御頼申上候、爰元ニても西郷・吉井皆々十分之尽力、実ニ国家之大幸ニ御座候、御悦可被下候、此内ハ

御両殿様御揃、御家老・御側役緩々被召出、 国是一定

之御沙汰ニも承知、誠ニ以テ難有仕合何共奉恐入候、御悦可被下候、乍跡先此段も申上候、廻船も今やと相待申候得共未相分不申、もふハ不日廻船ニ可相成と相考申候、其他後便と申上残候、床臥中乱筆不続之文等御免可被下候、不備、

五月廿四日

小松帯刀

大久保一蔵様

追て、時下随分御保愛被成度、呉々奉祈候、内田・いち、江も宜敷御伝言御頼申上候、今日開聞丸江戸航ニ付、安田便船被差越候間、宍封呈候、

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

四六 大山格之助兵ヲ率ヒテ太宰府ニ向フ

然レドモ薩藩ニアリテハ猶憂慮スル所アリテ、更ニ大山綱良ニ命ジ、又三十余人ヲ率イテ宰府ニ来ラシメタリ、即チ小松ガ四月十三日大久保ニ与ヘタル書ニ曰ク、

〔番号四一と同文により削除〕

四七 〔長州処分ニ付幕府ヨリ奏聞〕

亦長州ノ処置如何ニ係レルヲ以テ、幕吏及ヒ慶喜・會・桑等ハ更ニ勅許ヲ得テ、其処分ヲ為サント欲シ、左ノ如ク朝廷ニ建言セリ〔戊辰始末・坤儀革正録・維新史料慶応記事・幕府衰亡論等諸書参照〕

正月廿二日幕府より決議言上之書

毛利大膳父子家政不行届、家来共一昨年七月、父子黒印之軍令状所持京都江乱入、奉対

禁闕及炮發候段、不恐

天朝所業、不届至極ニ付、大膳父子可処敵科処、益田右衛門介・福原越後〔元備〕・國司信濃等〔親相〕於出先条々之主意取失、

非礼非義及暴動候付、三人斬首之上備実檢并參謀之者共夫々加誅戮、任用失人候段深恐入、悔悟伏罪相慎罷在候趣、自判之書を以申立、於其後疑敷件々相聞候付、永井主水正・戸川鉾三郎・松野孫八郎差遣相礼候処、弥恭順謹慎罷在候趣ニ付、於大膳父子

朝敵之罪名ハ相除候、乍去畢竟不明統御之道を失、家来之者犯

朝敵之名候段、其科不輕、雖然祖先以來之忠勤を思ひ、格別寛大之主意を以、高之内拾壹万石取上、大膳ハ蟄居隱居、長門ハ永蟄居、家督之義ハ可然者相撰可申付候、右衛門介・越後・信濃家名之義ハ、永世可為断絶候、此

段遂奏聞候、以上、

正月

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

四八 〔処分ニ対スル長州答弁〕

爰ニ於テ、幕府ハ又弁解ノ個条ト毛利父子ノ自判ノ罪状ト齟齬スル所アリトナシ、更ニ書ヲ以テ答弁セシメタリシガ、長州ハマタ左ノ如ク答ヘタリ、

右ノ条々御答申上候次第ニテ、別段齟齬仕候儀無之哉ニ奉存候、依テ此上ハ寛大之御処置ヲ以テ、大膳父子官位御称号元之通り成下サレテ、都ノ屋敷モ元ノ如ク下サレ候ハ、參觀交代モ仕リ、幕府へ御奉公仕り度奉存候、勿論尺寸ノ地モ御切削御取揚等ノ儀ハ、更ニ存シモ寄ラズ候事、

四九 勝安房薩藩ノ出兵辞退書ヲ却下スヘカラ

サルヲ説ク

慶應二年寅六月、余突然幕命ヲ奉シテ上京ス、蓋シ大久保・岩下・内田ノ三氏当時薩藩ノ要路ニ当リ、再征

長不可然ノ議ヲ建テ、幕府ニ向テ痛ク強諫スル所アリ、
閣老ヲ始メ応答甚窘ム、則チ余ニ命シテ之カ所置ヲ為
サシム、余三氏ニ接シ、其強ユル所ノ征長背天理ノ上
書ヲ抑ヘテ、余ノ手中ニ止ムルコト、ナシ、爰ニ円滑
ノ局ヲ結フ、余カ公ニ面会スルハ、此時ヲ以テ始メト
ナス、

五〇 柴山良助軍事費ニ関スル書類

一千二百兩

右騎馬隊練習方費用トシテ御差廻相成候得共、練習
方先御見合相成候ニ付、千兩丈ミニヘル銃御国元ヨ
リ御注文ノ三千兩ノ株被相混候テ御買入ノ事、

一千兩

但残二百兩ハ鉄砲被相廻候節、中途大弘方御金、

右八角砲御買入、

一千四百兩

右鎧御壳払相成候テ、鉄砲御買入ニ被仰向候金筋ノ
故、ホーイッスル製ミニヘル買入、

惣合六千三百兩

五一 〔朽木之詩〕

奉寄卑懷

柴山君

別離三月若三年

天外動登海門嶺

勤王籌策与誰計

征雁呼醒魔府夢

右状乞

刪正

常憶故人白昼眠

洋中或泛坊津船

討賊詔書何日伝

雲山千里思悠然

朽木

再拜

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編
慶應二年二月

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料」
(紙数三九枚)の記載あり〕

目録

- 田中健之助ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰
- 西郷吉之助ヨリ蓑田傳兵衛へ書翰
- 桂右衛門ヨリ蓑田傳兵衛へ書翰
- 〔桂久武ヨリ伊地知貞馨へ書翰〕
- 柴山氏書類
- 小田井蔵太ヨリ黒田・折田・三島へ書翰
- 小松帯刀ヨリ西郷吉之助へ書翰

土岐新兵衛報告

西郷吉之助ヨリ蓑田傳兵衛へ書翰

伊地知壯之丞ヨリ大久保一蔵へ書翰

〔柴山良助ヨリ野村宗七へ書翰〕

平田大江ヨリ西郷吉之助へ書翰

水野溪雲齋ヨリ西郷吉之助へ書翰

長岡監物ヨリ伊地知壯之丞へ書翰

松岡七助ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

〔宛名差出名不明書翰〕

米国留学生

薩州侯建白

五二 田中健之助ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

黒田嘉右衛門様 田中健之助

御直披

風雨、最早二日市ニテ、人足モ大概御揃ヒノ御様子ニ
 相見候へハ、一足御先へ罷出、夫ヨリ当番所ニオヒ
 テ久敷御待申上、午睡抔仕、殆ト八ツ半頃ニモ至候へ
 共、更ニ御通行相成不申、甚如何之儀ニテ、御隙取相

成候哉ト御氣遣ヒ申上候、万々一幸府ヨリ御用ニテモ有之、御呼返シニテモ御座候哉、左様ナラスハ、頓ニ御越相成可申ト奉存候事ニ御座候、私モ此処ニオヒテ御訣別申上、是迄之御礼可申上ト存、御待申上候ヘ共、余リ晚景相成候故、実ニ不本意千万ナカラ、山家旅宿迄罷越候、万々失敬之罪御容恕奉願上候、兎角御再会之刻縷々可申上、折角遠路御厭被成度奉存上候、先右計如此御座候、再拜、

二月二日

田中健之助拜

〔清麿〕
黒田嘉右衛門様

侍史

五三 西郷吉之助ヨリ蓑田傳兵衛ヘ書翰

(京都事情)

御両殿様益御機嫌能被遊御座、恐悦之御義奉存候、陳ハ御当地之形勢、詳悉大久保ヨリ御聞取被成下候半、其後相知れ候丈ケハ申上候、別紙之通内府公〔近衛忠房〕ヨリ御下ケ相成候付、写取差上申候、当分之

朝廷ハ、一・會・桑之占付居候事故、只申上候通被相

行候次第、此未戦争共相成候ハ、如何成行可申哉、遺憾此事ニ御座候、是非明白ハ全不被糺、勢ひ強きものより奉迫さへすれハ、無致方遣

御沙汰相成候義、何共無申尽事ニ御座候、此度ハ幕府ニおひてハ、万々戦を始候様子相見得不申、此度之所置を申付候て、承服不致義ハ相知れ居候半、定て何と致上手ニ策を廻らし候事も有之候半致と申訳ニ御座候、〔Marsat de Caden 仏国公使書記官〕○仏人ノカシヨント申者、甚奸物にて、幕吏之奸人江

混と結居候て、此御方様之事共、悪しく申触候者之由ニ御座候処、右之幕吏、先月十八日〔本「安永寺」館〕ニ栗本某外国奉行、其外右之下役一同打込られ候由、是ハ畢竟小笠原を攻付候処より、右之次第ニ立到候半致と被察申候、大久保越州〔金澤〕坏ハ、頻ニ薩藩之嫌疑と申事ハ打破候様子ニ御座候、幕府も退て道ヲ不立候てハ、累卵之危ニ臨居候間、段々人材を望候向ニ被相聞申候、人物被笨道立候ハ、必嫌疑と申事ハ決て無之訳ニ御座候、当分ハ道を曲付様といたし、骨を折候義にて、却て疑迷を生シ、夫より嫌疑と申事ニ相成申候、其辺ハ得と御熟考可被下候、頓首、

西郷吉之助

二月六日

〔長施〕
蓑田傳兵衛様

〔別紙〕

湯淺貫一郎
佐久間三蔵

御老中

小笠原壹岐守

大御目附

永井主水正

室賀伊豫守

井上備後守

木下大内記

御目付

牧野若狭守

小林甚六郎

御使番

酒井数馬

石川八十郎

曾我權右衛門

奥御右筆組頭

片山與八郎

御右筆

右正月廿六日、於大坂廣嶋江被差遣候旨被

仰付候由、發途之義ハ、二月四日と申事ニテ候得共、い

また何共不申来候、

〔天久保利謙氏所藏本にて校訂〕

五四 桂右衛門ヨリ蓑田傳兵衛へ書翰

〔朝幕及ヒ英仏人ノ情况〕

猶々、喜入家江其外い細不申越候間、御序を以可然

御演舌之義御頼申上候、御同席中江も此度ハ何も不

申遣候付、是又宜敷御伝声御頼申上候、当遠行両氏

より相達候書状三通相添申候、

依幸便一札致啓上候、不順之氣候御座候処、先以

御両殿様其外様益御機嫌好被遊御座、奉恐悦候、貴所

様弥以御安寧御健務、奉珍重候、小生ニも無異条、碌

々消光罷在候間、乍憚御放念可被下候、当方先万事至

極之無事ニ御座候得共、長防御所置之一条、決議言上

ニ及び、既ニ小笠原閣老藝州江罷下り、裁許申渡相成

候様子ニ御座候、右言上之次第等ハ西郷方より巨細申

上賦ニ談置候間、左様御心得可被下候、長防人心如何

候半、別て難渋之訳と相考へ申候、とても幕府戦争之はまりとハ更ニ不相見得、幕府ニて極寛大之御所置と

見込候様子欵、畢竟尾老侯御建議之跡をふまへ候筋かと申事ニ御座候、よもや只今ニてハ、千万承諾之処無

覚束、若哉其通不參候てハ、実ニ大變ニ御座候、一度戦ひを初候てハ、此末いかんとすること不能ニ立至り

可申、慨歎至極ニ御座候、扱御国嫌疑之一条は、幕中大ニ沸騰いたし居候由、乍然此度大久保越州登坂以來、

委く説得相成、今ハ何之訳も無之由、右ハ越前之中根雪江より小松氏直咄御承、右之形行ハ御申上越候て可

有之候間、致省略候、將亦此度我々共長崎滞留之節、英夷両名江致面会候砌、京都建白一条之儀、岩下氏・

伊地知申談、再度断判ニ及び、最早致水解、乍然此末尚又

拝謁いたし、兼て御見居之御趣意致承知候得は、当分之ミニストルも、日本江ハ、昨今之事故、情実も能く

不致貫徹候故、頻ニ拝謁仕度所存山々之由、全く彼より押て踏付罷越候趣意ニハ更ニ無之、弥御親睦を相結

度との好意中より出候賦ニ相見得居候間、当節柄嫌疑

も有之、不容易事ニて、

御許容之程ハ無覚束候得共、御先代様太平之時さへ、磯江被為召候儀も有之候付、

往々密盟之訳も有之候間、可相成ハ鳥渡〔采邑〕〔岩形公安政五年旨〕 拜謁被仰付候儀も難計候間、何分形行を以野村罷帰言

上仕候ハ、思召も可被為、在哉と申談置候次第ニ御座候処、先御見合之段先度致承知、御尤之御儀と奉存

候、然処伊地知方江建白一条断判致替候様、就てハ初之断判も無難程能く相済、最早我々共ニハ不案之廉も

有之間敷見居引別れ、幸岩下氏ニハ江戸表出府ニ付てハ、横濱ミニストル江も直談相成候得は、尚更安心ニ

も可相成申談置、岩下氏江相託し、長崎表断判之趣意ニて建込相及候処、余程ミニストルニも受込宜敷哉ニ、

未い細之儀ハ不被申越候得共、此度木藤市助便より大略承候、尤佛之ミニストル代カシヨンと申者江も面会

相成、是以同断、右之次第ハ自木藤罷帰候上、乍大略御聞取被下度、是迄外々よりも英同様疑ひも為有之由

候得共、当分ニてハ各国共、却て薩之処ハ一統信し候との咄ニ御座候由、最早右一条ニ付てハ、何も後難ハ

有之間敷、此度長崎江伊地知方迄被仰付越趣有之、案

外ニ存候ニ付、何分不容易事故、致相談度申越候間、先只今通ニテ、少しも掛念之廉無之、勿論初より之断判ニテ致得意候上ニ、今更ニ相成改て申込候てハ、却て疑惑を生し可申ハ案中ニテ、横濱ミニストル江も同断之返答ニ相成居候上ニテ、かた／＼如何と申談候間、御厚慮を以被仰出候上、御趣意背戻仕候場ニ相当、如何敷奉存候得共、同席中申談、此段奉願度御座候間、能々御汲取、吟味之形行宜敷御披露被下度御頼申上候、就てハ右一条モ有之候付、我々共引取之儀も致承知居候間、指急き申賦ニハ御座候得共、大久保より御聞取被下候半と奉存候、佛之カシヨンと申者ハ奸物ニテ、夷人中間さへ不宜、専幕奸吏江結込、權威をふるひ候者ニテ御座候由、然処近比幕之奸吏國元但馬守と申者初退職ニ相成候折から、当分カシヨンも便り少く相成居、薩より致面会候処大ニ嬉しがり、何事も致世話候賦ニ御座候由、右幕吏國元始之者共退職相成候始末之儀ハ、大久保より御聞取相成候半、柴田東五郎を以、小笠原閣老候江建白、新聞一条頻ニ難し候処より、國元等も、右之時宜ニ相成候半欵と申事ニ御座候、將又〔采〕〔奉行書生ヲ云フ〕此節遠行人數より之書音長崎より相達、実以 皇國之

至難、中々不容易時機ニ相及候半と、苦心之至ニ御座候、得と御熟覽被下度、尤

御而殿様江も御上ケ被下度儀と奉存候、書面通色地ハ不相分候得共、大策うまく被行候得は、此上なき御國家之大幸ニ御座候得共、如何候哉と実ニ待遠く御座候、遠行人數一条之儀、幕江申立之趣意尤ニハ候得共、此内より御治定之通、断然先只今形ニ被召置、可然儀と申談候間、是以左様御汲取可被下候、外夷之情態、横濱辺説之通大体相變儀も無之様ニ相見得、右辺之処木藤心得候分ハ、御聞取可被下候、先ハ乍毎廬相之至ニ御座候得共、宜敷御賢覽被下度所仰候、恐々頓首、

二月六日

桂〔久武〕
右衛門

兼田傳兵衛様

人々御中

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

五五 〔桂久武ヨリ伊地知貞馨へ書翰〕

尚々、時下柄折角御愛護御厭專要奉祈候、御帰郷相成候ハ、喜入家江細御咄被下度、書状ハ遣候賦御座候得共、不能細事候間、可然御鳳声可被下候、

末筆御座候得共、(Chūmei no Bō Chōshi)ガラハ方江ハ貴公ヨリ、尚又御内
 話相成トノ趣御座候付、決テ御内通相交儀ハ有之間
 敷、鳥渡形行被仰上候ハ、申替ニ不相成候テ相済
 可申哉ト相考候付、可然儀御計ヒ之処御報申上候、
 再尾、

任幸便致啓上候、揃兼候気候御座候得共、御国元
 御内殿様久光 忠義益御機嫌能御同慶奉存候、貴所様弥御安
 寧御精務奉珍重候、於当方小生無異条碌々消光罷在候
 間、聊御放念可被下候、然ハ建白新聞断判一条之儀ハ、
(頭註本「建白新聞一条々々」)
 先便粗申上越候得共、何分ニモ案内之次第、当方ニテ
 モ打寄及吟味候処、御教諭之通、初ヨリ建白ニ基キ、
 筋ヲ立致断判、彼等ニモ能々致承諾、最早我々ニモ致
 安心、乍此上為念、尚又横濱ニテモ同様之筋ヲ以断判
 ニ相成、ミニストルニモ能々致納得候由、今更趣意立
 替申込候テハ、却テ疑惑ヲ生シ可申ハ案内ニテ、殊更
 我々共ニモ差揃ヒ、御互ニ談置候上申替候テハ、彼等
 江対シドフモ面皮モ無之程ニ御座候、最早御互ニ跡ニ
 掛念之廉モ無之故、引別レ候時宜ニモ御座候、岩下氏
方ニモ横濱ニテ、佛之コンシユル代カシヨント申者江
 同断面会、断判モ骨ヲ折テ被致候由、就テハ爰許ニテ

モ一統致吟味候処、只今形ニ被召置可然儀ト申談、御
 国元江ハ藁田氏江向、此方ヨリモ吟味之次第モ申上越
 候間、左様御心得被下候テ、尚又宜敷様御尽力之処御
 願申上候、

拜謁之条ハ全ク強情ニ被踏付、乗入トノ訳ニハ夢更無
 之、至極懇切ニ相願候賦ニテ、右様 拜謁被仰付、兼
 テ御見居候処モ致承知候ハ、此末永ク御親睦申上度
 トノ趣意ニ相違無之、イカ様御国許御評議之処ハ、セ
 マリタル様ニ御引受共ニテハ有之間敷哉、若十分之断
 判不相調候節ハ、以前之復轍ト申様成時機モ難計候付、
 此度之処ハ曲テ、早ク此難ヲ凌キ候方、可然ト欵申様
 之御吟味共ニテハ無之哉、実ニ驚歎イタシ候、爰許之
 情実モ能ク御聞取被下候得ハ、右等之処モ御安心可相
 成、大久保丈罷下リ申上賦ニ御座候、多分御安心被成
 下候半ト奉存候、此節柴田東五郎ヲ以、小笠原閣老候
 江建白新聞之一条難シ掛、何様之訳ヲ以、外夷江御申
 込相成候哉、甚不服之次第、条理ヲ立逼リ候処、全ク
 御存無之候間、早速取調方可致候間、左様相心得トノ
 事候得共、右様当座之間ニ合候御返答ニテハ難相済、
 屹ト御札被下度申込ニ相成居候、若其俣ニ被差置候ハ

、夷人江ハ此方ヨリ存分断判モ可仕、就テハ幕府之御失体委クケ条ヲ立可申入儀ト相答候処、至極迷惑被致、決テ藩江難題相掛様之場ニハ至ラセス、彼之方ヨリ取計モ可有之ナドノ返答モ有之タル由、然処前文之私人カシヨント組合、奸計ヲ施候幕之奸吏外国掛トカ國元但馬守ト申者ヲ初、数人相打落退職相成候由、カシヨンニモ頓ト便ヲ失シ、致方ナキ折カラ、薩ヨリ面会イタシ候処大ニ喜ヒ、何篇世話可致トノ賦ニ御座候由、外夷各国共甚疑居候得共、当分薩之処一統信シ候様ニ相成タルナト申出候由、扱御国之嫌疑ハ御案内之通、申迄モ無之事候得共、此度大久保越州登坂之折ハ、大ニ沸騰イタシ居候得共、委ク説得被致、今ハ何モ訳ナク被成候旨、越前之中根雪江江被咄候由、右ヨリ小松家被承候、先少々ハ難モ凌付候心持ニ御座候、江戸辺ニテモ悪説モ先相止候哉ニ御座候、我々共ニモ夷人一条之儀ニ付、早目ニ引取候様致承知候得共、長防御所置振之事モ、少々ニテモ色地相分、聞届罷帰ル賦ニテ、只今迄無故モ永滞留大屈イタシ候、夫故是迄之事実モ申上候為、大久保丈婦郷ニ相成候付、崎陽江モ立寄之賦ニ談置候間、得ト御面談モ為有之筈ニ御座候、

長防御所置之儀ハ大膳隠居蟄居・長門永蟄居、家督ハ末家之内ヨリ被調可申付、父子之儀ハ伏罪以來謹慎相違ナク罷在候間、朝敵之罪名丈ハ被相除、右通被仰付十壹万石御取上ニ決議及 奏聞、被 聞召置候由ニテ、閑老小笠原侯藝州江罷下リ、御裁許申渡トノ事ニ御座候、尤去ル四日蒸艦ヨリ出発、右通ニテ承伏イタシ候得ハ、何之如オモ無之候得共、中々以当分長防之勢ヒニテハ、決心之人氣ト相聞候間、如何成立可申哉、監察永井主水正ニハ、飽迄情実モ被汲取候上ノ事ニテ、小笠原侯ト同船ニテ平常ノ姿ニ被差越候由、若哉承伏不致節ハ、御征伐可被遊ナト書付、触流シナトニモ相成候得共、少シモ戦ヒ之氣サシ見受不申、一度戦ヒ出シ候ハ、モフハ致様モ無之モノト相考申候、乍大略形勢御賢計可被下候、此度遠行至願ノ内、黒田了助ヨリ佛江御賦付之由候得共、願クハ米江御遣シ之処奉願トノ事候間、夫ハ兎モ角モト返答ハ致置候得共、初佛江賦付相成候訳ハ、事実カタク探索モ人柄ニテ、籠居候哉ニ御座候間、其許ニテ尚又御吟味被下度、吉原彌二郎ニモ同断之願、是同断之事ニ御座候、木藤市助ニハ不図モ横濱在留之教師頭取米人ブラウント申者江鳥渡取会、イ

ロく相咄掛候処、軍艦ヨリ米之方江世話イタシ可具

談合ニ及ヒ、師弟之盟約迄モイタシ候由ニ御座候、尤

ブラウンノ信友ニハンモンドト申者之方江申遣候間、

Marionoff

右江相付入塾致修行候ハ、十分可相調申聞候由、甚

々魚忽之至御座候得共、相約置候付、何卒右之方江御

遣シ被下度願出候間、当方ニテ申談候処、余程幸之事

候間、右通仰付可然存候、爰許ニテハ難取究、尤貴所

御周旋ニテ道モ相付候間、貴公江御頼申越候間、御同

意候ハ、宜敷御取計被下度、右様深切ニ引受候ハ、

尚更都合モ宜敷候半ト存候、木藤之処ハ拙者ヨリモ御

頼申上候間、幾重ニモ宜敷御取成被下度御頼申上候、

左候得ハ、木藤ヲ除キ両人之場ニ相成候間、右之跡指

ト申所ニテ吉原参度、吉原跡佛之方江野村市助御遣シ

被下度、順々願出候、是以前文同様、此方ニテハ不相

濟、貴様迄申越置候間、当人共ヨリモ申出候様申付置

候付、得ト御聞届、可然御勘考之程御頼申上候、最早

御帰郷之賦トハ存候得共、御在崎之賦ニテ相認候間、

左様御納得可被下候、先ハ乍序時季御尋カタく可申

上、如此御座候、恐々頓首、

二月六日

桂 右衛門

伊地知壯之丞様

人々御中

五六 柴山氏書類

尚々、京都等ヨリ先生方下与変革モ有之候ハ、我

々式不致関係事ナカラ面白、下々ニテモ見居可申奉

存候、無左候ハ、亦京都カ其許カ旅動ヲ願付、逃

出可申奉存候、紙包ニツ飛脚山元勇太郎へ頼差上候

間、御受取可被下候、以上、

一筆啓上致候、御離別後モ益御堅勝可被成御勤務、珍

重御儀奉存候、御宿元皆様御元氣ノ由御座候間、乍憚

御懸念被成間敷奉存候、小子モ先月五日京着候処、帯

刀殿〔靈書ニ小松〕・西郷氏等御国許下ノ筈ニ付、帯刀殿へ相付下ノ

筋ニ候処、俄ニ大久保氏急速下ニ付、小子ニモ前日下

筋相成、先月廿二日京出立、去ル朔日鹿兒島前ノ濱へ

着船、無事相勤申候間、乍他事御安心可被下候、其御

地詰ノ折ハ、御丁寧御厄害ニ相成候、小子ニモ始終自

由ニテ御世話ニ罷成難有次第、其上出立ノ節モ遠方マ

テ御見送被下、彼是不浅次第奉存候、御礼申上候中略、

〔頭書〕「主體」
米良ニモ京都へ列下、私所へ未滞宿ニ候、父造酒并米

良小源次儀、本田彌右衛門・中村新兵衛求磨へ罷越、

掛合相成候処、寛大之所置此虫喰送ス御方様へ対シ可

致トノ事ニテ、先月末養田新平召列越列渡候処、揚屋

入一旦イタシ、其上段々ト可致赦免、嚴科ノモノ故可

致死罪ノ処、薩無拋依御願、死一等ヲ免シ如何トカ申

渡相成候由、新平申出候処ニテハ、造酒等ノ儀兼テ人

柄ヨロシク、下々ニモ服シ候由、下々ニテモ涙ヲ流シ

種々歎キ候モ多キヨシ、揚屋ニテ毒殺ニテモイタシ候

様ノ手モ有テハト、世話ヤキ申候由、造酒ヨリ悴儀ハ、

家来ニテモ何ニテモイタシ、今暫

御国許へ忍置呉候様、新平并彌右衛門私ニモ頼候旨、

新平へ頻ニ相願候由、少々差支候説モ有之候得共、不

便ノ事候間、今暫ハ引請召置可申候、只今差返シ親同

様ノ浮目〔憂心〕ニ為逢候テハ、此方ノ情モ相立不申候、求磨

騒動一条モ、弥以テ西洋者流ノ本起カラ如此次第相成、

廢立等ノ説ハ讒訴ノ趣ニ相聞へ申候、小源次・造酒モ

養田引渡ト、早速手鎖迄モイタシ候由、後ニハ赦免可

相成候へトモ、不便ノ事ニ候、本田様今少々談判申候

仕様モ有之、取計様ハ有之間敷カ、返リ方モ余リ早ク

御座候、シカレトモ脇々ヨリモ申立、早ク返シ候方可
然トノ吟味モ、決テ起リ候ハンカト被相察候、

御国許モ今少シ共ハ開ケ候ヤト存下候処、中々ヒトク、

何事モ到来候丈無之、固陋昔日通ニテ〔つらいの方言〕ノシ不申、小松・

桂・岩下・西郷氏杯、先生達ノ早ク下リ有之、今一変

革無之候テハ不相成ト申事ニテ、折角相待申事ニ候、

黒田ニモ大坂ヨリ同船ニテ罷下、馬關ヨリ太宰府へ立

寄候ニ付、三日跡着相成候、京都ニテハ肥後留守居上

田モ呼下シ相成、森井惣四郎杯ニハ改心ニテ、江戸ノ

ヤウ相帰リ、肥後模様少シ相變候由承居候へトモ、嘉

巴右衛門熊本ニ立寄り、津田へ逢候由ニ付承候処、指テ

ノ事ニモ無之、矢張會論向ニテ、御国ノ処ハ少シ忌

候哉ニ相聞へ申候、シカシ京都ニテモ、淺井新九郎ト

申者小松家へ参リ、少シハ心ヲ寄セ候儀モ有之、淺井

右通ノ儀ヲ津田等モ至極喜ヒ候哉ニ相咄候由、蝦夷一

条ハ、先見合候様トノ事ニ候間、京都ニテハ何トモ夫

形召置申候、今日少シ取込候付、後便ニ筆ヲ止、御礼

旁迄御座候、恐惶謹言、

二月十三日

堀 直太郎影

柴山良助〔道野〕様

五七 小田井藏太ヨリ黒田・折田・三島へ書翰

黒田嘉右衛門様(清綱)

折田要蔵様(年秀)

三島彌兵衛様(通稱)

小田井藏太

急用御直披

増々御安泰奉賀候、然ハ兼テ御内談イタシ置候云々(朱)〔全豊婦京復ノ事〕

追々御取行ヒ可相成形勢ニ付、御同様大慶奉存候、就

テハ種々御相談申上度儀有之候間、各様御宅迄罷出度

奉存候、御在宅ニモ御座候ハ、被仰越度、且ハ御差支

モ被為在候ハ、幾日ニ罷出可然哉、是又被仰越度奉

存候、右夫是相同度如斯ニ御座候、以上、

二月十五日

追テ、本文之義、昨今之機会至極ヨロシク相見候間、

不失様精々周旋罷在候間、左様御承引可被下候、以

上、

五八 小松帯刀ヨリ西郷吉之助へ書翰

過刻ハ大失敬仕御海恕可被下候、別紙桂家ヨリ相廻候、

貴兄江御廻シ申上候様承付差上候、御覽濟カノ方へ

御返シ可被下候、倫鈍行之義ハ、過刻御談シ通之方可(ロンドン)

宜ト相考申候間、尚御勤考之上、桂家江モ御談シ置可

被下候、桂氏モ同断勤考之趣申參候間、宜敷御頼申上

候、此旨早々如斯御座候、以上、

二月十七日

小松(清應)

西郷兄

五九 土岐新兵衛報告(長州処分)

長防御所置承得候次第左ニ申上候、

今度長州為御所置、閣老小笠原壹岐守様、当月四日大

坂出帆、去ル七日藝州廣島江御着船相成、其外幕役別

冊之人数、都て去ル十一日御着藝相成候由、尤御所置

振り左之通承得申候、

一大膳父子剃髮入寺、

一封土十萬石被削、

一他国より入込居候浮浪輩、不残本国江引渡、

一昨年正月再筈之激徒悉科戮、

一毛利家血食之儀は、末藩中より可然挙人材、

右五ヶ条、大膳父子藝州廣嶋江被召呼、御達相成候賦之由候得共、父子病氣等にて不罷出候ハ、末藩之者共被召呼、是又同断ニ候ハ、家老之者共被召出、何日限御受之御届可申出被仰渡候上、異儀ニ相及候ハ、則より御人数被差向候哉ニ相聞得申候、尤昨年十一月、大目附永井主水正殿、御目付戸川伴三郎殿〔安室〕・松野孫八郎殿、藝州にて長州家老穴戸備後介始、其外隊長之者共被召出、御礼問之形行は追々申上置候通にて、其節八ヶ条之御答之件々、書取を以可申出旨御達にて、右穴戸其外より書付を以、致申分候文言之内ニ、左之通書認為有之由、

右条々御答申上候次第にて、別段齟齬仕候儀は無御座、依之此上は御寛大之御所置を以、大膳父子本之通官位・御称号被成下、三都之屋敷も如本被下置候ハ、参勤等も仕、幕府江御奉公も仕度奉存候、勿論尺寸之地も御切割御取揚之儀は、更ニ存も不寄候、右文言文は至極之御秘事にて、御受取之上御上坂相成候由、然ニ今度五ヶ条之御所置相成候付ては、戸川・松野之兩人論説致齟齬候処より、兩人之分は藝

州表之御用御免相成候哉と相聞得申候、尤此上は何れ御所置被仰渡候上、畏と違背との二ツにて、治乱之両端相決候場合にて、井伊侯御人数五千計、榊原侯三千計、其外大垣戸田侯・紀州侯御人数迄都合一万人計は、昨年十一月より藝州江出軍相成居、日々莫大之雑費にて、何迄之限りも分兼候処より相苦ミ、只管御打入を相待候向と相聞得申候、

長州藩

〔赤松幹之丞〕
赤根武人

久留米脱藩

〔祐店〕
淵上幾太郎

本名石澤茂一郎

当分変名

生国不相知

峯 郡之助

筑前脱藩之由

柴 輪兵衛

右四人事、長州より昨年三月、町人体ニ姿を變、大坂表江為探索方致流浪候処、幕府之手より被相捕、大坂江入牢相成候者共にて、昨年十一月永井氏抔藝

州江被列越、長州江為説得被差遣候処、赤根は山口城にて逢死罪ニ、外三人は今ニ行衛不相知向ニ致取沙汰申候、

戸川伴三郎殿家来

今川忠治

松野孫八郎殿家来

安島順介

右両人事、長州奇兵隊中之者共ニテ、子細は不相分候得共、致脱走江戸江差越、片書通混と致奉公隨身之者共ニテ、是以昨年被召列、長州表江為説得被差廻候処、右両人は先達て馬關より小倉江致渡海、当所より戸川氏杯江差送り相成申候由、右次第二て何様之説得欵其辺ハ探り付不申候得共、当時防長形勢、右体之説得共ニ致承服候様之勢ひと相聞得不申候、

右通承得申候間、為御見合別紙探索書三冊相添、〔本「倉庫」〕此段申上候、已上、

小倉滞在

唐物締横目

寅二月十八日

土岐新兵衛

生産方掛

御裁許掛衆

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

六〇 西郷吉之助ヨリ蓑田傳兵衛へ書翰

(内外ノ時情)

御両殿様益御機嫌能被遊御座、恐悦之御義奉存候、陳ハ御当地之形勢も格別相変候儀も無之、藝州表之談判もいまた不相分、当月八日比着之賦ニテ御座候由、弥何通之所置を以參候へハ、決て承服ハ不仕事ハ、幕府ニおひても疾存知之訳と相考申候、乍然戦を始候様子更無之、就てハ何ぞ細工をいたす賦欵も不知事ニ御座候、先此所置ハ表通之訳ニテ、大赦と欵何と欵申ものを以て、至極寛大なる所置ニ出候も不被計事ニ御座候、いつれ当月中ニハ、様子相分義ニ御座候間、相知次第直様急飛を以申上候様可仕、天下之形勢も此一举ニ変替可致事と奉存候、諸藩之模様も余程相変、幕威之衰弱を真ニ知、嫌疑を被掛候ても、思敷ないも

のと合点いたし候様子と被相伺申候、大道之相立候所、
いつれ心服可致世態とハ相成、人心之帰向、是より外
ニ無他次第ニ成行申候、具眼之人ハ、大ニ道を起し可
申時ト奉存候、若哉戦相始候ハ、諸方ニ蜂起可致、
甲・信二州之辺ニも其萌相頭候由、一度動立候ハ、瓦
解可致事と奉存候、大坂ニおひても、大久保越中守屢
建言いたし候得共、頓と相行れ不申、最早病と称し御
暇願出候由、東婦之舎と被相聞申候、板倉候ハ随分御
宜敷、小笠原候も今日之事ニおひてハ、是と申御失ハ
無之候得共、何分御断シ被成候処、両侯共乏敷込入と
の趣、越前中根雪江江相咄候由御座候、其上板倉候ニ〔勝勝、老中〕
ハ服心之臣ニ奸智之者有之、此人専事を任シ居候由、
是か第一之邪魔を致すと申居候由御座候、勝安房守如〔義邦〕
き之人物ハ、只今天下ニおひて、上等之人ニ可有之処、
却て氣違之様ニ幕人ハ申居候由、大久保之建言も、一
向不通由ニ被相聞申候、是位之急難ニ迫候ても、人物
を欲せざる事ニ御座候へハ、衰運極候事ニ御座候、御
苦察可被下候、江戸表ニおひて岩下君二度談判モ有之
候由、英人ハ余程解ケ候由、仏人之処至極幕吏と結居
候間、いまた十分ニハ參兼候半、乍然佛より大ニ依頼

之向相見得居候間、必やり付可申との趣申来候、何分
近来幕吏大ニ横濱夷館江立入候儀を相禁シ、
御国人ハ尚更付添居候由にて、存分之咄合出来兼候向
ニ御座候、必御世話被遊訳ハ有御座間敷と相考申候、
此旨荒々奉得御意候、頓首々々、

西郷吉之助

二月十八日

豊田傳兵衛様

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

六一 伊地知壯之丞ヨリ大久保一蔵へ書翰

慶應二年二月十九日

大久保一蔵様

伊地知壯之丞

研北

御答書被下忝拜見仕候、時氣無御障御詰、芽出度奉祝
候、劣弟碌々致滞坂居候間、乍慮外御休慮可被下候、
御高韻拜吟、平仄相違且不穩之処、少々点作差上候、
僭越之罪は、偏ニ御用捨願上候、平凡之作ニハ候得共、
御慰ニもと高作ニ致次韻入御覧候、御一笑可被下候、
最速御報可申上筈候処、春光淡蕩難致閑居、二夜宿り〔露也〕

ニて信貴山江遊、昨日罷歸其故致遅引候、帰りニハ紀州大和川を下り、随分一興御座候、御地花之消息も近寄、追々御案も可相生、小子杯ニハ、從來田舎之菜花ても相眺可申候、是又一種之趣有之、住マバ都、何れと難致甲乙存申候、先は御酬申上迄ニ如此御座候、頓首謹言、

寅二月十九日

伊地知壯之丞

大久保一蔵様

研北

(大久保利謙氏所蔵本にて校訂)

六二 (柴山良助ヨリ野村宗七へ書翰)

前文切レ候、

絵図尚委細御頼申上置候儀、存含申候処、残情ノ至、併シ別段御注文迎モ無之、其節粗御頼申上置候通ノ事ニテ、和板ニテ銅板アタリノ明細、彼ニ類似スル新品御座候ハ、勿論仕合、サナクハ又洋板ニテ、一円内外ノ処トモ有之、ヲヨビ付品モ御座候ハ、其方ニ被成下モ、ドノ筋ニテモ新板ノ便ヲ得タル方、第一ト奉存候間、何卒御賢慮ヲ以テヨロシク奉願上候、代料ノ儀

ハ、御沙汰ニ任セ差上不申候間、左様思召被下度、何レ御帰ノ上ヲ可奉期候、将又御隙ヲ以テハ、新説御聞及ノ節ハ、トウゾ御洩被下度、近頃承候へハ、長藩其表ニテ亜・佛へ和シ、下ノ關迎台場等、緩怠ノ情ヲアラハシ候哉ニ承及申候、御聞及ノ儀トモハ有之間敷哉、トウゾ御洩シ被下度、爰許相替儀モ無御座候、先日ハ又々谷山大射場へ引揚ラレ、随分難儀御座候、御察可被下候、先ハ御安否御尋問旁如此御座候、恐々謹言、

二月廿五日

柴山良助

野村宗七様

(盛秀)

(道慈)

参人々御中

六三 平田大江ヨリ西郷吉之助へ書翰

包紙

西郷吉之助様

平田大江

拝呈

尚々奉願候、筑前ヨリモ御役者御同伴被成下候処、御談合被成下候様千万奉希上候、以上、一輪呈上仕候、春和之時節御座候処、弥以御勇壯被為

入、大悦奉存候、然ハ先日ハ初テ拝顔仕申候処、国体
之情実筑藩ヨリ御承知被下置、私ヨリモ申上候次第、
御憐察御懇情之程肺腑ニ徹シ感銘仕候、奉恥入候内情
有之、長州迄罷越申候付、馬關ヨリ出船、アイノ島へ
繫船仕、御乗出シ之御様子ニ随ヒ、壹州ノ如ク出帆仕
リ可申候、仍テハ旧濱田孫三郎・青木小藤太御地へ差
出、御談申上候間、宜ク御聞得可被下候、御威光ヲ以
宗家無別条、安堵ニ至リ候義千万奉願候、兩人取合略
畢仕申候、失礼高免奉仰候、不日拝顔万々御教示可奉
蒙候、此段申上度早々呈魚臺候、恐惶謹言、

二月廿五日

平田大江

西郷吉之助様

六四 水野溪雲齋ヨリ西郷吉之助へ書翰

口達書取

此節御出張之御守衛中、御交代ニモ可相成御都合ニ御
座候処、是迄内輪御周旋ニ相成候衆中モ御座候テ、別
段公卿方拜謁相濟候事ニ御座候得ハ、全ク御交代ニテ
ハ、是迄之御次第不連続ニモ自然立至可申候付、三條

殿御内意ニテハ、当分拜謁相濟候諸彦丈ハ、当藩へ被
差留置度思召ニ付、御賢慮ヲ以、夫ト不廉立御滞留被
成候様、御処分ハ出来申間敷哉、内々小子ヨリ得貴意
トノ御事ニ御座候間、卒尔之至ニ候得共、及御内談申
候、不具、

二月廿七日

水野溪雲齋正名、久留米藩家老

西郷盟台

侍史

六五 長岡監物ヨリ伊地知壯之丞へ書翰

未得拝顔候得共、一輪拝呈仕候、春深ク相成候テモ、
氣候不順ニ御座候処、弥御安祥奉賀候、楮昨春馬御所
望トシテ、御馬懸リ之面々被差越候節、一同家来井上
猪右衛門ト申者差出候間、添書等相贈リ候向々ハ、行
違ニテ空敷相成候由ニ付、不計貴宅江推參、野生申付
置候馬懇望之次第歎願仕候処、速ニ御領掌被下、其末
不一方御厚配ヲ以、良馬ニ疋手ニ入、牽帰リ候段大慶
至極、偏ニ御芳志故ト不浅忝々奉存候、右之馬其後増
々丈夫ニ出来合、足色等モ好ク相成候ニ付、甚愛シ申

事ニ御座候、付テハ書状ヲ以ナリトモ可奉謝筈之処、

其後モ届兼背本意打過申候、然処愚第一人居候ガ、野
生一年劣リ之若者ニテ、尤馬ヲ好ミ、平素専ラ遠馬ニ
強壯成ル乗方仕候処、近年御国ヨリ馬一切御出方被差
止候ニテハ、段々所持之馬モ、御国立之方ハ老衰ニ至
リ、其外ハ關東立或ハ当地産之若馬等ニテ、手ニ合候
ハ漸ク二三疋之馬ニテ、何分兄弟二人之乗料ニ乏敷、
甚無心元覚申候間、弥ケ上相願之儀、心痛至極ニ御座
候得共、今度又御馬懸リ之面々被差越候ニ付、差付不
都合ナカラ、猶又家来井上猪右衛門差出、万事貴君江
奉依頼候様申付置候間、不相替御懇意ニ預リ、此節モ
御執成ヲ以願曰、兩三匹之処、御配意之程幾重ニモ奉
希候、委細ハ同人江中含置候間、御承知可被下候、随
テ国産之一品并手製之籠菓、輕微之至御座候、昨春之
御厚情為可奉謝進覽之供候、先ハ右之段用事迄得貴意
度如斯御座候、尚期後信之時候、頓首、

二月廿八日

長岡監物(是齋 熊本藩家老)

伊地知壯之丞様

尚々、末筆乍慮外小子馬懇望之次第ハ、御馬懸リ之
御方々江モ不惡様御伝声被下、万端宜敷御執成被下

度奉頼候、

三白、貴君御様子ハ、兼テ同藩津田山三郎・山形典
次郎列ヨリ承知仕居、御慕敷存上、亡父監物ハ御藩
之御方ニ知音之人モ不少、依テ弊藩御往来ニハ、御
尋問之事モ度々有之タル事ニ候、其末小子代ニ相成、
如今日御疎遠ニ罷過申候儀、不本意候得共、畢竟頑
愚不学故、他藩之交リモ不仕事ニ候、借方今之形勢
逐日切迫ニ相成候処、何之見込モ無之、只々懸念仕
計ニ御座候、

公武之御間ヲ初、長州之御処置等如何成行候哉、何
共氣之毒之姿ニ相見申候、御藩ヨリハ京攝ヨリ中国
筋ニ探索之諸君子モ不少、且諸藩江御交リモ広ク、
一統之事情御熟知、御定見之御確論モ可有之、カ、
ル時節ニ相成候テハ、愈以列藩一致、
皇国之為忠節被尽申度、殊ニ御藩トハ御隣国之御交
リ、旧来之御好ミモ御座候故、別テ無御腹臆、万事
御教示被成下度、重疊奉頼候、以上、

六六 松岡七助ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

松岡七助

黒田嘉右衛門様

往年於京都奉別後、御消息承り不申、此節春暖相催候、高堂愈御勝常可被成御起居ト奉欣然候、私瓦全送日仕候、天下形勢モ毎々致變遷、當時ハ如何可相成欵、田舎ニ罷在候テハ不知所稅駕、何卒国是確乎トシテ、一定後不拔様仕度、開国ニテモ不受夷侮ハ、是即攘夷也、高見如何、武井寛平於京師丁父憂居候中告別、其後ハ音耗ヲ絶申候、御同藩高崎猪太郎殿此頃ハ如何被成候哉、如前御奔走欵、又ハ御国之官ニ御精勤被成候哉、夜深入定於燈下読書了茫然憶往事、寛平杯ノ近況モ承り度、心事御察是祈候、這般ハ幸便ニ任、草々搦毫御安否奉伺候、情緒不尽、先右計如此御座候、恐惶謹言、

松岡七助(時敏 土州藩儒者)

黒田嘉右衛門様

侍史

花朝前一日

六七〔宛名差出名不明書翰〕

一同志之輩虫村不明相唱、各一派相立候様相成居候事、

一 矢野・加藤確執之義ト申ハ、自然ト論ノ合ト不合トヨリシテニ割レニ相成、別ニ議論之上、別論ニ相成候ト申義ニハ無御座、相州在勤ニテハ加藤本意不貫通、夫故退勤為致候様、離間策モ被行候様相聞申候、

一 中村圓無二太割腹仕候已後、兼テ同志異論モ有之候処、弥其機相圓太事歎息イタシ候人モ自ラ忌嫌イタシ、圓太事有罪之人ヲ斬首イタシ候ニ、不平ヲ挾候モノ於有之ハ、悉皆可行同様ナト申暴評モ有之ヨシ承申候、

一 併テ不取止事ヨリ相発、方今ニテハ既ニ相州派ト唱候人ヲ、斬戮イタシ可申形勢ニ御座候、左様御座候テハ、何分意趣相通候テモ、イツレモ志ス処ハ御座候義ニ付、又々仇復ニモ押移、終ニハ大紛乱ニモ可及奉存候、唯今 幕嫌之折柄、如何ニモ歎ケ敷、不求シテ俗物之術中ニ隕入、長征之義モ被 仰出処ニ内乱醸出イタシ、自然 国家御不明之訳ニモ立至り候テハ、実ニ以長大息無限奉存候、右大意ヲ以同志共斯急迫之時情、内乱ニモ及候テハ、纔ナル微力之同志俗術ニ隕入、再度恢復之道無覺束、何モ鎖細之偏執ケ間敷義ハ捨置、同志一

和イタシ、皇国之御為ニ精力相尽シ候得ハ、俗物モ追々相退キ候折節、屹度正義ニ相基キ、次第二手モ相延可申愚考仕候、右之御含ヲ以、同志共へ御教諭被下候様奉願候、

一唯今於京師モ真俗之人計ニテ、実ニ国情トハ相違仕、追々有志之向ヨリ不残引替相詰申度、兼テ之念切ニ御座候処、右之如キ偏頗ケ間敷意味計ニテハ、迎モ其義不相叶、俗人へ唯々力ヲ付候様ニ立至可申候、其当リハ同志共ニテモ承知仕候義ニ可有之奉存候得共、猶右之赴御教示被下度奉願候、

右之余ハ追々藤井君・黒田君・西郷君其外御使者トモ入込ニ相成候義ニ付、得卜情実ハ御承知可被下奉存候へハ、御見聞之廉モ可有御座、何卒御打合被下、御採酌之上、一和之道ニ相基キ候様、御尊藩之御力ヲ以、御周旋奉懇願候、左候得ハ私共罷帰服罪仕候テモ、少シモ遺憾無之奉存候事、

六八 米國留學生

但プリンスウエツキハ当時十一人

肥後 伊勢佐太郎 〔權井佐平太〕

筑前 平賀礪三郎 〔帰朝〕

越前 日下部太郎 〔病死〕

筑前 井上六三郎 〔良一〕

薩摩 本間英一郎 〔若吉〕

薩摩 松村俊蔵 〔市来和彦〕

庄内 永井五百介 〔吉田清成〕

薩摩 吉田伴太郎 〔種子島敬介〕

仙臺 高木三郎

薩摩 杉浦弘蔵 〔阜山丈之助〕

薩摩 富田鐵之助 〔美則〕

薩摩 大原金之助 〔吉原弥次郎〕

ヨレゴン 白峯駿富

フランシスコ 長澤 鼎 〔磯永彦助〕

ドクトル 齊藤金平

堤 田村初太郎

同飛脚船 寛 勉

佐土原 丸岡竹之丞 〔島津〕

同飛脚船 寛 庄三郎

佐土原 丸岡竹之丞 〔島津〕

谷川 猛(又之丞)

梅澤 太郎

樋口 宗儀

町田啓二郎 佐土原侯ノ二子

兒玉 章介

記者曰、伊勢ハ小楠翁(續井時彦)ノ子ニシテ病死ス、松村ハ今ノ海軍中將、富田ハ鐵之助ヲ以テ世ニ知ラレ、大原ノ吉原外務大蔵ニ知名ノ人トナリ、田村氏ハ教育界ニ在リ、町田氏ハ老西郷ノ下ニ號名ヲ十年ノ役ニテ現ハシテ戰死ス、兒玉氏亦世ニ名アリ、

六九 薩州侯建白(長州征討拒絶)

別紙家来共ヨリ言上ノ趣意御座候処、既ニ長州ノ儀御請書不差出候ハ、諸手一同討入候様被 仰渡、趣意承知仕候、御決定ノ上、不容易ノ御儀ト奉恐入候得共、皇国ノ御大事ニ相拘、且名分条理不立候テハ御請難仕、兼テ確定ノ旨趣ニ有之、別紙ニモ申上候通、於大儀難相濟、不止得御断申上候間、宜御聞届被成下候様相願候、已上、

二月

(島津茂久)
松平修理大夫

慶應2年(1866)

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編
慶應二年三月

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料」
(紙数七三枚)の記載あり〕

目録

在太宰府池田次郎兵衛ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰
 在太宰府三原・關山ノ二名ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰
 蓑田傳兵衛ヨリ大久保一蔵へ書翰
 三條殿内大山彦太郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰
 幡島三郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰
 西田・津留両士ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰
 磯部勘平ヨリ黒田嘉右衛門へ謝状

蓑田傳兵衛ヨリ黒田嘉右衛門外二名へ照會書
 今井榮ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰
 三原・關山ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰
 對州内訶云々汽船借用事件黒田廻答書
 山田辰三郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰
 磯部・今井ノ二氏ヨリ黒田・星山へ書翰
 三條實美卿診察
 莊村助右衛門ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰
 〔南部彌八郎筆記〕
 蓑田傳兵衛ヨリ黒田嘉右衛門へ照會書
 幕吏小林甚六郎博多港へ乗入云々ノ報告
 幕吏小林甚六郎五卿受取ノ為メ來博人名
 軍政拡張ニ就キ軍役掛上申書
 陸海軍ニ罹ル事務遲緩無キ様達書
 佐々木寛蔵ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰
 月形洗蔵・野村望東尼詩歌
 慶應三卯三月薩藩ヨリ陽明殿江差出候書付写
 道島家記抄小笠原使者云々
 天下ノ形勢ニ就テ藩内布達
 軍役知行高制限布達

柴田日向守等建言

新納駿河書類

五卿家徒等へ訓令

薩藩申立廉書

佛・英・米ノ三国へ書生ヲ出ス

黒田嘉右衛門様

侍史

〔黒田文紀氏所蔵本にて校訂〕

七一 在太宰府三原・關山ノ二名ヨリ黒田嘉右

衛門へ書翰

七ノ一 久留米ニテ

黒田嘉右衛門様

三原次郎左衛門
關山新兵衛

七〇 在太宰府池田次郎兵衛ヨリ黒田嘉右衛門
へ書翰

今日は御光来之処、甚致失敬奉多謝候、然は唯今幡鳴
三郎博多より来訪、對州〔采一内江三就テ〕一条之儀も運兼候付、久留米
江御出掛之由御座候得共、当藩使節も、近々相運候模
様御座候付、何卒對州より御先江御出之処、奉願上度
段承候、就ては私より何様とも難申上、いつれ黒田氏
江御引合御熟談可被成段申聞候処、今晚參樓之賦御座
候へ共、最早及深更候付、驚御寢候ても御失敬御座候
付、明早朝可致參謁、其旨私より申上置呉候様承候
付、為其呈一翰候、恐々敬白、

三月二日

池田次郎兵衛

御袖別以来御左右不承候得共、追日暖氣相催、一入御

多祥可被成御座奉賀候、然は致承知置候蒸氣船小蝶丸、

一昨日博多江入津、昨日は内田仲〔政應〕之助殿、右船より被

罷下由ニテ、入来有之候付、御沙汰之趣相達候処、多

人数之乗組、其上荷物等過分ニ積入相成居、全体器械

も相損、此節長崎へも差越、取締方等相成賦之由候へ

は、迎も對州迄罷越候義ニも調兼候段承得、今朝ハ早

々出帆之由御座候付、別段御国許江御掛合、御手当不

被成候てハ御用立兼可申、此段早々御しらせ申上越候、

以上、

三月五日

關山新兵衛

三原次郎左衛門

黒田嘉右衛門様

二白、御許之御都合何様之御事御座候哉、〔朱〕〔矢之助〕星山氏へもよろしく御致声被下度御頼申上候、

七ノ二〔朱〕〔逸之〕

別封之通認置候処ニ、内田氏より別紙之通申來、當藩之蒸氣船ハ、迎も借入之都合相調間敷候付、於長崎早々修覆有之、使人等之義ハ、長崎より外船借受被差送、小蝶丸之儀ハ、博多湊江回船有之候様、内田氏江申遣置候、右之趣、一往貴様迄御掛合、御決心之所承届候上、右次第返答ニ相及義、当然之事と相考申候得共、左候ては往返旁延引ニも罷成申談、右通取計申候間、左様御得心可被下候、此段早々為御心得申上置候、以上、

大宰府より

三月五日

關山新兵衛

三原次郎左衛門

久留米滞在
薩州

黒田嘉右衛門殿

〔黒田文紀氏所蔵本にて校訂〕

七二 蓑田傳兵衛ヨリ大久保一藏へ書翰

御別離之后御起居不同得候処、遠海無御恙御安着、猶御堅榮被成御勤、珍重御儀奉存候、於爰許 御両殿様益御機嫌克被遊御座奉恐悅候、其御地先御寧謐之段追々承り、御同慶ニ御座候、長州之事情、過日土持佐平〔細幸〕太帰着洋器承届、此節ハ唐津閣老藝藩へ差入相成、削地之外云々之御所置、迎も長人承伏之体ニ無之、万端失策ヲ究耐〔不脱丸〕突次第、終敗軍天下騒乱無疑、乍然此上イマタ反復之策略可有之歟、追々一左右相達候半ト相待候義ニ御座候、桂君・小松君・西郷氏疾ニ乗船相成、不日着船可相成ト相待申候、貴兄無御滞京御座候半、此末天下之事御多端ト奉察候、御尽力之程奉希候、扱於爰許御打合申上置候異船云々之一条モ近寄、為 国家大慶之時機罷成申候、彼塗器類ハ御手当相成候半奉存候、爰許当分ハ至テ静謐之義ニ御座候、御安心可被下候、追々其御許之情実ハ何卒御洩可被下候、吉井氏へ別啓行届不申候間、宜被仰伝可被下候、先々御安否相伺度、且御着之御歎申上候、猶托後鴻候、恐々謹言、

三月五日

蓑田傳兵衛

大久保一蔵様

人々御中

七四 幡島三郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

(對州内証ニ就テ)

七三 三條殿内大山彦太郎ヨリ黒田嘉右衛門へ

書翰

久留米ニテ

從博多

黒田嘉右衛門様

幡島三郎

要用

未得貴意候得共、自宰府一翰呈候、先生ノ御事兼々去
年於京師モ承届居申候、先月初吉井君ト上京、於御邸
モ色々御世話ニ相成、此節罷歸申候根元ハ土州之者ニ
テ、寺石ト申者也、於小倉大島先生ニ拝眉仕候者也、
於京師天下真ノ有志者ト様々約談仕、夫ニ付先生ニ是
非共御目ニカ、リ度、御国迄モ事ニヨリ參上可仕相含
居候処、此節是辺ニ御来光不計奇機、何卒急々拝顔相
願度候ニ付、当宰府ニ御越被成候ハ、如何程御急キ
候トモ、鳥渡御沙汰被仰付度奉願上候、取急極失礼ヲ
不顧呈一書申上候、再拜謹言、

三條殿内

三月九日夜

(中岡慎太郎署名)
大山彦太郎

黒田嘉右衛門様

謹啓仕候、宰府奉別後、弥御清適可被成御起居、奉遠
賀候、先以弊藩之儀段々御苦心御執掌中、遠路御苦勞
被成下候段、誠ニ以難有不堪感戴之至候、抑弊藩之義
ニ拾年来之痼疾ニテ、是迄推移来居候事故、急ニ運ひ
兼候勢も可有之、猶更御苦心被成下候半と奉敬察候、
然し 尊藩之御力ニ頼、恢復之日も不遠と奉存候、何
卒幾重にも宜敷様奉伏願候、陳処右弊藩之義ニ付、御
苦心被成下居候央、申上候も甚不都合之次第ニ御座候
得共、先達ても宰府ニテ段々申上候通、對藩之義、此
節 尊藩且諸藩より御使者參候事相聞、一旦折合居候
様子ニハ候得共、尚正義之士繫獄蟄居等も不少、彼勝井
之暴逆此迄之処置ニテ相考候得ハ、此等も何時又及誅
戮候哉も難計、且又是迄段々彼より諸藩江も手を廻居
候義ニ付、事及遅引居候ては種々之害を引出し、彼地

ニ渡候上も、事之難易ニも大ニ関係致可申被考候、寔以彼藩之義危急存亡ニ迫り居、弊藩之義ハ未タ夫程之事ハ無之、其上弊藩之義ハ、此節御苦勞被成下候上ハ、決て暴戮等之氣遣ハ無御座義と奉存候、就てハ当藩使節も弥十一日欵十二日迄ニハ、屹度出帆可致決着致、平田大江も、今明日ニハ当所江廻船可致ニ付、何卒宰府ニて御然諾被成下候通、弊藩之義ハ、右暴戮等ニ及不申丈之処ニして、一往御引取被下、對州へ御渡海之上、每度御苦勞被成下、恐入候義ニ候得共、又々御再行被成下候義は、相叶間敷哉、左様不被成下候ては、弊藩より對州江對し、一向信義不相立事ニ相成候ニ付、何卒其等之情実御酌取、速ニ御帰博御入對被成下候様万々奉願候、猶委細ハ對藩人書中御承知可被成下候、右御願迄草略如此ニ御座候、いつれ拜眉万縷御礼可申上候、再拜頓首、

三月九日

幡島三郎

黒田嘉右衛門様

侍史

七五 西田・津留両士ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰
(對州内訖ニ就テ)

御分袂以後、弥御堅勝珍重奉存候、然は私共再往田代へ差越、貴公御論之通、五十嵐同伴博多へ差越、太田初へ及議論候処、太田之論ニは、成程五十嵐存慮之程、臣子之分ニおひてハ必然之事ニ候得共、五十嵐一兩人ニて、国内平穩之所置ニ付ては、勝井親戚之続も有之、勿論是迄平田初腹心之者共ニも、少ハ表裏之次第も相生居、此末連も十分之所置ハ無覚束、太田其外有志輩不安心之事之由承候ニ付、兎角此上は五十嵐へ得と御談判にて、御決議結局之処致承知度申置候処、其後五十嵐論議も、稍太田等同論相成候付、初より月形江も依頼之事故、同人ニも一会いたし度との事ニ候処、折柄月形宰府へ罷出居候、就ては宰府ニおひて私共も面会いたし、一同致決議具候様承り、昨日五十嵐・太田等同伴当所ニ罷歸、今日右兩人并月形等出會、彼是談判有之、終ニ五十嵐も弥同論相成、いつれ此上は、最初通諸藩使節致渡海不具候ては、国礎慥ニ築立候儀出来申間敷、一旦此涯平穩相成候ても、再往紛乱相生候

歎も不被計候付、是非貴公初其外使節急ニ渡海之儀、
歎願之事候間、私共よりも尚又、貴公へ願越呉候様呉
々承申候、尤五十嵐・太田兩人同伴其元へ踏越、直ニ
可及示談段も承届候間、おのつから右兩人より細々御
聞届可被下候、先は形行迄早々申上候、已上、

三月九日

筑前宰府より

津留金次郎

西田彌四郎

筑後久留米ニて

黒田嘉右衛門様

要用

七六 磯部勘平ヨリ黒田嘉右衛門へ謝状

黒田嘉右衛門様

磯部勘平

一昨夕は寛々接鳳眉大慶之至奉存候、過刻は佳章三葉
御投与被下、万々難有、所謂一唱三歎、御同様御高作
通之赤心ニ不背様有之度、先ツハ御請迄草略申上留候、
頓首、

三月十日

猶々過日御噂之趣ハ、早速寡君へも申上、重役へ
も申聞置候、長日嘸御徒然ニ可有御座、乍憚星山
君へも宜御鶴声奉希候、

磯部勘平

黒田嘉右衛門様

七七 叢田傳兵衛ヨリ黒田嘉右衛門外二名へ

照会書

(對州ヨリ借船一件)

對州より小蝶丸御借入之相談相成候由ニて、博多表江
乘廻候様、西郷吉之助方より、右船乗頭春山彦右衛門
方江問合相成居、其後内田仲之助博多上陸之折、各方
より對州之儀、別て急迫之時(卷一内江就之)機無抛趣ニ付、急々御船
御借渡之道相運候様、承趣も有之候得共、右御船之儀、
京都より急成御用向ニて、出帆相成候付ては、いつれ
之筋御国元江早々廻着之上、其許江相廻候儀は、如何
様共可取計と之趣、示談之上其許出帆罷下候段、仲之
助申出候、就ては對州之事情、実以難黙止、無御抛儀
ニは候得共、京都表御用ニ付、爰許より急速不致出帆

二て難相濟義有之、近々小蝶丸出帆被仰付筈ニテ、外
ニ蒸艦之義も大坂・長崎江も被差出置、機械等相損居
候御船も有之、夫々此涯都て御船賦相成居候付ては、
乍御氣之毒御借渡之義難相調候間、各方より程能断被
申入候様、宜被取計候、右ニ付ては御内沙汰之趣も有
之候ニ付、飛脚差立此段早々申越候、以上、

三月十三日

蓑田傳兵衛

黒田嘉右衛門殿

三原次郎左衛門殿

關山新兵衛殿

七八 今井榮ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

黒田嘉右衛門様

拜復

今井 榮

(敬義、久留米藩士)

今朝は華翰被下、差上置候書類御返下、慥落手仕候、
扱永々御引留申上何とも恐縮之次第、此上遲滞ニ相成
候ては、何とも難申上次第ニ御座候得共、今暫く御待
被下候様奉希度、最早不遠何と軟御返詞可仕、勿論聊
等閑には不相心得之趣ニテ、重役共夫是と甚心配罷在

候由ニ付、其辺之義ハ、私より厚申上置候様、申付候
事ニ御座候、何とそ平ニ御海恕奉希候、御徒然之段、
呉々縮身此上なき事ニ奉存候、扱又明夕、殊ニ寄近辺
迄御誘引申上度、未た不定ニは御座候得共、一応御案
内申上置候、委細は明朝可申上候、
星山君へも厚くよろしく被仰上可被下候、草々貴答乍
延引申残候、再拜、

三月十四日

七九 三原・關山ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

其後不得御意候得共、弥御堅勝之筈珍重奉存候、然は
御国許より、飛脚今日九ツ時爰許江致到着、別紙相届
候間、早々差廻申候、使節乗船之儀、對州御借入之向
ニ間違ニ相成候軟と相見得候、勿論西郷氏より春山江
問合之書面も、御借入之向には不相見、爰元ニテ私
共より内田仲之助江引合之節も、乗船之所ニテ致示談
置候処、如何之間違ニ候哉と存候、筑前使節ハ、去ル
十四日乗付ニテ、十五日出帆相成筈之由、多田莊藏博
多より申越候、尤同人なとも乗組之由、就ては貴公ニ

も、米藩御用濟之上は、早目ニ御渡海被下候様との事ニ御座候、此旨御掛合申上越候間、御国江は、貴公より御返答御申越被下度御頼申上候、以上、

三月十七日

三原次郎左衛門

關山新兵衛

黒田嘉右衛門様

八〇 對州内訶云々汽船借用事件黒田廻答書

對州より小蝶丸御借入之相談相成候処、右は京都表御用付、急速不致出帆候て難相濟訳有之、對州江御借渡之義難相調ニ付、程能断申入候様、御問合之趣承知仕候、對州之儀、筑前使節も五卿より之使者同伴にて、

去ル十五日博多出帆相成候由、依之私には当地用濟次第致渡海具候様、對州人より掛合有之候段、三原次郎左衛門・關山新兵衛宰府より申越候、然処当地之幽囚は、一朝一夕之起りニ無之、積年の旧怨固結にて、中々弁解六ヶ敷、大ニ俗論沸騰之由御座候得共、頼ニ要路之者共江迫り、説得ニ及置候付、大抵は解立、殊ニ〔有馬慶頼〕中務大輔様別て御奮發之由にて、是非中将様被 仰進

候通、為相連度と之御趣意ニ有之、既ニ兩日中ニは御決答可相成段、当藩君側之者より為相知、必其御返詞有之迄は、滞在いたし呉候様、無余義申聞候付、今日は右之御決答相待居申候間、御返詞有之次第、速ニ形行申上越候様可仕候、先は右之御返答迄、早々如此御座候、以上、

三月十七日

黒田嘉右衛門

襄田傳兵衛様

〔書七四ノ八〇まで黒田文治氏所蔵本にて校訂〕

八一 山田辰三郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

黒田嘉右衛門様

山田辰三郎

要用

過刻ハ早天拜謁、色々御尋申上、御面倒奉推察候、扱又水野丹〔正名〕後今一件御尋申上候様申聞置候処、頓ト失念仕候、此節 主上 御出輦、廿一日ト被仰出ニ御座候処、愈右日限ニ 御出輦ニ相成候哉、当所モ至テ穩成模様ニテ、其辺相分り兼申候、孰レ御許様ニハ愈之処、可被為有御承知、実ハ今一度参堂仕御尋可申上之処、今日ハ御引移之央、如何ト勘考差扣、書中ヲ以御尋申

上候、否御答ニ被仰聞被下候得ハ難有奉存候、此段御願申上度草卒如斯御座候、以上、

三月廿二日

山田辰三郎

黒田嘉右衛門様

黒田嘉右衛門様
星山矢之助様

右ニ同封

八二 磯部・今井ノ二氏ヨリ黒田・星山へ書翰

包紙

黒田嘉右衛門様

磯部勘平

星山矢之助様

今井 榮

尚々、兎角不順之気候、乍憚御国家之御為、別て御自重被成候様奉祈候、

一翰謹啓、暖和之節各位弥御清適被成御入、珍重之御義奉大賀候、尔は榮より御披露ニ及置候 中務大輔様より御両所江之被下物、別楮目録之通差進候間、御入手可被下候、扱弊藩御滞留中ハ、万端不行届之事而已、私共ニハ御懇意被成下候ニ甘へ、例毎失敬相働、何も御海容之程奉庶幾候、右之段得貴意度、書外后音之時と草略如是御座候、以上、

晚春念二

今井 榮

磯部勘平

別啓、御離盃之節ハ、私共コソ殊更酩酊失礼ヲ極メ候処、御腆篤之御書残シニテ、却テ縮入申候、御同藩様へモ始テ御面会、無御腹藏御快話ヲ伺、大慶罷在候義ニ御座候、御序宜御致声奉希候、扱又不存寄御国産之名葉沢山御投与被下、深辱御礼申上候、勇吉・傳十郎ヨリモ同様厚ク申上呉候様申聞候、其御地ニテハ御引返シ様ヨリ、万緒御賢勞之御事ト奉深察候、愚筆不尽情、右御挨拶迄早々敬白、

三月廿二日

兩人拜

黒田先生

侍史

八三 三條實美卿診察 (前田杏齋)

三條公御容体、旧冬ヨリノ御起原ニテ、当時ハ御脈細緊時々御脱汗、御遺精御心下之痙攣甚シク、時トシテハ御胸部マテ攣痛有之、御書御認又ハ御長談等被成候

へハ御勞倦、其夜ハ必御安眠御出来不被成候、御氣分御宜節ハ、御遊歩モ被為在候へ共、兎角御臥床勝ニ御座候、御舌喉御食事平常通り、御大小用宜シク、是迄ニ追々御滑便勝候処、頃日ハ先御平常ニ復シ申候、何分御弱体ニテ御長病故、急速御平快之処無覺束拜診仕候、当分滋養包撰之御煎薬・鎮瘻強壯之御丸・散等、兼用仕申候、以上、

三月廿三日

(元龜)
前田杏齋

八四 莊村助右衛門ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

肥後

黒田嘉右衛門様

莊村助右衛門

御親拆

敬テ奉拜啓候、崎陽相分袂後益御安泰奉恭賀候、弊邑御熟知被下候通之因循、宗社之危急累卵之勢ニ候処、世子君始終勤王之御志シ毫モ變動無之、米田・佐々木(赤)(虎雄乎)(高行也)其他僅四五輩之忠憤ニ依リ此行、世子君(細川護久)(長岡是豪)朝勤米田へ知事様御辭職退隱、世子御統繼之義、朝廷へ奉願候運ニ成行、世子君 朝議奉窺、一刀兩断一國人心之方

向ヲ定メ、王室ニ鞠躬尽力之域ニ至可申、然ニ廟堂上忠奸並立、衆寡勢殆難支程ニ有之候、必条西郷君・大久保様御配慮奉願、御尊藩ニ奉依頼候外無之候テハ、志願難遂筋ニ可有之奉存候、此已往尊藩御庇蔭ヲ以、国家挽回ニ至候ハ、肥後一國下蒼生ニ及候迄、御鴻恩永久ニ申統、邦家ト共ニ決テ忘却仕間敷候、是即僕憂國之至情、平生之心血ニ御座候、此節ハ米田へ随從同志太田黒亥和太・尾藤寛太出京仕候、何卒御逢被下度、宜敷御高教奉願候、委細ハ同人ヨリ御聞取可被下候、恐惶謹言、

(明治三年九)

三月廿五日

肥後

黒田嘉右衛門様

侍史

莊村助右衛門

八五 〔南部彌八郎筆記〕

慶應二寅年三月廿六日筆記〔南部弥八郎〕

(赤)(弥八郎)薩藩南部氏之説ニ、寡君之舍弟英国ニ渡リタリト云へル巷説ハ虚ニシテ、実ハ舍弟崎陽ニ至リシ欵、右二人(長崎)

〔志〕「備前ノ説」
 八島津豊後・島津圖書ナリ、右崎陽ニ至リシハ同所見
 置ニシテ、去丑臘末之事也〔朱〕〔外国新聞ニモ既ニ記セリ、
 南部カ答弁ヲ事実トス〕」

一同人曰、高輪薩邸江異人見物トシテ来レリ、薩士三五
 輩出会ス、庭中高丘ノ所ニシテ海面ニ望ミ、斯ノ如キ
 勝地ハ本国ナラデ見サル処ト云ヘリ、與板侯之邸囲込
 之風説ハ、当今之事ニアラズ、先年高金ヲ以テ買取、
 囲置タリト云ヘリ、外国人江売払フ之風説問ヘトモ答
 ヘズ、

一同説吾輩横濱ニ至ルヤ、敵地ヲ歩スルカ如シ、
 幕吏固守スルノ嚴ナルヲ云ハテ也、又曰、脱刀人禁ナ
 シト雖モ、吾徒ニ於テ面体ヲ知り、若形ヲ變シテ至ラ
 シニハ、弥以テ怪シマレ、忽チ禁錮セラルベシ云々、
 〔采〕〔熊本〕
 一細川本藩此程専ラ大坂表ニテ可然屋敷、外ニ二三ヶ所
 之屋敷地相求メ候心組ニテ、初メ天保山近所ヲ見立候
 処、海岸ニ付後々如何ト被存候哉、天王寺近辺ニテ、
 空地相尋候様、本国ヨリ申越、此節右周旋中ノ由、同
 邸ノ風説ニハ、外大藩之模様ハ未タ存シ不申候得共、
 右様之儀ニ付テハ、往々関東ト大坂ト両様ニテ、幕吏
 ノ御扱可相成欵、浪花城ニハ

大樹公不被為在トモ、紀伊殿・一橋殿等御交代御在城
 ニモ可相成トノ見込欵云々、

一鍋島家ニテハ、本留守居本国江引取、江戸邸ハ留守居
 替之由、本国ヲ富強之策專之由〔朱〕〔富強云々ハ事実ナラ
 シ〕」

一去秋中ヨリ薩邸動揺致シ、勤番之上不残掃国芝屋敷・

高輪中屋敷等ニテ、長屋向其外立木諸道具類共、入札
 払物ニ致シ、澁谷屋敷奥向女中不残引払候ヨリ悪説ヲ
 生シ、不穩事ニ相聞、右ハ全ク大隅守内意ヲ受ケ、当
 時致上京居候小松帯刀

此帯刀妻ハ大隅守娘ニテ、修并岩下〔左平
 理大夫妹ニ當リ申候〕〔虚説〕

右衛門兩人胸中ヨリ出候趣、下役島津仲之進都テ此三
 人、専ラ世上之形勢探索周旋致シ、薩藩之進退指揮致
 シ居候由、

一薩藩松永氏之説ニ、長州糧米充滿スト、其美ハ宇和島・
 因・備等之商密々長州江米穀ヲ送レリト聞ケリ、是長
 州江売ルハ、浪花ヘ売ヨリ其利徳ナルヲ以テナルベシ
 云々、

一薩州新聞志之秘説ニ、防長之事件、藝藩野村帯刀尽力
 周旋、其美ハ彼ト干戈ヲ行フノ日、薩地必ズ鬪戦之巷
 トナルベシ、是国之疲弊也、爰ヲ以テ無事ニ扱フナル

ベシ、且閣老之御処置ニ於テモ傍觀其因循ヲ唱フルト雖モ、恐クハ遠謀アルベシ、(朱)「加藤」(信忠)清正・正則之後國除セラ

ル、トモ、素是神祖之遠謀ト聞ケリ、秘スベシ、

一宇土細川藩秘話之由、明藩ヨリ伝聞、本藩之秘説ニ、

津藩怪ムベシ、然モ其所以ヲ不知、方今長防ハ憂ルニ

足ラズ、憂フベキノ甚シキハ薩ニアリ(朱)「(当時専ラ巷説)」

一薩南部氏之云、往十四日泉州侯ノ命ニ曰、ミニストル

薩重役ニ面会スベシト也、小山大中寺ニ往ケト(朱)「(事実ニ近シ)」

一僕問フ、何ノ事件ナルヤ、曰、戦後和親シテ懇親ヲ約

ス、彼レ甚タ懇切之情厚シ、依テ面会雑談スル而已、

一薩州高輪中屋敷江、三月廿一日外夷数人見物ニ罷越、

当月十日過ニモ又々数人罷越、其内女夷人二人・子供

兩三人召連車ニテ参リ、屋敷内不残并地続與板侯下屋

敷庭内等迄見物致シ、数刻ノ間罷在候、細川家宇土下

邸同所猿町之人見物ニ参リ、猶次第柄探索ニ及ヒ候処、

全ク井伊家屋敷ヲ抱込之俣ニテ、外夷江壳弘可申策之

由、願面ハ外夷ヨリ強談応援為致候積リ之由、慥ニ聞

込候旨承リ、左候得ハ無程新堀端屋敷ニケ所ヲ、一ツ

ニ致シ度願アリ、願濟之上ハ、井伊家ニ相對替致候策

ニハ無之哉云々(朱)「(事実、岩下方平談話記參看)」

一水府藩昨廿八日繁姫若様御登リ有之、是ハ有栖川江御

縁組ニモ可相成様子ニ御座候、夫ニ付為御供懇意之モ

ノ罷登候得共引込居、出勤之時ヲ得、其藩之模様可知

シ云々(此ニケ條ハ四月筆記カ)

八六 蓑田傳兵衛ヨリ黒田嘉右衛門へ照會書

筑前滞在

黒田嘉右衛門殿 蓑田傳兵衛

要答

去ル廿一日付之御問合昨廿六日相達、久留米藩之儀、

追々都合好運立、先度(鳥津久光)中將様被 仰遣候通、不日幽

囚解立候様決議相成、有馬侯(慶親、久留米藩志)より之御返翰相渡、星山

矢之助奉持、急ニて被差上、委細被申越趣致承知、御

返翰則 御前へ差上、且御方御問合之趣も委曲申上置

候、就ては爰許より別段御返書は不被遣、慥ニ御請取

相成、此御方より被仰遣候趣、御取用相成候段、別て

忝被 思召候段、(忝ニ有馬)中務大輔様御方へ、御自分より宜敷

被申上置、可然と之御事候間、其辺被執計ニて可有之

候、星山儀も御用済、明廿八日出立被差帰候、扱對藩之儀も先平穩之向ニ相成、諸藩より不入込候ても宜キ向之段、先々御同慶ニ御座候、三條公より筑公御逢之義、御願之由にて被致周旋候由、是迄彼是と御尽力御大儀千万御座候、おのつから結局之上は早々帰郷、細々被申上にて可有之候、五卿方御守衛交代之儀も、明廿八日爰許より被差立候賦、星山義も一緒ニ出立相成候付、同人ニは被残置、其外守衛人数之儀、其許交代之義は、何も都合好申談可被取計候、此旨御返答旁申越候、以上、

三月廿七日

蓑田傳兵衛

黒田嘉右衛門殿

八七 幕吏小林甚六郎博多港へ乗入云々ノ報告

今日於途中宰府より之飛脚人江行逢候処、先日幕役博多江乗入、既ニ宰府江可相迫模様にて、警衛之面々別て心配之由相聞得候、依之我々共初諸郷人数ニ至迄、銘々輕装単騎にて、爰許より昼夜倍道兼行之賦、左候て陪卒・小荷駄之儀は引残シ、朝倉喜左衛門・大脇正

之助令支配、跡より通行之手配いたし置候、尚宰府表之形勢は、追て彼許到着之上、委細御問合ニ可及候得共、先右之形行各方迄早々申越候間、御家老衆江被遂披露候儀、何分宜御取計可給候、已上、

三月晦日

川畑伊右衛門

黒田嘉右衛門

阿久根より

御軍役奉行衆

御軍賦役衆

(番号八六・八七は黒田文紀氏所蔵本にて校訂)

八八 幕吏小林甚六郎五卿受取ノ為メ来博人名

覚

御目附

小林甚六郎(致意)

上下拾九人

此御方様御忝人

御徒目附

未タ御着不相成、

高橋平之丞

追て御着相成候

上下五人

哉、其辺不相分、

同

前田右太郎

上下五人

同

大原道藏

上下五人

御小人目付

神谷助右衛門

青木辨次郎

關口酉之助

伊藤政吉

小金井幸十郎

大嶋寅雄

上下九人

右之内咄人いまた着無之、

別手組改方

石川清橋

別手組

熱田鐘太郎

伊藤仙一郎

内藤劔次郎

天野鑑四郎

鈴木岩五郎

松居左馬助

五十幡豊次郎

佐野美太郎

前田鐘太郎

金森勝藏

上下拾五人

八九 軍政拡張ニ就キ軍役掛上申書

方今非常之世態、第一武威弘張、皇國之維持之御為心懸專要ニ候処、猶太平之余習ニ相泥、武門之面々、若年ヨリ筆算而已ヲ事トイタシ候テハ、必軟弱相成、往々武用ニ難相立候間、今般深御趣意ヲ以、海陸兩軍被召立候付、当分御役並書役、小役人相勤候者モ、或拾五歳以下ハ都テ陸軍操練所へ別勤被仰付、左候テ被下方ハ、是迄通被成下候間、各其向々ヨリ式拾五歳以下之者相勤候有無之訳、聊無間違様取調、来十五日限陸軍方へ可申出旨、被仰度候、

但奥御小姓之儀ハ、二日置一日 御殿勤ニテ、非番

兩日ハ、海陸軍方へ罷出候様、被仰渡置候ニ付、

別段取調申出ニ及間敷候旨、被仰渡度候、

一 勤方無之者モ式拾五歳以下ハ勿論、年輩相長候者タリ

トモ、懇望之向ハ、銘々海陸軍方へ自分稽古罷出候儀、

可為勝手次第被仰渡度候、

一 諸向勤方之儀、以來ハ式拾五六歳以上練兵之内ヨリ可

被仰付候間、向々へ其通可相心得被仰渡度、(以下脱カ)

一 諸向奉行頭人ヨリ書役・小役人等ニ至リ、近来過分相

嵩居候付、追々精詰減少被仰付、海陸軍方盛大可被相

成御趣意之事候間、諸向少人数ニテ繰合、跡欠等有之

節ハ、代不申出様可相心得旨被仰渡度候、(以下欠失)

九〇 陸海軍ニ罹ル事務遅緩無キ様達書

方今不容易世態ニ押移、乱階既ニ相開、何時異変到来

モ難測形勢ニ候間、軍政之儀當時第一之急務ニテ、片

時モ等閑難召置事候条、諸向各其心得ハ有之等候得共、

猶又篤卜時世致識察、海陸軍事ニ致関係候御用筋ハ聊

無緩怠可致取扱候、勿論掛御用人別勤等ニテ、出席無

之節ハ、御用人・御勝手方掛同席ヨリ、速ニ諸首尾相遂
(以下脱カ)
候様、

九一 佐々木寛蔵ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

昨鳥は參館仕得寛話、難有奉存候、扱被仰聞候筑藩名

前書呈上仕候、御落手可被下候、且其節御噂有之候崎

陽表御聞役之御方御名前、并ニ御屋敷之御処とも承り

置度候間、何卒乍御厄介御書付被下度奉希上候、先は

右乍略書、早々頓首拜、

季春念八

佐々木寛蔵

嘉右衛門様

書付添

九二 月形洗蔵・野村望東尼詩歌

十年踪跡似長沙 辛苦何嫌報国家 君見神州勝漢上

腰間秋水浪生華

(福岡藩士)

月形詳再拜

正

黒田大人に国の事ともをねきまゐらすとて

はや人のさつまの瀉にあらへかし

心つくしの浦のあくたを

(本)
望東「野村」

国の事ともきこへまゐらせける時に

わかおもふ心つくしのうら瀉を

あらはに月のてらすよもかな

(福岡藩士野村貞實妻茂登)
望東

九三 慶應三卯三月薩藩ヨリ陽明殿江差出候書

付写(偽文)

情世上ノ形勢ヲ考フルニ、台命元ヨリ順テ 朝命モ

又行ハレズ、衰タルコト実ニ歎息ノ至リ也、其故如何

ト思フニ、恐多クモ

上神明ノ御製御誓

うたてやむ物ならなくに唐衣

いかてか仇に目を重ぬへき

皆虚事トナリ、蒼生マテ加茂八幡行幸ハ能ク知ル所ニ

テ、又下へハ信ヲ御失ヒ給フニ当リ、御製

此はるは花の心も無りけり

我なすわさは国民のため

御失徳トナリ、又前年黄金五拾枚窮民御救ヒトシテ御

下ケニ相成、其御恩徳云フモ更ナリ、然ルニ今日ニ至

リ、米価ヲ初メ諸価騰下シ、国難ノ折柄、却テ何之御沙

汰無之次第、以前ニ齟齬シ、則是 朝命不行根元ナリ、

甲子變動前専ラ

朝憲盛ナル事、実ニ旭ノ昇ルカ如クニ至リ、

御聖徳海外ニ輝キ渡ルベキノ処、奸佞忘矯無実ナルカ

故ニ候、口言貌粧^{マツ}仄シトナリ、諸侯始メ蒼生ニ至ル迄、

無勿体モ真之尊王更ニナシ、

手はつけど目は上につく蛙かな

是全雲霧覆フ所、補佐ノ佞臣奸謀ニ寄ル所ナリ、当職

親王公卿共失職、幕姦ト相共ニ暴政ヲ御執行、終ニ

ハ

上憤然タルニ、真ノ

朝敵出来スヘシ、是下々ノ通情ナリ、無程 幕府共ニ

朝憲斃レ、往昔ノ應仁ノ如キニ増リ、必ス慨歎血涙大

歎ナランヤ、抑モ外患両争ノ末トナル

朝廷御基本興立、即今ノ大急務ト為シ、

朝廷ハ日本之根軸修理、名義ヲ明ニシ、是非曲直邪正ヲ正シテ、順テ万機ノ所置ヲ施シ給ハ、風ニ随フ草ノ如ク、

勅諭行ハレ、叡旨海内ニ満溢、兄弟争止、私心ヲ除キ、早ク人植姦邪ヲ退クルノ良策、神速施行奉懇望コトナリ、是私之事ニアラズ、実ニ公事ナリ、一身潔白己レヲ立ツルニモ非ズ、唯名利ヲ忘レ、国家之大事ニ抛身シ給フベシ、古歌ニ

山里のすへに流るゝいもからも

身を捨てゝこそ浮む瀬もあれ

有志之宮公卿方、一日ノ優安傍觀ニ日ヲ送り給ハ、不遠上下共瓦解トナラン、此国難ヲ思ヒ家ヲ顧ルノ時ニアラズ、丹誠ヲ抽尽力シ給ヒ、正義ノ大諸侯執行シテ、頓ニ

闕下ヲ払ヒ給へ、浄メ給ヘカシト、敬白、

九四 道島家記抄(小笠原使者云々)

昨廿八日八ツ後、小笠原圖書頭使者参リ候由ニ候、何事ナラント皆々申入候処、慥ニハ不相分候得共、備後

ノ一条事静リ候得共、万一其余党、此方へ差越候義モ不計候間、参リ候ハ、召捕、又打取候様九州諸侯方へ為御知ノ書状之由、五月朔日承リ候事、

九五 天下ノ形勢ニ就テ藩内布達

近年皇国日々不容易形勢成行候処、此節

先帝崩御、

新帝御幼年ノ事ト相成、実ニ御嘆息ノ次第ニ候、御当家ノ儀、飽迄 天朝ノ御高恩ヲ被為蒙候上ハ、臣子ノ御情合御徒居難被遊儀ニ付、太守様へ御相談ノ上、中将様

天氣御伺、且後來ノ御策被為建候処、御尽力ノ思召ラ以、今般御上京被遊候、就テハ依時機、太守様ニモ御上京可被為在筈候間、御領国中一同其意ヲ令体任(認カ)、各更ニ其職掌ヲ勉勵候テ、内外ノ手当猶十分行届候様、可取計旨被仰出候、此旨向々へ不洩様致通達、諸郷・私領へモ可申渡候、

九六 軍役知行高制限布達

諸郷

一 自作高五十石

一 高百石限

御城下

一 小番・新番・御小姓与持高貳百石限

一 大河平孫八郎儀、藩鎮ノ任被仰付置候付、持高五百石限

限

一 寄合並并無格ノ面々持高五百石限

一 一所持格并寄合迄持高千石限

但持切在ノ儀、不依多少是迄ノ通、

一 御一門方并一所持ノ儀ハ、持高是迄ノ通

但給地高嵩求候儀不相成候、

一 大過上高壳払就テハ、高場所善悪モ有之筈候へ共、忝

石貳百貫文限

但御城下百石以上・諸郷三十石以上持高有之者、此

節過上高相片付迄ノ間、持高相求ノ儀差留候、

高割ニ付御軍定御城下諸士左ノ通

一 持高五十石以上ニ付、一人分自筒

但貳十石以上御切米・御扶持米被下置候面々同断、

一 持高百石以上ニ付、三人分自筒

但御役料高同断、

一 持高百五十石以上ニ付、貳人分自筒・大砲挽馬壹疋

但御役料同断、

一 持高貳百石以上ニ付、自筒三人分・軍馬壹疋

但御役料高同断、

一 寄合以上

但貳百石以下ノ面々ハ、諸士同様ノ賦、

一 持高貳百石以上ニ付、三人分自筒・軍馬壹疋

但軍馬立候ハ、大砲挽馬ニ不及候へ共、三百石以上

ノ者、大砲挽馬壹疋、御役料高ノ差別有之、

一 右ニ付五十石嵩ノ節ハ、挽馬壹疋相嵩、貳百石嵩ノ節

ハ、軍馬一疋相嵩候儀、別条ノ賦タルヘシ、

但自筒ノ儀ハ、都テ西洋製施条銃一所持切在有之面

々迄、

一 高百石ニ付、三人分自筒

但領地高・買入高御役料ニハ不拘同断、

右賦ノ外

一 高五百石ニ付、軍馬壹疋ツ、

右同

一 高貳千石ニ付、大砲一挺ツ、

但四斤半以上ノ加農、又ハ拾式擲ノ山忽砲以上、

一高砲万六千石以上ニ付、大砲一座

但八挺一座ノ賦、

一右大砲・馬ノ儀ハ、家中高ノ内ニテ主人ヨリ可申付事

一銃砲共一挺ニ付彈藥式百発分ツ、用意候事

右ニ付御軍役定諸郷左ノ通

一自作高式十石以上ニ付、西洋製施条銃一挺

但要具相添、

一右同三十石以上ニ付、大砲挽馬一疋

一右同四十石以上ニ付、軍馬一疋

一持高五十石以上ニ付、西洋製施条銃一挺

但要具相添、

一右同七十石以上ニ付、大砲挽馬一疋

一右同七十石以上ニ付、大砲挽馬一疋

三月

圖書「島津」

右衛門「桂」

伊勢「島津」

龍衛「川上」

刑部「新納」

九七 柴田日向守等建言（内外ノ事情及ヒ薩長ノ関

係）

魯西亞（オーストリア）
字瀧生（オーストリア）
魯西亞（オーストリア）
字瀧生（オーストリア）

第那瑪爾加（ポルトガル）
波爾杜瓦爾

右ノ五ヶ国ヘ航海小説附録

方今歐羅巴洲ニテ英吉利・佛朗西・魯西亞・字瀧生・
奧々所旬禮織ヲ五強国ト相唱、其他意大利・和蘭・第
那瑪爾加等モ皆文明ノ制度ニテ、相互ニ條約ヲ結ヒ、信
義ヲ以相交リ居申候、然共其政府ノ内情ハ、互ニ衷心
ヲ以テシ、若シ交際ノ間ニ條約ニ背キ、信義ヲ失ヒ候
国アラハ、猶予ナク直ニ討伐シテ、其国ヲ奪ハントノ
意ヲ挾ミ、中ニモ英吉利・佛朗西・魯西亞ハ其志最モ
甚シク、佛朗西政府ニテハ、英ヲ込サントシ、英国ノ
過ヲ見出シ、罪ニセントノ企ヲナシ、英国カ佛朗西ニ
於テモ、又同様ナリ、或ハ魯西亞及ヒ日本・支那ヲ取
ラント欲スルノ内情ハ、又無キニアラス、然ルニ一度
條約ヲ取替シタル上ハ、罪ナキニ其国ヲ討伐スルコト
能ハス、譬ヘハ魯西亞ニテモ、英吉利ニテモ、私ニ日
本ヲ討ントスルトキハ、佛朗西・亞米利加等ノ国々日

本ニ応援シテ、其妄挙ヲ責メ正シ申候、故ニ各国ト交
ヲ結ニハ、國ノ富強大小ニ不拘、専ラ信義ヲ失ハサル
ヲ以主トシ、即チ只今波爾杜瓦爾ハ、歐羅巴中第一ノ
貧国ニシテ、軍備モ調ハサル国ナレトモ、条約ニ背カ
ス、交ルニ信義ヲ以テスルカ故ニ、英、佛等ノ如キ強國
ノ近方ニ在ルト雖モ、手ヲ出スコト不能、近来合衆國
ハ、英吉利ニ使節ヲ出シ、其趣意ハ亜米利加南北戰ノ
時、南兵ハ全ク謀反シ、亜米利加大統領ノ為ニハ大賊
タルコトモ、世ノ人普ク知ル処ナリ、英吉利ヨリ南方
ニ軍艦ヲ出シタルコトニツキ、交際國ノ為スヘキ事ニ
アラス、依テ亜國ヨリ其罪ヲ正シ、莫大ノ科料金ヲ不
出ニ於テハ、即刻英國ヲ討伐スヘキ旨ヲ以テ論シ候処、
英國ハ兎角ニ遁レントシテ、暫時ハ彼是トシテ、挨拶
モナサ、リシカトモ、終ニハ科料ヲ出スノ談判ニ相決
シ候由、科料金ノ員數ハ失念仕候、英國強暴ト雖モ理
ニ戻リ、条理ニ背キ候得ハ、如斯コトニ御座候、故ニ
各国交際ヲ結ヒ、一度信義ヲ失フ時ハ、一日モ其國ヲ
難保、然ルニ日本政府ノ外国ヘ対シ、条約ニ違ヒ信義
ヲ失フコト度々ニテ、動モスレハ永続不致、誠ニ薄氷
ヲ渉ル姿トナリタリト、一般ノ風説ニ御座候^(実)「事衷」

一 佛國^(Paris)ハリス府滯留中、同所ノ学生等ト相交リ談話ノ末、
歐羅巴ニ於テ、日本ノ風分如何候哉ト相尋候処、右ノ
者共申スニハ、日本人カ外國人ト交ル事ヲ喜ハス、其
訳ハ歐羅巴ノ威勢ヲ怖レ交ヲナス故、時々日本國民事
ヲ謀リ、鎖港ノ説ヲ唱ヘ候者多シ、且政府ニテモ屢々
条約ニ背キ、虚ヲ以テ外國人ニ交ルカ故、世界相当ノ
交ヲ為スコト能ハス、然レトモ未日本ヘ兵ヲ向ケサル
ハ、日本國ハ今ヨリ二百年前、彼ノ波爾杜瓦爾人九州
ニ在リテ、乱妨シタル事ヨリ打払、其後鎖國シ、且和
蘭人・支那人ノミニ、長崎一所ニ限り通商ヲ許シタル
ノミ、嘉永年中亜米利加人渡海シテ、諸歐羅巴ト条約
ヲ結ヒタルコト日淺ク、故ニ未タ宇内ノ形勢ヲ知ラス、
所謂井中ノ蛙ナリ、方今歐洲ニテ日本討伐ノ説モアレ
トモ、各国ノ人民未タ日本ノ開ケサルカ故ニ如此ナリ、
夫ヲ討テハ不仁ナリ、不義ナリト寛恕シ、又ハ上下ノ
議論一致セス、若シ歐羅巴各国ノ内、日本政府ノ為ス
カ如キ所置アルトキハ、決シテ猶予セス、忽ニ各国申
合セ討伐スヘシ、近来英國ノミニストル日本討伐ノ儀
ヲ各国ニ布告シタリ、然レトモ未タ諸國共ニ決定ノ返
詞ナク、多分ハ日本討伐ノコトハ、此涯押移ヘキ哉ノ

風説ナレトモ、事情ケ様ノ場合ニ至リタレハ、日本一途ニ富国強兵ノ政ナク、各国トノ交ハ信義ヲ以テセス、今通条約ニ違フコト多キトキハ、実ニ危キコトナリ、一亜国ノシヨリソリントト云者、巴理府ニテ逢候時ニ、同人カ話ニ、英・佛両国ハ頻ニ日本ヲ奪ハンコトヲ希望ス、故ニ薩州ハ幕府ニ背キ、内々事ヲ計リ、討幕ノ企ヲ為サン事ヲ、英国ニテ能ク承知スト雖モ、是ヲ不知体ニテ薩州人ト交ヲナシ、薩州人ハ英国ニ至リ、機械又ハ軍艦ヲ求メ、或ハ學術伝習ノ生徒ヲ出シタルヲ、英国ニ於テハ懇切ニ取扱置キ候、是ヲ日本政府ニハ何ノ沙汰モ不致、亦幕府ニモ懇切ノ姿ニテ相交リ、此節於横濱海軍ノ伝習ヲ御頼相成候ヲ、英・佛争フテ伝習センコトヲ望候、人ニ物ヲ授クルモ、是全ク英・佛ハ日本ヲ懐ケ、終ニハ吾モノニセントノ策謀ナリ、又幕府ト薩州トノ間ニ事起タラハ、其勝敗ノ模様ニヨリテ、必ス勝利アルヘキ方ニ応スヘシト議シ居レリ申居候、(下脱カ)又長州ハ度々攘夷ハ致シタレトモ、内実ノ処ハ幕府ト薩州ヲ倒シ、日本政府ニ代ラントノ謀ヲ廻ラシ、密ニ學術修行ノ者ヲ英・佛ノ兩國ニ遣ハシ置キ、或ハ亜国ヘモ幕府ノ罪ヲ数ヘ、薩州ノ罪ヲ揚ケ、此ニヲ退ケサ

レハ、朝廷カ安堵セサル等ヲ申送リタルコトモ有之候(悉)
(二岩下方平親話記參看)

一亜国ノビトルト云者ニ出会ヒ、其者ノ話ニハ、元來日本人ハ其性質鋭敏ニシテ、物毎ニ合点スルコト速ナリ、又国民ハ外国人ト貿易スルコトヲ好メトモ、政府ニテハ不好ト申ス向モアレトモ、内実ハ左ニ非ラス、凡ソ宇内ノ人民欲心ナキ者ハアラス、皆金銀ヲ得ンコトヲ欲スルモノナリ、然ルニ今貿易ヲ盛ニ為スコト能ハサルハ、日本人ノ内ニ鎖港ノ説ヲ唱ヘ、或ハ外国人ヲ殺害スル等ノ人氣ナルカ故ナリ、此事実ハ考モノナキ、全ク外国人ヲ惡ニ非ラス、幕府ニ怨ミアル者、政府ヨリ莫大ノ過料ヲ出サセ、終ニハ幕府疲弊シタルトキハ、日本中大小ノ諸大名ヲ指揮スルコト能ハサルニ至ラシムルノ謀ヲ、薩州・長州ノ両大名カ、互ニ政府ヲ惡ムノ情ニ起リタルモノナリ、又外国人ヲ嫌フノミニシテ、斯ク屢々外国人ヲ殺ス日本人ハ、世界中ノ最モ愚痴ナルモノナリ、其訳ハ幾千万人ノ外国人ヲ五人ヤ十人殺シタルモ、人種ノ尽クヘキカ、又外国人ハ勇氣ニ恐怖シテ、再ヒ日本ニ行カヌ様ニナスノ存念カ、イツレニセヨ皆可笑ノ事ナリ、ケ様ニ仕向ルモ、全ク薩州ト長

州トノ所為ニ出タリ、其証拠ハ薩州ハ生麥ニ於テ通行ノ英人ヲ殺シ、果ハ戦トナリ、長州ハ数度ニ及ヒ外国船ヲ砲撃シタル等ノコトナリ、

一又ノ話ニ、日本大名ノ中ニモ、薩州ノ人ハ勇氣強ク、昔ヨリ勇名日本第一ト支那人モ申シタルコトナリ、然ルニ英国モ世界第一ノ勇國ト誇リ、外国モ皆恐レルニ、薩州海ニ乘入り戦争ニ及ヒタルモ、英国ハ敗走シタルヲ以テ、虚名ナラサリシトノ評判ナリ、此戦ハ英国ノ武名ヲ落シタリトテ、英国モ重ネテ數十艘ヲ仕立、伐破ラント企アリシニ、和睦ヲナシタルニハ、英国人民ノ大ニ喜ヒタル処ナリ、長州人ハ別段勇氣アル聞得モナキニ、果シテ数艘ノ各国軍艦攻カ、リシトキ、敗北シテ終ニ降伏シ、和ヲ結ヒタリ、故ニ日本中大名ノ内薩州人カ幕府ヲ攻ル場合ニモ至ラハ、心ノ用ヒ方手厚キコト肝要ナリト申候、

一 仏人シヤルト云者ノ話ニ、日本ハ氣候世界第一ニ勝レ、地味モ富饒ニシテ、諸産物モ多シ、然ルニ未タ富國強兵ノ場ニ至ラサルハ、全ク國政ノ宜シカラサル故ナリ、其政事ハ何ニヨラス御老中ノ一意ニ出テ、万民心服スルトセサルトニ関ラス所置ヲナス、又人ヲ用ルニ家格

ノミヲ以テシ、人材ヲ挙ルニ、一度人材ヲ挙ルト雖モ重役ノ意ニ背クトキハ、忽チ貶廢シテ再ヒ用ルコトナク、故ニ下ニ人材多ク、上ニ愚蒙ノ人多シ、是レ其國政ノ悪シキ故ナリ、外国人ニ接スルニモ、諸談判ノ時理セサルトキハ当座通レノ返答ニ及ヒ、後日再ヒ其末ヲ押尋ルトキハ、前日ノ説ト齟齬スルコト多ク、終ニ八國ノ大害トナルコト多シ、且亦古ヨリ貿易ナサ、ル國ナル故、貿易ニ暗ク、商人等只今目前ノ利ノミ争フテ、吾サヘ利徳アレハ、他人ノ難儀ハ思ハサル故、日本國許多ノ損失ニナリ、終ニハ我身ノ利徳モ未遂ヌ様ニ成行モ心附ス、今ノ西洋ニテハ、幼年ヨリ商売ノ學問ヲスルトモ、日本ニテハ町人ノ子弟ハ教ナク、只筆算手習ヲシテ、目前ノ利ヲ得ルコトヲ知ルノミナルハ、日本ニテハ商法ヲ賤ムルコト甚シク、商人カ學問ヲモセヌ事甚タ疎ナルカ故ニ、賤ムルノ理モアルヘケレトモ、士官ノ位ニアリテ其道ヲ失フニ比スレハ、商人ノ今日活計ニ困マス、他ノ助ヲ受ケサルヲ以テ見レハ、士官ニ劣ラサル事アリ、然レトモ日本ハ往古ヨリノ風習ニシテ、士ハ粗食シ粗服シテ其家貧乏、且其人少シク才力アリト雖モ、之レヲ足レリトシテ、商賈ヲ賤ム

ルモノ多シ、今ヤ日本ヲシテ富国強兵ニ至ラシメント欲セハ、産物ヲ開キ、巧者ニ商売ヲナスニアラサレハ能ハス、且商人ハ商学ヲ勸メ、政府ニテモ貿易者ヲ用ヒテ、諸産物ヲ輸出シテ金銀ヲ得、其金銀ヲ以テ武器ヲ備フルニ非ラサレハ、強兵タルコトヲ得ヘカラスト申候、

一英国ノニエートント云者ノ咄ニ、方今世界ノ挙動ヲ見ルニ、国ヲ治メ民ヲ愛スルニ求ル事ノ容易ナルハ、日本ニ勝タル国モナク、日本ハ數百年來太平打続キ、下ニアル者ヨリ高貴ノ信アル人ヲ見テ、賢愚ニ不拘シテ尊敬スルコト甚シク、故ニ高貴ノ人ハ臣下ハ勿論、町人百姓等ニ些少ノモノヲ賜ハル時ハ、親族朋友打寄りテ相祝シ、其品終身ノ至宝トス、如此ナルカ故、上ニアル人仁政ヲ施シ、公ノ政事ヲ為ス時ハ、國中忽チ一致シテ、国民其恩ヲ報セン事ヲ競フ様ニナル事ハ、掌ヲ反スカ如クナルヘシ、若シ歐羅巴ニテハ、日本ノ如ク平人ハ国帝ヲ仰キ見ルコトナク、宰相重役ノ通行ニモ人ヲ扨ヒ退クルコトヲナサハ、忽チ人氣沸騰シテ其国亡フヘシ、故ニ国帝ハ国民ヲ取扱フコト至テ親切ナリ、已ニ昨五年、佛朗西國中コロリ病流行ノ節、国帝

自ラ病院ニ至リ、懇ニ病者ノ安否ヲ尋ネ、或ハ貧院ニ入り、是ヲ訪フコトモ屢ナリ、是ヲ以テ其他ノ事推シテ知ルヘシ、英国モ亦女王自身其病院・貧院及ヒ老兵院ニ入りテ尋問スルコト、佛国ト同様ナリ、故ニ佛国ノ民ハ日々佛帝ノ恩沢ヲ仰キ、英国モ亦女王ノ恩ヲ報ヒンコトヲ忘ル、コトナシ、是蓋シ日本ト歐羅巴トハ、往古ヨリ政事風習ノ正実ナルニ依テナリト申候、

一巴理府滯留中、薩州ノ人石垣銳之介本名新納某ト云フ大身ノ由、此者今度參リ候者ノ内ノ重役ナリ、又同シク關研藏本名五代才介、此者ハ長崎ニテ親シク交リ候者ニテ、外一人ハ名前失念仕候、以上三人ハ役人ニテ致渡海居候、又此外二十六人モ皆薩州人ニテ都合十九人、又此外長州人九人、土州人三人英國ニ參リ居、何レモ本旅館ニ罷居、佛国等ノ近国ヘ何カ周旋ノ様子、皆両三度致面會談話ノ序ニ、何故ニ公然渡海候哉、忍シテ渡海ナレハ、公辺ヘ異心ヲ挾シテノコトナルヘケレトモ、ケ様公然渡海ノコトナレハ、定メシ國家ノ為メナルヘシト相尋候処、五代云ク、今日本ノ事情ハ、実ニ薄氷ノ如クニシテ、一日モ因循シ難シ、幕府モ速ニ奮発セラレ、日本國ヲ歐羅巴各國ト同様ニ相成ルヲ

冀望ス、然ルニ未タ其奮発ナキカ故、許多ノ金銀ヲ費シテ、斯ル万里ノ外迄我輩ヲ遣シタルナリト申候、然レハ全ク幕府カ因循ナルカ故、嘆息ノ余リ入費ヲ厭ハス罷越シタルハ、日本ノ為ニテ、則チ幕府ノ御為ナラスヤ、唯々日本ノ歐羅巴ニ劣ラサル様ニトノ寸忠ニシテ、敢テ私ノコトニ毛頭無之、又渡海ノ事ヲ幕府ニ相願候トモ、決テ御聞濟可相成勢ニ無之、故ニ差当リテ、日本ノ危急維持ノ為メ渡海セリト申候間、私共ヨリ申、久敷此地ニ遊ヒシ故、弁説モ昔ヨリ一步ヲ進メタリト、互ニ笑ヒ嘸シ致候、

一帰帆ノ節、船中乗組ノ歐羅巴人ノ説ニ、英国ヨリ薩州ニ心ヲ寄セ、薩州ト幕府トノ間ニ事起ランコトヲ希望致居候故ニ、龍動ニ於テハ薩州ヲ懇切ニ取扱候、幕府ノ使節ヨリモ〔志〕〔當時江戸ニ於テ専ラ唱ヘタリ〕丁寧ナリ、今年モ島津三郎二男龍動ニ渡海相成候由、依テ歐羅巴ノ風分ニモ、薩州ハ却テ幕府ニ勝リ権アリ、不遠日本國中ハ、薩州ノモノトナルヘシナトト唱候由、又英国カ幕府ト薩州トノ間ニ事起ルヲ希望シ居ルハ、幕府ヲ疲弊セシメ、終ニハ日本ノ諸港ヲ英国ノモノニセントノ底意ナリト、取々様々ノ噂ニ御座候、

右ノ外、諸人ノ説話開港ノ風分、日本ノ事ニ関ル事前文ト大同小異ニシテ、別ニ録上仕候程ノ事承リ不申候、以上、

慶應二年寅三月

外国奉行

柴田日向守〔剛也〕

同支配与頭

水品東太郎

同調役

富田達三

通弁英佛兩國

鹽田三郎

小花作之助

英佛蘭三國通弁

福地源一郎

九八 新納駿河書類

御墨付〔本〕〔奇彬公〕二拾二

〔志〕〔并右衛門〕
山田添書

拾三

一 (本)〔武兵衛〕
堅山上包
二 (本)〔周防、久光公旧帖〕
防公御手紙
三 (本)〔駿河久仰〕
久仰扣留

惣合四拾三紙

一
二
四通

右 御筆其外諸書付、御用濟則火中可相約事候得共、
為見合暫時ク扣留、退役ノ後及勤考候処、最早過去候
事件ニ付、深致格護置候テ可然、最モ稀成

御明君様御手跡ハ勿論、重キ御用ヲモ被仰付難有被召
仕、御厚恩ノ程モ見得候訳合ニ付、子孫其儀ヲ奉存、
猶忠義ヲモ相励候様ニト、如此取仕立致秘藏置候条、
急度有庵抹間敷者也、

慶應二年丙寅三月

葦洲久仰



九九 五卿家従等へ訓令

九九ノ一 (本)〔三月二十五日〕 (本)〔醫衛人数ノ色〕
前略、五卿ハ翌日、更ニ肥後直次郎ヲシテ帰藩セシメ、
以テ、此変ヲ通セシメタリ、又三月二十六日ニ至リ、家
従等ニ訓諭シテ大ニ決スル所アリ、其内諭ニ曰ク、
此度幕府目付渡海之由ニ付テハ、其末若シ東帰ヲ促シ、

或ハ五藩分離ヲ謀リ候程モ難計候得共、前年長州ニ下
向之次第、固ヨリ一身之浮沈ヲ顧候訳ニ無之、偏ニ天
下之興復ヲ謀リ、心事不得已ヨリ一時權道ニ処シ候処、
時勢交遷、今日ニ到候テハ、宿志尽ク沮廢シ、多年尊
王攘夷之志一義其効無之、因テハ前年之次第モ、全一
身之事ト相成候、上ハ奉対天朝、下ハ万民ニ向ヒ恐懼
慚愧之至ニ不堪、恋闕之情ニ於テハ申迄モ無之候得共、
今更何之面目有之、敢テ東帰致シ候哉、万々其存念無
之、殊ニ分離之儀ニ到リ候テハ、尤モ其謂無之、徒ニ
余命ヲ保候存念ニ候得ハ、進退可致候得共、兼々申聞
置候次第ニ候上ハ、若右之両条相薄リ候時ハ、我等ハ
不及申、孰モ夫迄ト相心得、決テ不覚悟無之、只誠心
ヲ千載二期シ、從容指揮相待可申事(東久世通禧日記)

九九ノ二
五卿ノ身上ハ愈迫切スルニ至レリ、然レドモ流石ハ尋常
執袴ノ人ニ非ズ、断然意ヲ決シテ、左ノ如ク筑前藩ニ答
ヘタリ(五卿送迎始末 東久世通禧日記
戊辰始末 甲東叢紙 三峯叢紙)

五卿方御渡海相成候儀ハ、美濃守様為天下厚御尽力
被為在、薩州之義御周旋有之候義ニテ、御進退之事
ニ付テハ、御渡海已前美濃守様御約定モ候得ハ、今

更別段不被申入候、且薩藩周旋之役ニ西郷吉之助、
吉井幸助等委細事夷相弁居候ニ付、御聞合被下度事、

一〇〇 薩藩申立廉書

一 御再討被 仰出候事、

此廉一昨年尾州老公御解兵相成、其後

御上洛有之候様從

天朝被 仰進候処御拒、其後

御進發御再討被 仰出、

天朝御趣意ト齟齬御不都合之事、

一大膳並三條實美以下江戸江召下之事、

此廉 天朝思召ニ無之処、右様被 仰出御不都合之事、

一 御進發ニ付、御上洛 天機御窺之節、

勅旨之趣直ニ 大樹公江御沙汰之処、 大樹公

玉座御下り

叡旨御書付御押返ニ相成、御不都合之事、

一 攝海江異船渡來之節、諸侯ヲ召シ 天朝思召之処、

一 橋殿御拒ニ相成、 天朝思召ヲ御押付、御不都合之

事、

一 昨年九月廿七日期限、直ニ御旗被進候儀、

天朝之思召相違御不都合之事、

一 条約 勅許之事、

此廉攘夷ハ、積年之 叡念ニ候処、 朝廷御押付、

勅許御不都合之事、

一 兵庫開港之事、

此廉 天朝思召ニ無之趣之処、兵庫御応接之期限ニハ

可開ノ御書翰、外国江被遣御不都合之事、

一〇一 佛・英・米ノ三国へ書生ヲ出ス

佛へ

黒田了介〔清隆旧名〕

桐野英之丞

吉原彌次郎〔電傳〕

英へ

谷元兵右衛門〔道之旧名〕

堀清之丞〔世〕

野村一介

外ニ

慶応2年(1866)

平田 平六

米へ

木藤 市助

種子島敬輔

湯地治右衛門〔卷〕〔定基旧名〕

外二

江夏 蘇助

仁禮 平輔〔卷〕〔景範旧名〕

〔卷〕「外二児童語学稽古」

岩下長次郎方平長男

新納〔久中〕刑部長男

磯永彦助孫四郎五男

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編
慶應二年四月

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料」
(紙数六九枚)の記載あり〕

目録

- 藩政大改革分担御親達
- 桂右衛門ヨリ伊集院伊膳へ書翰
- 伊地知壮之丞ヨリ大久保一蔵へ書翰
- 今井榮ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰
- 〔伊地知壮之丞ヨリ大久保利通へ書翰〕
- 神代勝兵衛ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰
- 水野溪雲齋ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

- 〔伊地知壮之丞ヨリ大久保利通へ書翰〕
- 五卿警衛ノ為メ重ネテ派出兵ヲ命ス
- 多田莊蔵ヨリ黒田・大脇・染川へ書翰
- 再討出兵謝絶上申書
- 神代勝兵衛ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰
- 三宅左近ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰
- 大久保一蔵ヨリ島津伊勢外二人へ照会
- 在太宰府大山格之助ヨリ同姓仲兵衛へ書翰
- 伏水大黒寺へ奉納書之写
- 桂右衛門ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰
- 小寺與兵衛ヨリ大脇彌五右衛門へ書翰
- 小松帯刀ヨリ桂右衛門へ書翰
- 当時俗論ノ説鹿兒島ニテ
- 小松帯刀へ海軍掛ヲ命ス
- 諏訪敷馬履歴抄
- 平常軍服用フヘキ云々達書
- 〔巷説〕
- 中路権右衛門ヨリ内田・吉井へ書翰
- 道島家記抄民間ノ説交々
- 小松帯刀へ達書

黒田嘉右衛門ヨリ桂右衛門へ書翰

一〇二 藩政大改革分担御親達

一 海軍掛

集成館・開成所・他国修行等掛兼

小松(清應) 帶刀殿

一 陸軍掛

造士館・演武館・銃藥方・甲冑方・台場掛等兼

岩下(方平) 佐次右衛門殿

一 御勝手方掛

勸農方米穀金錢出納・琉球三島掛兼

桂(久西) 右衛門殿

一 外国掛

外国所置応接・西洋器械方・諸生遠航等掛兼

新納(久徳) 刑部殿

一定式掛

月番廻之取扱一切・寺社・玉里宗門方真了院様御方・

佐土原掛等兼

喜入(久西) 津殿

右之通被

仰付候、左候テ大事裁決并賞罰進退等之重事ハ、衆

議一決之上可致所置旨被

仰出候条、此旨表方江致通達、奥掛・御勝手方江モ

可相達候、

慶應二年寅四月朔日

帶刀(采)「小松」
式部「川上」

(竹下盛徳雜留(東京大学所蔵)にて校訂)

島津(広兼) 伊勢殿

川上(久運) 馬殿

川上(久美) 式部殿

一〇三 桂右衛門ヨリ伊集院伊膳へ書翰

(太宰府五卿警衛交迭)

伊集院伊膳殿(久感) 桂 右衛門

其許警衛人数、此節更代被仰付、先日黒田嘉右衛門其

外被差立候付、追々到着之儀ト存候、右付肥後直次郎

ニハ御用有之罷帰、又々帰旅之筋申談、尚亦其方ヨリ

モ被申越趣有之候由ニテ、細々事情相達候、乍然モハ

ヤ直次郎ニモ交代之事情間、不被差出候、自然応接旁

之儀モ候ハ、初発ヨリ嘉右衛門關係イタシ居候付、
同人相弁候様可被申談候、尤此節幕府御目附出張ニ付
テハ、直様交代イタシ兼候儀モ可有之哉ニ存候間、其
篇之処ハ嘉右衛門等申談、可然様臨機之所置可有之候、
此段申越候、以上、

寅四月二日

桂 右衛門

伊集院伊膳殿

一〇四 伊地知壯之丞ヨリ大久保一蔵へ書翰

包紙

慶應二年三月四日

京

大坂

大久保一蔵様

伊地知壯之丞

尊贖御惠投忝拜見仕候、弥御清福奉賀祝候、小子安田
同船之賦ニテ、于今滞坂罷在候、もふは翔鳳丸廻着可
致と相待居候、每一雨桜も開初メ、当所ハ早落花近ク
罷成、昨日之上巳も雨計ニテ、(本)長蔵(余共)・清左衛門氏杯と
対棋日ヲ暮し申候、高作御示篇々感佩、乍失敬任来命
行間塗抹差上候、高諭ヲ穢シ候得共、每詩致次韻備御
一笑候、拙作之上ニ匆卒作出シ、命意不備心其俣差上

候、御暇ノ折ニは、別紙様之詩集御閑談、大ニ補益可
有之、為御見合書記候、(本)今和泉公子御下坂賑々敷罷成、
難有迷惑ニ御座候、先は御報申上度候、恐惶頓首、

上巳後一日

伊地知壯之丞

大久保一蔵様

研北

(大久保利謙氏所藏本にて校訂)

一〇五 今井榮ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

(江戸へ出立ニ就キ)

黒田嘉右衛門様

今井 榮

内用御直披

尚々時下御自愛專一ニ奉存候、平塚勇吉・松岡傳十
郎共、御伝言夫々申聞候処、厚く大慶、猶よろしく
申上候様申聞候、小生義も不計追々御懇意被下、千
万大慶此事ニ奉存候、此心同く、此志同く候へは、
仮異境ニ罷在候ても、朋友ニ相違も無之、まして同
く 皇国之地ニ罷在候へは、猶更之義ニテ、幾久敷
御交接被下候様、為国為民御自愛奉祈候、
一輪奉謹啓候、暖和之節ニ御座候処、弥御清適被成御

在留奉敬賀候、扱先日は御懇書被下、御厚念之御書中
 忝奉存候、当地御逗留中ハ、追々御懇意被下、深く奉
 銘肝、乍去終始失敬而已相働、今更なから恐懼之至、
 真平御海恕可被下候、御同館様方江も、厚宜敷御致声
 奉希候、然ハ弊藩亡命人御周旋被下候一条、早速御取
 扱被下、水丹(本野丹後)・真外(真木外記)兩人江屢被及御懇説候処、格別感
 戴頗涕泣ニ及候程ニ御座候段、右兩人実情之趣、委曲
 被仰聞謹承仕候、扱夫ニ付、唐突本人ともより難申出事
 情も有之候へハ、当方より公然召返之命を示候様との
 御事、都て謹承仕候、不取敢其筋へ申達置候事ニ御座
 候、然処此節俄ニ 幕命を以、別ニ難渋之次第被仰出、
 右取繕等其外、甚以彼是取紛居、何分右幽閉一条ニ取掛
 り候事ニも難相成、一体之評議ニおいてハ、日外御噂申
 候ニ、少しも變動仕候義は無之候得共、重役とも右之方
 ニ取込、何分未手廻り兼候趣ニ相聞候、少し折合候へ
 ハ、早々右一条ニ手を下し可申趣ニ御座候、扱夫ニ付、
 小生義も俄ニ江戸出府被申付、今六日爰元出立仕候、
 依之此後御応接被下候義ハ、柘植傳八郎宰府出役罷在
 候へハ、同人江御引合被成下候様仕度、勿論同人江も
 其筋より申聞置候事ニ御座候、右は追々延引ニも相成、

先生尊慮之程も如何と、右之趣得貴意候、宜敷御聞得
 可被下候、此段草々申上留候、恐惶謹言、

四月六日 今井 榮

黒田先生

(黒田文紀氏所蔵本にて校訂)

一〇六 〔伊地知壯之丞ヨリ大久保利通へ書翰〕

慶応二年四月十日

尚々、時分柄御自愛専用奉存候、已上、
 一輪呈左右候、梅天ニ向候得共、弥御安壯御詰、珍重
 不斜奉祝候、乍恐 御而殿様増御機嫌克被遊御座、御
 同慶奉存候、随テ劣弟儀無異区々奉職罷過候間、乍余
 事御降慮可被下候、御地形勢当分如何ニ御座候哉、長
 州御処置于今決着無之由ニ承及候、此節幕監察宰府へ
 六節(列之云)着、五卿方御帰京之都合ニ相成候様様之由、他分ハ五
 卿ヲ以、長ヲ為致納得、大樹引取ニ相成候半欵ト申事
 ニ御座候、此内ハ大坂へ為御聞合、御滞在之段承り候、
 何分面白キ世ノ中ニ罷成候、此方モ当分人氣モ穩ニテ、
 少々物議共ハ有之向ニ被伺候得共、差テ之事ニ無御座
 候、攝大夫ハ私領へ当分被差越候、此内ヨリ之存慮之事
(朱一)〔書入〕〔攝連〕
(朱二)〔辭懸〕

共ニ無之哉ト被察申候、〔本〕〔小松〕小大夫・西郷氏ニモ湯治ニテ、

未大会ハ無之候、何レ国是之論ヲ定メ、大本確立基礎
相据置度、是而已懇願ニ御座候、開關已還非常之時節、

素ヨリ尋常定格ヲ以難論者候得共、根アツテ之枝葉、
体アツテ之用ニ候得ハ、早ク国体据置度者ニ御座候、

〔本〕〔刑部〕〔才助〕新納氏・五代等帰、朝新説等承リ候、欧内へベルギリト
中国有之本〔本〕、国政モ調候国柄、此節通信并ニ商社入

仮約定有之、於桂氏宅御家老・御側役・御勝手方會議
議論段々相立候得共、思召ヲ以御一決、来ル八月比表

通使節被差立筈御座候、是ハ劣弟共之欲スル処ニテ、
愉快ニ御座候、山川ニ紡績機関取立之筈、〔本〕〔初メノ予定〕広大御手相

付、一割余之利足ヲ以ベルギリ国之金ヲ借り、諸機関
モ追々御取建之賦ニ御座候、算面通参リ候者ハ無之、

大金ニ一割余之利足、些ト込入申候、迎モ追付候様為
運申儀無覚束、昨年ヨリ之異人商法等ヲ以、致比較候

テモ、甚不案ニ御座候、乍去今度仮約定被致候事故、
信ヲ失候テハ、字内ニ信義不立、利否ハ置十分ハリ込

度劣弟持論ハ候へハ信シ結付、商法ハ長崎辺是迄之仕
掛ニイタシ、〔本〕〔朝鮮其外一〕早ク三韓諸所へ手ヲ伸度含ニ候得共、最

早此ニ至リ候テハ、此取組ニ尽力之外無之、開国ハ可

賀事候得共、現実潤ニ相成儀六ヶ敷、人間万事利口通

ニハ参兼申候、先ハ時下御見舞旁如此御座候、頓首再
拜、

寅四月十日

伊地知壯之丞

大久保一蔵様

人々御中

二白、先比ハ御願申上置候本詰、過分ニ御下シ被下、
忝致落掌候、穴賢、

一〇七 神代勝兵衛ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

黒田嘉右衛門様

神代勝兵衛

雲翰拝誦仕候、〔本〕〔太宰府〕過日ハ御宿所江推参仕、大ニ御妨申上

候、然ハ来ル十七日頃ニハ、御帰国被為在候義ニ御
決邸相成候付、〔定九〕此節對州江御渡海之儀ニ付、御同藩様

御一同御出福被成候付、先日御談判申上候末、美濃守
様御逢之御都合御承知被成度、態と被示下候趣委曲奉

拜承候、早速其筋江申達、否之義明日御通達可申上候、
先ハ草々御報迄如此御座候、頓首、

四月十三日

神代拝

黒田先生

貴報

一〇八 水野溪雲齋ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

黒田嘉右衛門様 水野溪雲齋

内用 御親拆

極密得貴意申候、先時五介共より弊藩之情実御内話申上候通、実ニ危急之秋、臣子之分所不安ニ御座候得共、御高議通無抛僕等苦心仕候処御座候、併シ亦有抛御尽力之御手段も可被為在候御事所奉依頼ニ御座候、仍従是近方之米藩郷士中へ、同志之者も居住罷在候義ニ付、急速微行候様申遣候筈ニ仕置申候間、右何卒内応之有志者も、城下ニ多々有之趣ニ相聞候ニ付、可得良策と奉存、明晩迄ニは呼寄出来可申、御滞博中篤と相謀置可申候間、内々御含被成下置度奉存候、仍内密如此御座候、頓首、

四月十三日

〔番号一〇七・一〇八黒田文紀氏所蔵本にて校訂〕

一〇九〔伊地知壯之丞ヨリ大久保利通へ書翰〕

慶応二年四月十日

別紙商社器械取建方も、旁取馴候後ハ、利益も可備候得共、中々三四年内ニやり付申間敷、其間ノ雑用莫大之事、愉快ハ無此上事ニ候得共、現実運ノ処些込り入申候、借又英ミニストルコンシユルも、来ル十七日方より先ニ、弥廻船之模様にて、江戸佐州^{〔朱ニ岩下氏〕}応接も能出来、ミニストルも致了得、却御国之議論ニ感シ申候由、自^{〔朱ニ分平〕}ら岩下氏より御聞取可相成、仁禮・江夏^{〔朱ニ分平〕}一列ハ米国江向ひ出船相成申候、以上、

寅四月十日

壯之丞

一蔵様

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

一一〇 五卿警衛ノ為メ重ネテ派出兵ヲ命ス

(道島家記抄)

寅四月十四日

三拾人戦兵什長上村笑之丞・猪鹿倉源四郎^{〔佐直〕}……………
……ニテ、筑前五卿ノ衆方へ蒸気船ヨリ被遣、野戦砲

杯モ被遣候由、内実承候得ハ、公義御使番小林甚六郎トカイフモノ、五卿ヲ受取方ニ差越居、預リ国外ノ四ヶ國ハ、随分可相渡トノ事ニ候得共、於此御方ハ公幕ヨリ御墨付被仰渡候ハ、随分相渡候ヘトモ、御使番等差越、抑テ相請取トノ事ナラハ、相渡儀ハ相成間敷申募候由、公義ニモ五卿ノ衆ヲ帰郷サスル事ニテハ無之、関東ヘ列越ストノ評判ニテ候、夫故ノ事ナラントノ世評ニテ候、

一一一 多田莊藏ヨリ黒田・大脇・染川ヘ書翰

尚奉申上候、今日ハ此迄段々厚キ思召之有難ヲ、逐(平田遠)一大江初一統之者ヘ申越候、仕出シ等甚混雜仕候義ハ、露モ相違無御座候得共、病体ヲ以御託不申上候処、一応申訳御断迄ニ奉呈候、拜尔、

一輪呈上仕候、頃日於宰府ハ、恐多モ旅宿ヘ御枉駕被仰付候上、万端御懇ニ被仰付、有難仕合奉存候、陳ハ昨日夕景ニ及御着之御様子奉窺候、折柄(中岡侯太郎道正)大山彦太郎相見居候テ、暫猶予 御旅館同公仕候処、彦太郎御応接中トモ相伺、其上御草卧万々奉察上候テ、態ト御取次

衆迄申上置蒙御免候、今朝早々昇堂之心得御座候処、少々不快ニ有之、同藩金十郎ヘ相委罷在、其俣打過只今ニ至リ承候得ハ、是モ又持病之眩暈相発、石蔵方ニ平卧罷在候由、依テハ卯平名代旁トシテ罷出御窺奉申上、兩人共不快ト申候テハ恐多ト申、同人誠心ヨリ取繕候テ御託申上呉候由、如何共恐縮之仕合御座候、素ヨリ一ト通之義ニモ有之、頗ル快方御伺可奉万謝候間、何分今夕中之処ハ失敬御容恕可被仰付候、將近比輕微之至奉恥入候得共、龜菓一筥ツ、奉進呈之候、御莞留被仰付候ハ、本懐之至ニ奉存候、此段得芳慮度如此御座候、恐惶頓首、

四月十四日

多田莊藏

御次第不同御高許奉願

黒田嘉右衛門様

大脇彌五右衛門様

染川五郎左衛門様

侍史

一一二 再討出兵謝絶上申書

即今内外危急ノ時節、長防御所置ノ儀、其当否ニ依リ
 皇国ノ御興廢ニ拘リ候重事ニテ、実以テ容易ナラザル
 儀ニ候、追々御達ノ趣モ在セラレ、猶又来ル廿一日マ
 デニ大膳父子召呼バセラレ、若此度御請不仕候ハ、
 御討入相成候間、相心得テ御差図ヲ待チ候様、仰渡サ
 レ承知仕候、一昨年尾張前大納言殿總督トシテ差向ハ
 レ、伏罪ノ筋相立チ解兵マテ相成候処、却テ御譴責全
 様ノ御都合ニテ、就中神速御上洛ノ朝命御請無之ノミ
 ナラズ、却テ容易ナラザル企有之ヲ以テ、御再討仰出
 サレ、御進發相成リ、終ニ今日ニ立至リ、御討入時日
 御達相成候ヘドモ、天下ノ乱階ヲ開カセラレ候事実明
 白ニ御座候、朝廷ヨリ時世相応ノ御処置ヲ以テ、寛典
 ニ処セラレ候御達ノ御趣意モ在セラレ候処、御奉載無
 之由伝聞仕リ、天下ノ衆人物議喧々、恐懼ニ堪ヘザル
 次第ニ御座候、征伐ハ天下ノ重典国家ノ大事、後世青
 史ニ恥ザル名分大義判然ト相立チ、其罪ヲ鳴シ、令ヲ
 聞カズシテ響応イタシ候様ニ無之テハ、至当トハ申シ
 難候、尤モ凶器ハ妄リニ動スベカラズトノ大戒モ有之、
 当節天下ノ耳目相開ケ候ヘバ、無名ヲ以テ兵機ヲ作ス
 ベカラザルハ、顯然明著ナル訳ニ御座候、決シテ国人

不可討之ト謂フニ、却テ揆乱濟世ノ御職掌ニテ、動搖
 ヲ醸シ出サレ候場合ニ相当リ候、前条天理ニ相戻リ候
 戦討ハ、大義ニ於テ御受ケ仕リ難候、仮令出兵ノ命令
 承知仕候トモ、止ムヲ得ズ御断申上候間、御聞届下サ
 レ候様奉願候、京都重役共ヨリ申上候様申越候ニ付、
 此段申上候、以上(戊辰始末
甲東書紙)

御名代

(清生)
木場傳内

寅四月十四日

右之通於大坂閣老板倉候へ大久保一藏致持参候事、

一一三 神代勝兵衛ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

猶以播磨方下屋敷、一兩年手入等も不行届にて、大
 ニ取散シ居、失敬之段ハ宜御聞得被下候様、是又前
 以小子より申述置候様申聞候、以上、

昨夜は推参仕、大ニ御妨申上候、併緩々得御懇話、御
 厚情之預御教示、別て大慶奉存候、然は播磨御出会之
(巻一黒田)
 儀、早速申達候処、明日大工町下屋敷江八ツ時頃より
 御入来被下候ハ、寛々御出会可仕候付、宜小子より

御通達仕候様申聞候、勿論御同道之ため、小子儀御旅宿江罷出候含ニ御座候、此段乍略儀以書中御通達仕候、尚万縷明日拜顔可申上候、謹言、

四月十五日

神代拜

黒田仁兄

梧右

一一四 三宅左近ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

以手紙得御意、弥御安全奉珍賀候、然は先日來、兼て御酒等も被為送度御存念之処、御寸暇も無之、彼是不被為能其儀、最早明日より御帰国之旨、仍之甚乍龜末酒肴御送り被成度、此段宜可申伸旨ニ付、如斯御座候、以上、

四月十九日

三宅左近

黒田嘉右衛門様

(番号一一三・一四黒田文記氏所蔵本にて校訂)

一一五 大久保一蔵ヨリ島津伊勢外二人へ照会

(板倉閣老ト議論)

追々御届申上置候通差出置候処、書面何分板倉候ヨリ御沙汰可相成ト之事ニテ、相待居候得共、為何儀モ無御座候間、一昨十七日黒田彦左衛門差出候処、今朝御呼出可相違賦ニテ、御差出之書面御落手被成兼候間、致御返却候様差凶ニテ候旨、公用人ヨリ御書付相下り候由ニテ、同人持帰候付、再応差出候趣ニ候、押返シ為差出候処、既ニ御登城跡ニテ、公用人預置候ト之事ニテ、昨十八日私罷出候処、又々公用人ヨリ右書面之儀、既ニ御決儀ヲ以、御下ゲ相成候間、御落手被成兼候付、相請取候様承候得共、御落手被成兼候趣ニテハ、決テ御受取不申上候、就テハ今一往拜謁御願申上度段申入候処、色々故障申立、断ニ相成候得共、何分国家之急事ニ付、御逢被下候迄ハ、何時迄モ御待申上候段申入候処、左様ナラハ御逢被下ト之事候得共、段々拜謁人モ多ク御登城御定刻相成候迎御出相成候、明朝參候様御沙汰之由候得共、尚又昨晚致推參候処、是非今朝致參上呉ト候間、今朝罷出拜謁相調候、扱致言上候趣、御届之書面御落手難被成趣ニ候、御下ケ相成候御趣意、更ニ不被伺候、出兵之儀勝手ニイタシ候様ト之御趣意ニ候哉、又ハ言路ヲ御閉塞、下ヨリ言上

(朱)「出兵論」

不相成ト之御趣意ニ候哉、相伺候処、夫ハ尤之事ニ候、併先日モ篤ト嘶申入候通、只今御所置凡テ奏聞上、

(朱)〔長州罪状〕

勅許ヲ受今日之運ニ相成候、勿論是迄御糺明之廉ハ御了解相成候、最早本ニ帰順シ、御裁許ト相成候御受サヘ相成候得ハ、決テ御討入可相成詎ニ無之、若御受無之候得ハ、不得止御討入可相成御趣意ニ候、仍テ

天幕御一定之上、今日ニ立至リ候間、右書面之趣意ニテ御落手相成兼候、言路ヲ塞ク出兵勝手ニイタシ候趣之御趣意ニ無之段承候間、左様ニ候得ハ、尚又委曲可申上候、今日之処

天幕御一定ト難心得次第ハ、長州御征伐後神速御上洛之

朝命御受無之、機会ヲ被失候ヨリ今日ニ立至リ候事、

御趣意御奉戴無之第一ヶ条、加之大膳父子出府、五卿護送等之暴令御達相成候事、御奉戴無之第二ヶ条、

朝廷寛大之御趣意ヲ以、内外危迫之砌、長州御所置之儀至当ヲ失シ、禍乱ヲ生候テハ不相濟、大膳父子招呼之儀暫ク閑キ、何分早々致上洛候趣、重テ御沙汰相成候得共、終ニ御再討御進発ト被仰出、大軍ヲ引キ

御出張相成候事、

御趣意御奉戴無之第三ヶ条、御進発之序御上洛御參内相成候処、御内実寛大之御趣意ヲ以

御真翰被成下候御賦之処、推テ御拒ミ相成、大樹公江勅語ヲ以云々

御直達、尚 関白様御書ニテ被相渡候ヲ、終ニ関老ヨ

リ御返上相成候儀、上下顛倒不敬之大罪、

御趣意御奉戴無之第四ヶ条、御下坂之上軍勢ヲ張、諸侯江出兵之手当ヲ被仰渡候儀、

御趣意御奉戴無之第五ヶ条、昨九月廿一日長州御征伐勅許御申受之節ハ、折柄攝海江異人致来船、内外未曾有之御大事ニ付、賢侯ヲ被召、天下之公評ヲ以、御至当之御所置被成度 御趣意ニ候、

御評義相成候得共、是非御拒被成、強テ

勅許御申乞相成候条、御趣意御奉戴無之第六ヶ条ニ

御座候、右之通大本大義ヲ被失候付テハ、今日之御運

天幕御一定ト御沙汰承知仕候テモ、中々安心難仕、乍恐脅 朝廷、矯 勅詔ト申御断ニモ相当候間、御奉戴

之廉天下ニ顯レ候様無御座候テハ、当分ニテハ天下之人心ニオヒテ難安、全体此節差出候書面ニテ、御弁解不

相成候ハ、逐一申上候外無御座候、長州御所置ニ付、御失体ハ前条之通ニ付、其外条々無限候得共、御進發以來一事之御失体ヲ申上候得ハ、兵庫開港之一条、龍動府之約定通、御開之御書面御渡相成候ヨシ、朝廷ヨリ御書附顯然被差留候御趣ニ候処、反覆之次第ニテ、御重罪無此上儀ニ無御座哉、何分御反省被為在、言上之趣虚心ヲ以御聞取被下候様、冲モ御落手難被成趣ニテ御下ケ相成候共、決テ御請取難申上段申切候、再三天幕御一定ト申事致承知候得共、前意ニ候押一円動キ不申候、終ニ御落手ニハ難相成候得共、先ツ御預リ置被成候ト之趣ニテ、御返詞相成、致退出候、右今日迄之形行御届申上候、以上、

四月十九日

大久保一藏

島津伊勢様

岩下佐次右衛門様

町田内膳様

追テ、何分不容易大事件付、度々京都詰重役共江今一往及評議候様致承知候得共、不容易大事ニ候間、篤卜熟評ノ上致決定、言上仕候訳ニテ、仮令申聞候

テモ、相変候趣意無御座段申切り置候、条理サへ相立候得ハ、無二念御趣意致奉戴候儀当然之儀ニテ、主人オヒテ異儀無御座候得共、何分名分大義ニオヒテ致相違候テハ、天下後世之恥之次第、実ニ不得止御断申上候、趣意能々御了得相成候様ト之趣、再庇及言上候、決テ御呼出相成候模様ニ候間、誰様御名前ニテ御達欵モ不凶候得共、先日モ申上候通、板倉候ハ岩下様委曲御存知之事候間、御下坂被成候方可然欵ト奉存候、

(島津忠承氏所藏本にて校訂)

一一六 在太宰府大山格之助ヨリ同姓仲兵衛へ書

翰

挨拶略ス、扱昨日夕方、下之關ヨリ一人ノ早打来リ、既ニ長州モ手切ニ相及、肥前唐津小笠原長行、唐津世子圖書頭決死ニテ、先鋒昨十九日囷中不殘繰出相成候由、且又長州之内百八拾余脱走ニテ、代官士押取、本代官等不殘打果、同所へ追々相集候、昨日迄之処七百余人ニ相及候由、一昨日夕方ヨリ、下之關辺へ都テ家財等持運ヒ候、上下挙テ決死、追々焼払之賦、近々一揆事起ナラン、夫

ニ付五卿方之処モ、黑白近日ニ相決可申由、御目付モ
今程引取之向モ無之、未色々申上度儀モ御座候得共、
差急キ故荒々一左右迄、アラ／＼草卒ニ申上度如此御
座候、恐惶謹言、

寅四月廿日

大山格之助(綱島)

大山仲兵衛様

右格之助事、筑前五卿方守衛ニテ、先達テ一列ニテ
差越候事、

右ニ付四月廿九日、既ニ一昨日飛脚モ到来イタシ候
由、長州ヨリ申来候説ニ候由、長州ヨリ拾人計、備
後ノ内代官所へ押寄、急々攻立、代官ノ者被打取候
由、追々浪人共馳付、凡七百人金銀米穀等奪取、備
後ノ内一之島トイフ湊ヨリ船三艘ニ取乘リ、既ニ乘
出ントスル所ヲ、藝州出張之先手、蒸気舟ヨリ駆付、
惣テ打取、或ハ生捕、暫時ニ相片付候由、是ニ幕府
ノ勢ヒ、是日ハ長州モ些辟エキイタシタラントノ吟
味也、

一一七 伏水大黒寺へ奉納書之写

伏水の義士の墓に詣しに、折しも紅葉の
さかりなりしかは、よめる

尚明

ものゝふのあかきこゝろを紅葉葉に

とえは落そふ我なミたかな

下ノ關 白石正一郎(資風)

後れしとおもひしものをなからへて

いかに手向けむ言の葉もなし 敏

岡藩 小河彌右衛門

追悼

惜見雨前紅躑躅、不堪聞雨後残英、八九義人肝如鉄、
麒麟閣上最功名

文久壬戌四月廿三日

(志布志大慈寺)
大慈柏州題

一一八 桂右衛門ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

上包表

黒田嘉右衛門様 桂 右衛門

無異要詞

上包裏

寅四月廿六日
筑前宰府にて

自鹿府

尚々、湯治行の面々も、最早^{〔本〕}「小松ヲ云フ」帰府相成候間、別て氣

強奉存候、暫時ハ同席出勤人数も少く、甚心配いたし候得共、是より少々肩も打可申哉と存申候、其許^{〔末〕}「(休憩)通言」

も日数を経候得は、いろ／＼と御心配之事も相重り可申哉と想像仕居申候、何卒して、此度ハ可也之尾ても取れ候て、早目ニ御帰府之処、折角祈居申候、西郷杯の所存にてハ、とても破れ口ハ立申間敷との見当と被相聞申候、何分ニも掛て之事故、此筋とハどうも難申御座候、

再応之玉翰相達、忝令拜見候、時々御返詞も不申、甚失敬之至ニ御座候、薄暑之砌ニ候得共、弥御壮実御在務珍重奉存候、於爰許^{〔本〕}「(備主)云」雲上御機嫌克、御同慶御安心可被下候、小弟共ニも無異碌々在職罷在候間、是亦乍余事御放棄可被下候、当方其後不相替、至て穩之形ニ御座候間、御掛念被下間敷候、扱其御許之事情追々御申越、実ニ不容易時機ニ罷成、御尽力之次第千万御尤之儀ニ御座候、御苦勞之至ニ候得共、折角無油断御尽力、御国威不落様万事御配慮所希候、就てハ人数も今少し差出度御座候得共、自然藝州表之破談とも相成^{〔末〕}「(戰爭)云」候ハ、京都江も相応之御人数不指出候てハ、不相叶

訳ニも候半と存候付、甚以心外之次第ニハ御座候得共、先見合置申度談合いたし置候間、左様御心得可被下候、扱堀直より我々両人之間にて、出張候ハ、可然との趣も再応申候得共、何分一方之事ニも無之、是以見合居申候事ニ御座候、貴公御書面之趣ニも、誰そ人柄御見合相成度との段も致承知、御尤ニハ御座候得共、何分右等之人柄無多事義ハ、御案内通之事にて、決て西郷辺之処と致推考候得共、是も変階ニ望候節ハ、京都の援ニ不相備候てハ難相濟、色々心痛之次第ニ御座候、御許之儀ハ、藝州表之模様ニ寄、相変し可申哉と存申候、彼表之次第も、成程切迫之形ニハ相見得候得共、未幕習之例策欵も不被計、現在其場ニ不至候てハ、見留も出来兼可申哉、尤神原之人数さへ進兼候模様ニ候へは、千万戦ハ如何候半と存申候、戦と相成候とも、藝州表之儀ニ付てハ、枕を高くして宜候得共、其表之一件ハ何とも心痛いたし居候、五卿辺之処ハ勿論、有志輩之粗忽無之様、第一之事と存申候間、乍不申其辺之処ハ、幾重ニも程能御談合有之度、此上しつかりと条理之相立候やう無之候てハ、不相濟訳故、浮浪輩之処も動揺無之様、御尽力被成度義と存申候、扱又

京攝御届向之儀ハ、此度より書面等を以、御届被成候よりハ、堀直太郎其地より罷上り、事情色々得と相心得居候ニ付、御家老方江申出、大久保・内田等申談、御達を以可然筋江御届相成候方、可然と申談候間、其段ハ表通堀直太郎江相達候筋御座候間、左様御含取可被下候、伊集院氏・大山其外別段書通ニ不及候間、貴公より宜敷御伝御頼申上候、先は貴翰之御礼答、且御尋問可申述、如此御座候、恐々不備、

四月廿六日

(黒田文紀氏所蔵本にて校訂)

一一九 小寺與兵衛ヨリ大脇彌五右衛門へ書翰

一輪奉呈上候、時下 御安寧被遊候由、珍重奉賀上候、私儀此節櫻島ヨリ御地へ罷越居申候処、不計当所ニテ佐々木氏へ対面致候処、追々御力尽之段奉大謝候、此節太宰府へ幕役上氣船ニテ逼り申候ニ付、且亦黒田播磨・矢野相摸兩人へ割腹申候様風説モ御座候間、右等之儀歎願之為罷出居申候処、黒田嘉右衛門先生其外諸先生御出張之由、且亦御応接之御様子モ承り申候テ、大ニ安心仕申候間、佐々木氏同道ニテ馬關へ引返し申

候、乍此上御力尽奉願上候、尚又追々国許ヨリ脱走之人參候テ、大ニ御厄介ニ相成申候、万事宜敷御賢慮之程奉願候、先ハ右之段申上度、如此ニ御座候、恐々敬白、

四月廿七日

(博多變町商人石蔵卯平拜)

大脇彌五右衛門様

玉机下

二白申上候、大庭傳七ヨリ宜敷申上呉候様トノ事ニ御座候、

自長崎

小寺與兵衛拜

薩州鹿府ニテ

大脇彌五右衛門様

一二〇 小松帯刀ヨリ桂右衛門へ書翰

(久光公御上京御断其外)

一筆啓上致候、上々様御機嫌能被為入候半ト、恐悦御儀御同慶奉存候、貴兄弥御安康被成御奉職候半ト、珍重奉賀候、二ニ下拙ニモ十五日夜前ノ濱出船、翌十六日夜長崎へ碇泊、十七日夜出船、諸所汐掛等ニテ、廿一

日七ツ時分兵庫へ着船、直様上陸、夫ヨリ陸行ニテ、廿二日未明ニ着坂、直様川登リ之心得ニ御座候処、幕ノ人数川登ニ付船差支、無抛両日滞在、廿五日川登リ、廿六日京着安堵仕候間、御放念可被下候、扱出立ノ砌ハ、万端御丁寧、殊ニ何ヨリノ御品御贈被下、別テ難有御礼申上候、然ハ愛許之形勢何ソ相替候モ無御座、矢張朝議ハ御見合ニ相成居申候、乍併徳川中納言様除服御相続ノ御礼、御参内有之タル由御座候得共、何ノ御評議モ無之、速ニ御退出相成タル由、此節御召ニ付、備前・阿州・雲州・勢州・筑前・加州上京ニ相成居申候、外諸侯ハ未模様相分不申、右ニ付之事カ、一昨日中将公御召之御催促モ、重テ御達ニ相成申候、此御方様迄之御事ニテハ無之、未出京ノ模様不相分、御方へハ御達相成候様子ニ御座候、二條公ハ昨日ヨリ御参内ニ相成候由、尹宮ハ只今迄ハ相分不申候、是ヨリ形勢モ相変シ可申卜相考申候、大坂表安田金策之条ハ、随分都合能キ模様ニ御座候、近々相分可申、三井ハ弥髓ノ向ニ有之、下拙モ浪華ニシテ逢置候事ニ御座候、海軍方人数モ都合能着ニテ、別テ仕合ニ御座候、刑部殿出立ニ付、当座ニ形行迄申上候、御上京御断之御書付

ハ、昨日差出ニ相成申候、先夫迄ニテ暫ク見合候テ、大山等上京ノ上、尽力イタシ候方、可然ト評決イタシ申候、不日模様モ可相分候間、其節ハ三邦丸ヨリ誰ソ差下シ、早々形行可申上候、自然跡便早着ニ相成欵トモ相考申候得共、任便此旨早々申上候、達御聴候儀ハ可然御取計可被下候、早々不備、

四月廿八日

小松帯刀

桂 右衛門様

貴下

再白、時下随分御保養被成度、呉々奉祈候、御地如何ノ御事ニ御座候哉、何かト御配慮ノ程奉察候、宜敷御頼申上候、当地ハ寒氣モ甚敷、今日共ハ雪天ニ御座（候脱之）追々ノ寒氣込入申候、乱書御免可被下候、別紙認差出候処ニ、井上参り申出ニハ、山階宮昨夜因事掛御断御申出中、御他出且御止宿御不行跡有之、蟄居因事掛御免被仰出候趣承、誠ニ当惑ノ次第、何共切嘴ニ堪不申、最早是ヨリ弥形勢相変候ニ無疑相考申候間、外ニモ右様御下知ノ方可有之候得共、只今迄ハ相分不申候、ヲノツカラ能ク相分次第、細事ノ形行早々可申上候、未何様ノ事ヨリ起候モ相分不申候、刑部殿ニ

ハ大坂滞在故、多分出立ニ相成欵モ不被計候付、一書差出置候付、承候迄ノ形行可申上候、返ス〜モ大變ノ事ニ御座候、不備、

二〇〇二
一前断御用状別紙左ノ通

要用廉書

一土州田中健助、両三日跡鴻城罷越、太宰府辺ノ近情令承知候処、幕府監察渡海、私ノ了簡ヲ以、五卿方大坂迄御連帰仕、

天幕へ御詫申上、御帰洛被遊候様仕度杯トノ申立ヲ以、拜謁相願ヒ候処、薩黒田嘉右衛門曰ニ、幕監察タリトモ私存意ヲ以、御帰洛周旋杯甚以不及落着ト詰問ニ及ヒ候処、御内々台命ヲ蒙リ居リ候段、終ニ申立候得共、甚以曖昧タル事トテ、夫ニテハ脇四藩ハ兎モ角モ、薩藩ニオヒテハ修理大夫・大隅守父子兼テ申付モ有之、御渡シ方不得仕段断然申立、終ニ拜謁モ不得仕、先見合ト察申訊ニテ、監察ヨリ浪花表掛合ノ由、彼是薩ハ定可信事ト存居、右ニ付五卿方御直書写一通写差送り、思食確乎実ニ感服ノ至奉存候、他方ニ段々趣出来、後來ノ形勢如何ニモ難測知、只々御武備御更張ノミト奉

存候事、

一南寄脱走以来、兎角暴挙ノ萌不少、就テハ万一

御趣意ヲ忘却セシメ、其節露頭ノ上ハ、最前諸手ヲ以テ鎮靜、勿論自然手ニ余リ候節ハ、討果候テ不苦段、御布告相成リ、別紙写ノ通、集義八幡寄兵暴動巨魁

科、殊更南寄一統同断、肅然如深夜相成、多人數ノ嚴罰難忍次第ニ候得共、後來

御軍律ノ立不立ニ関係セシメ、不得止次第、泣血悲歎ノ至ニ奉存候、ケ様ノ義ゲイ藩へ篤ト御示諭、夫ヨリ

シテ列藩へ明晰相成候様、御尽力奉願候事、

一藝・幕へノ達面姓名悉可相乗筈ノ処、左候テハ彼是面倒多ク、束テ何人ハ相認候事ニテ、此段御含置可被下候、

一岩横道外記先達テ浪花薩邸罷越居、近情為報知罷帰リ(岩園力)候次第、委曲今昼大原終吉氏山御茶屋ニオヒテ、

両君上御前ニ於テ筑大夫侍御史政府一同列座ニテ、委曲承知仕、大分薩藩初メ面白様子モ有之、実ニ大義名分ノアル処、幕・長ノ行掛追々列藩へ明瞭相成、多年両君上御刻苦難有御事奉存候、就テハ幕兵ヲ輕侮イタサス、鄭重ニ戦争ニ及候得ハ、決テ御勝利御開運カト奉

存候、外記又々登坂掛御地へ立寄候事ニテ、近情委曲御承知奉存候、其中為念薩上書写差送申候事〔本〕「上書送失」

一御地東寺町室賀播磨守旅宿坊主妄養院、播磨守使ニテ岩國へ罷越候処、一切拒絶ニテ、終ニ播磨守書翰寺尾〔由根〕生拾郎ヲ以、今田鞆負〔増之〕へ入披見候次第、幕情可察可憐事其段為御達、御内々此度大原終吉被差越候事御座候、幕ノ胸算違ヒ、只今ニテ御支藩ハ更ナリ、二州中確乎タル正論有之、又兵備モ頼敷ハ岩國ニテ候処、兎角離間策モ於間〔マコ〕ニテ、幕ノ窮迫ト想像、実ニ吏無人、此決局ハ如何ノ形勢ニ立至候哉、可見事ニ御座候事、
一横道便リニ〔本〕品彌ヨリ来翰中ニ出藝、大夫方何処迄モ、内大夫御一人ニテ、被為濟候様有之度、万一モ此度ハ御手替共ニテハ無之哉、大キニ掛念仕居、其段毎日薩人ノ噂ヲ相聞申候、

四月二十九日

一一一 当時俗論ノ説（鹿兒島ニテ）

寅四月廿九日

一長州段々申論有之候得共、一円承知不致、当四月廿一日限り是非攻入トノ取沙汰ニテ候、

但肥前唐津ノ小笠原圖書頭トイフモノ、豪傑ニテ御座候、此節ハ是非長州ヲ征伐不致候テハ、將軍威光無之トテ、実ニ決心ニテ一國惣テ出勢イタシ候由、殊ニ大監察永井〔本ノマ〕ト側目付等、此迄因循モノニテ、長州ニモ往來イタシ候由、此等之儀幕府へ相知、此上ハ右様之者ヲ第一不服ニテ候、右邪魔ニ可相成トテ打果候由〔本〕、小松・西郷・吉井杯モ其期ナラン〔本〕「当時俗論多クハ如斯」

一一二 小松帶刀へ海軍掛ヲ命ス

海軍掛
小松帶刀

集成館・開成所・他国修業等掛兼、
右ノ通被 仰付候、

四月

式部

一一三 諏方數馬履歷抄

慶應二年丙寅四月十二日、特旨ヲ以テ、廣兼終身島津
 称号ヲ唱ヲ許ス、岩下佐次右衛門命ヲ伝フ、五月二日
 任滿ヲ帰國ス、五月廿三日陸軍係兼造士館・演武館・
 銃藥方・甲冑方・台場係トナル、国老桂右衛門之ヲ伝
 フ、十一月十四日職祿三百ヲ奉還ス職祿千石、島津圖書
ノ内ナリ、
 特旨ヲ以テ命ヲ伝フ、之ヲ許ス、是請ニ依テノ故ナリ、
 主上幼稚、皇國保護ノ為メ 中将久光公上京、是ニ由テ
 廣兼御用係ノ命ヲ蒙ル、且代 公首途ス可キナリ、国
 老川上龍衛久壽之ヲ伝フ、是ニ因テ三月廿五日、公ノ為メ
 諏訪・祇園・稻荷・若宮八幡・春日ノ五社ニ詣ツ、是
 レ御出発ノ旧例ナリ以下略ス、

一二四 平常軍服用フヘキ云々達書

當時天下之形勢日々変態ニ赴、近来諸所ニ戰爭相發候
 而已ナラス、長州表ニオヒテ、戰陣之姿一度御所置ヲ
 被為失候テ、戰爭相始候得ハ、天下之動乱相成候儀ハ、
 眼前之事ニ候、就テハ最早御軍役不先立候テハ、時勢
 ニ不相応之事候間、簡易之古道ニ被復、年頭・八朔・
 五節句並屹ト立候御慶事之外、朔望之御礼ヲ初、常之

伺御機嫌等、惣テ当分御定之平服ニテ不苦段被仰出候、
 第一海軍之御備組専務之時機ニ当リ候得ハ、蒸氣船乘
 付之面々ハ勿論、右ニ相拘候向鑑下・籠手・袖・半天・
 裁揚等可相用候、且御備組調練之節ハ、人々同様相用、
 其俣御殿江罷出候儀不苦候付、非常之節常服ナカラ、
 実地之用ニ相叶候様可相掛候、万事全簡易之制度ニ被
 振替候付、兼テ淳朴之風習可相励候、左候テ平日出勤
 服之儀ハ、是迄之通可相心得旨被仰出候、此旨表方江
 致通達、與掛・御勝手方ヘモ可相達候、

慶應二寅四月 右衛門桂

一二五 〔巷説〕

慶應二寅年四月巷説

此節薩州留守居内田仲之介ヨリ
 伝 奏衆江罷出、昨今京地人民之説ニ、會・薩之間
 不和ニ付、何時戰兵難計相唱、中ニハ諸道具等取運
 候者有之由、以之外事ニ候、右様之儀ハ更ニ無之旨、
 勅命ヲ以テ 御高諭相頼候旨、(以下略九)

一一六 中路権右衛門ヨリ内田・吉井へ書翰

肥後

上田久兵衛

因州

安達精一郎

備前

花房虎太郎

成田太郎兵衛

右一藩ツ、閣老豊後守様旅宿へ被召出、直ニ演話ノ趣、長防弥末家ノ内当所迄被召登、御糺問可有之御評定、先達テ已来ノ手續ヲ以、藝州ヨリ岩國へ、此度ノ趣段々寄テ、宇和島ヨリ徳山へ、右両家へ御達可有之処、表向ヲ以使差立候方可然哉ト申、同役モ有之候ハ、先御見合相成候得共、昨今ニハ定テ御沙汰モ可有之、弥両家被召登候テ、御糺問ノ上、正激ノ徒御糺明ノ上、激徒共大膳手限りニテ、追討可致哉、又ハ公辺ヨリ御追討ニ可相成哉、其上ニ長州家ノ処置可有之趣意ヲハ被仰渡、且貴藩見込等ノ儀ハ、無腹蔵承度ノ由、

御懇ノ御意有之、誠ニ以下情ニ相徹シ候御直達ニ依テ、三藩共ニ不一方感服致シ、斯迄御寛大ノ御処置ニ被為在候上ハ、主人始私共ニ至迄、何ト見込等モ可有之哉ト致言上退出、

右ノ通今日聞キ伝仕候、依之申上候、已上、

中路権右衛門

内田仲之助様

吉井幸輔様

一一七 道島家記抄（民間ノ説交々）

此度將軍親征ニ付テハ、実ニ名ナキノ軍ヲ起シ、上ハ乍恐

天子ヲ欺キ、下ハ万民ヲ苦シメ、此節ハ勿体ナクモ天子ヲ奪ヒ、紀州和歌山、又ハ逆賊彦根ノ城ニウツシ奉ラントタクミ候由、我々共ミルニ忍ヒス、不日ニ義兵ヲ山陽・山陰・南海ニアケ、都ニノボリ奸賊ノ首ヲ鋒ニツラヌキ、淀川ハ血水ニナシ、湖ハ逆徒ノ首ヲ以テウツムル覚悟也、有志ノ士ハ早ク旗ヲ揚クル処ニ参兵アルヘキモノ也、

二二八 小松帯刀へ達書

小松帯刀

右御勝手方其外御用向多端ノ儀付、御家老方月番承候儀、御免被仰付置候得共、外ニ同様繰廻、月番承候様被仰付候、

四月

右衛門

二二九 黒田嘉右衛門ヨリ桂右衛門へ書翰

(太宰府ニ於テ云々)

二二九ノ

其後は御左右不承候得共、弥御壯健奉敬賀候、随て僕無異相勤居申候、爰許之形勢ハ追々御聞及被下候半、(朱ニ小林甚六郎等)幕吏来着五卿奪取之儀を謀り、当藩初外三藩何れも其儀を賛成し、既ニ事情切迫之折柄、僕等参着候て、断然不相渡議論を発し、幕吏を拒ミ四藩之因循説を相挫候処、先当分ニテハ幕役も胆氣沮喪之姿ニ相見得、五卿方へ面会之儀ハ、取止候由ニ有之候、乍然猶二日市宿へ滞在、永屯之模様相聞へ候付、又如何なる姦策隠

然相施候哉も難測、四藩之挙動も甚疑敷、表向ハ僕等之議論ニ對抗難致、尽く屏息之形ニ候得共、追々人数等相嵩、何分不審之形迹不少、因て先便御問合申上越候通、大砲二三挺速ニ被差送候様、御取計被下度、左候て猶又人数も被差出候御吟味ニ候ハ、何卒俗論等相唱さる壯年剛銳之輩、能々御精撰相成、被差越候様有之度、爰許ニ於て、同藩中議論紛々相立候様有之候てハ、愈々混雑之基、既ニ先詰人数之中ニハ、少々異論相唱候輩も為有之次第ニ候ニ付、旁事情篤と御洞察被成下度、此節召列来候諸郷人数ハ、都て番兵ニ出張致し居候者共故、殊之外品行宜く、是迄之淫柔懶惰之風習を一変し、毎日陣屋庭ニ於て砲術調練、且劍・鎗之武事を講習致させ、頗ル盛ンニ氣勢を張罷在候ニ付、尚又番兵之内より御差遣し相成候様有之候へハ、無此上都合之事と奉存候、且又此節唯々人数被相嵩候よりも、誰そ御重役之御方暫く御出張相成、当藩君公且幕吏へ御国論御立込被成候てハ、如何可有御座哉、然時ハ幕役は勿論、諸藩挙ツて靡服可仕ハ必定之勢ニ有之、此節之儀、乍恐御国之信義を天下に示す之大機会と愚考仕候間、為御合此段も申上候、扱藝州表之情況も、詳ニハ

相分り不申候得共、来ル二十一日限、大膳父子嫡孫迄も
出藝可被致、自然病氣等ニテ其儀不相調節ハ、末家一
門之内より出藝有之候様御達相成、此節出藝無之ニ於
テハ、屹と御征伐可被成ト之趣ニ相聞得申候、然処藝
藩ハ伐長之儀不可然旨建言いたし、榊原家も長滞陣ニ
疲弊いたし候間、引払願差出候由、長州よりハ決して
出藝ハ致す間敷、此末如何成行可申哉、幕吏之失策笑
止之至ニ候、此旨承得候俣早々形行申上越候、以上、
但当地へ幕吏乘来候蒸氣艦ハ、于今博多へ碇泊いた
し居候由ニ有之候、

寅四月

黒田嘉右衛門

桂 右衛門様

(黒田文紀氏所蔵本にて校訂)

二九ノ二
將軍長州征伐モ、攻入之儀モ、無口能候得共、左候へ
ハ長州最負ノ国々モ有之事、大粧ニ可相成候間、不戦
シテ五六年モ相掛候、長州ヲ屈シサスル急勤候半カノ
由、